

---

# 神様モドキの異世界旅行

ほえほえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様モドキの異世界旅行

### 【Nコード】

N8348W

### 【作者名】

ほえほえ

### 【あらすじ】

「お前はアソコで死ぬハズじゃなかった。」  
イキナリ現れたギャル男と知的美人のあんまりにもぶっ飛んだ説明は？あたしが世界を跨にかけた事故に巻き込まれた？しかも宝くじ一等当てるよりも低い確率？しかもその所為で世界が歪んだから「消滅」してくれって！？

「でもソレですとあまりにも貴女が不憫なので」

「ぎゃーぎゃー喚くなほら逝って来ーい」

ちよっ、待てコラてめえ等話はまだ

ああああああああああ

ああ!?!?!?!?!?

名前も姿も生きていたという事実すら生まれ育った世界から『消』された彼女は、自称管理者の2人に欲しくも無い『ご加護』を押し付けられ。

拳句に世界から蹴り落とされて、辿り着いた先は何と!!

夢見てた二次元がまさか現実になるなんて。こーなったらもー開き直って楽しんでやるさこんちくしょー!!

そんな彼(?)の冒険、始まります。

1・振り返ってみればなんともはや（前書き）

\* ち う い \*

作者は二次創作にも夢小説にも手の出した事がある腐女子です。

よってソツチ系な雰囲気の色濃く出ます。

そして自己満足の気配がそこかしこから沸き立っています。

「あ、ダメだ」と思った方はどうかスツパリバックブラウザないしウインドウを閉じて忘却して下さいませ。

1・振り返ってみればなんともはや

「……………どうしてこうなった。」

頭に浮かぶのはコレだけだ。

いやいやどーゆー経緯でこーなったかは不本意だけでも理解はしたつもりだし提案を断れば世界が危ないしでもソレは向こうの言い分でホントのとはどーなのか怪しいんだけどさけど向こうがわざわざそんな嘘を吐く理由なんて無いしだってソレならあたしを助けるなんてソレこそわざわざな手間も多手間になるんだからでもねん。

「……………どうしてこうなった。」

ポー然。

そんな感じで呟いたあたしの目には。

手鏡に映る、これまたポー然とした顔の超絶美青年。

「……………どうしてこうなった。」

あたしは、ついさっきまでの事を脳内で引っくり返した。

くくくくくくくく

目が覚めたら真っ白でした。まる。

……イヤあたしの頭の中がじゃないよ。周りが、だよ。

右見ても左見ても、前も後もついでに上も下も何も無い。  
真っ白な空間。

そして目の前にいたのは。

「お。目え覚めたか」

色白金髪紅いカラコンの、どっからどう見てもギャル男な美青年。

「……………ドチラサマ？」

「俺か？俺は神様。」

……………頭大丈夫かコイ

「失敬なヤツだな俺は至って心身ともに正常だ」

おっひょう！？

ちよつと待てもしかして今あたしの考え読まれたのか！？

「そりゃ神様ですから。思考読むなんて朝飯前？」

いーやー！！プライバシーのしーんーがーいー！！

つか何でそんな事出来るのこのにーちゃん！？

「にーちゃん違え神様だったの」

「……………また読まれた……………」

……………ま、イイヤ。

こんなのどーせ夢だ。取り敢えずこのギャル男が自称神様だって

百歩譲って納得するとして。

「お前ホントに失礼なヤツだな。自称じゃねえし百歩も譲るな。ソレに夢じゃねえって。そりゃ現実逃避したいのは解るけどよ」

「だから勝手に人の考え読まないで。つかその（自称）神様が何でココに。てゆうかココどこ。」

「あれ。お前覚えてねえのか」

「……………何を」

「お前原付で走ってる途中でスリップして対向車線上にすっ転んでトラックに轢かれて即死したんだよ。ちなみにココはあの世とこの世の境目な」

頭が真っ白になる、ってのは。

こーゆう時にこそ、ドンピシヤな表現なんだろう。

「……………は？」

思わず間抜けた声が漏れても仕方ないと思う。

まぢですか？てな具合に。

「おおまぢです。」

しかも真面目な顔で返答返ってきた！

「え、まぢ？本気と書いてまぢと読む、あのまぢ？」

「おう」

いーやーあー！即死！？あの世とこの世の境目！？

しかも何そんな運の無いアホの子みたいな死因！？

「アホも何も事実だし。つか突っ込むトコはソコなのか」

「当り前だよ行かず後家のまんま60前後で寂しく孤独死は想定してたけどまさか事故で死ぬとは思わなかった！！あたし免許証ゴールドなのに！！」

つかまた考え読んだなっつ！！

「夢の欠片もねえ想定だな。ソレに読んでんじゃねえお前の心の声がデカ過ぎて聞こえんだ。仕方ねえだろが」

うつさい結婚なんて人生の墓場さ。

家庭に縛られるくらいなら、1人寂しくても自分の好きなよーに生きてくさ。

つかあたしの所為か、所為なのか。心の声ってどーやってちっさくするんだ。

「……はあ。まあ、本人が納得してんならいいんだけどよ。あと心の声は強く思わなきゃデカくならねえから。つっても俺神様だからどんな大きさの声でも拾っちまうけど」

……ちっさくしても意味ないやん。

まあ良い。ソレは諦めよう。

てゆーか。

「あたし死んでココがあの世界とこの世界の境目って事は、オタク死神様の類？あたし迎えに来たの？」

「いんや管理者。取り敢えず陽とでも名乗っとくわ。管理者にや本来名前なんざねーからな。コレでも世界意志を遂行する、神の中でも最上位に位置してる……って信じてねえだろお前」

「いえいえそんな事ゴザイマセン。」

まさかこんな今時のギャル男っぽいのが、最上位の神様なんて世の全ての神様崇めてる人達に謝れ、なんてこれっぽちも思っていないよ？

「……………」

あ。沈黙した。

「まいーや……つかお前死んだってのにふつーだなー。もつとこー、混乱とかしねーの？」

「混乱？何で？」

「だってあたし死んだのに。」

「いやうん確かに死んでつけど。ふつーイキナリはいお前死にましたー、て言われたら何で！？とか死にたくない！！とか喚かねえ？」

「……うーん。何で、つってもねえ」

そりゃ通り魔とかに襲われてオダブツ、て原因だったら何であたしが！？ってなるけど。

でも老衰とか不治の病とか自然災害とか事故なら仕方ないってゆーか。

ソレにもー死んじやったのに今更死にたくないー！！って喚いても、ねえ？

「……はー。さばさばしてんのな、お前」

「そんな事ないよもーすつごい未練たらっ！！たら！！だよ？」

うんホントに。

主にあのゲームクリアしてないとかあのマンガ終わってないとかでも死んじやった以上は泣き喚こうが暴れ回ろうが死んだままっしょ？

「まあそーだな。死んだモンを生き返らせるなんざ神でもやっちゃいけねえ禁忌だかな」

「あ。禁忌なんだ。」

そりゃそーよね。

まあそんなワケで、混乱も喚くのもするだけ無駄なら別にやんな

くてもいんじゃないかね？って思ってる。

「確かに。」

「うん。んで？なんでその管理者ってのがこんなトコにいんの？」

ふつー、死んだ魂を回収するのって死神様のお仕事よね？死神がホントにいるのかどうかは知らないけど。

「ああ、いや。お前捕まえに来た」

「……………はい？」

「だから。お前捕まえに来た」

「待て待て待て待てちよつと待てい。」

あたしコレでも世間一般ふつーのおばちゃんよ？

大量虐殺者でも猟奇殺人者でもないよ？

神様より偉い人がわざわざ捕まえに来る様な事なんて生きてた時なんつもしてないよ？

「ああ、生前の事で捕まえに来たんじゃねえ」

「じゃナニさ。」

言っちゃ悪いけど死んでからも何もしてないよ？

だっつてついさっき起きて（？）自分死んだって知ったばかりなんだし！！

「まあな。死んでから何かしたワケでもねえ。問題なのは、お前の死に方なんよ」

「……………はい？死に方って、すっ転んだ上にトラックに轢かれて、っていう？」

「そうそ」

「ソレのドコが問題？」

そりゃあたしも何て運の無い、て思うけども。  
けどソレだけっしょ？

ほんつと笑えんコントとかマンガみたいな死に方だけど、あり得  
無くもないっしょ？

「いや、その笑えんコントみたいなのが、原因なんよ」

「だから何で。」

「だってお前、ホントならアソコで死ぬハズじゃなかったから」

.....頭が真っ白ぱーとっー。

「.....え？」

「だから、お前はアソコで死ぬハズじゃなかったんだ。トラックに  
轢かれるハズじゃなかった。ソレ以前に、スリップして対向  
車線上にすつ転ぶ、ハズじゃなかったんだよ」

.....な、に？

この人、じゃない神様。今、一体何を言ってるの？

「命にや大体道筋がある。どうやって生まれて、どうやって生きて、  
どうやって死ぬか、だーいたい決まってるんだ。お前はホントなら、  
数年後に結婚して子供ほぼんと3人産んで、60前後で病死、する  
ハズだったんだ。けど 間が悪いっつーか何っつーか。丁度ち  
よっとしたトラブルがあつてな。本来アソコにいないハズのモンが  
アソコにいて、その所為でお前は絵に描いた様な間抜けな事故で死  
んだんだよ」

え？は？え？

「.....ナニそれ？」

トラブル？

本来アソコにいないハズのモノ？

ナニそれ？何なのそれ？

っじゃあ何か？あたしが死んだのは間違いだっただって事？

ホントに読んで字の如く死に損ってワケ！？！？

「そーゆーこつた」

「~~~~~つつつ！！」

何だソレ何だソレ何だソレ！！

どーゆー事よそんなアホらしいトラブル何で死ぬハズじゃなかったのにあたし死んでんのよ！？

「ソレは私からお話します」

「ふえうおあ！？」

ダレ！？

つかどっから出てきた！？

ってあたしの背後！？何時の間に！？！？

「いや、ソイツお前の後ろにずっといたぞ？」

えっまじでっ？

まぢまぢ見てみたのは1人の青年。何だかコスプレっぽい民族衣装にも見える。そんな服を着た、紫の髪と目をした。

その人は、あたしを見てにつこり微笑む。

「はい、まじです。まあソレはさておき、貴女が死んでしまったホントの原因ですが。実は貴女の乗ってた原付に、アヤカシがイタズラしたからです」

あやかしっ？しかもイタズラっ！？！？

何でそんなんがいのつかほんとーにいたのそんなんが！？この

近代技術わんさかな時代に!?

「や。ホントならいねえ。」

ハズ、なんだけどな。コレが、

さっき俺の言ったトラブル、だ」

「……ほえ?」

コレ?トラブル?アヤカシがいる事が?

「ああ。俺の管理する世界、というか地球上に人外の類は、まあ少しくらいは存在してるっちゃしてるが、何せ数が少なすぎる上に人間って種族の厄介さを知ってるからな。人の住処にはぜってえ出てこねえハズなんだよ」

……じゃあなんであたしはイタズラされたのさ?

「ソレはですね。貴女にイタズラしたのは私が管理する世界のアヤカシだからです」

……は?

「あ。ソイツコツチの世界のヤツじゃねえから。他の界、所謂異世界の管理者だ」

「はい。異世界の管理者、一応サプレスとでも名乗っておきますね。私の世界にも人間という種はいましたが、ちよつと昔に滅んでいきます。その代わり、貴女の言うトコロの悪魔とか鬼とか物の怪とかいうモノが、未だにコチラの世界で言うトコロの戦国乱世を繰り広げてます」

……うわお。

妖怪大決戦みたいなモンですか、もしかして。

てゆうか、ソレとコレとどーゆうご関係が?

「はい。実はその戦乱の最中にですね、ドコぞの阿呆と馬鹿が途轍もなく大きな力と力をぶつけ合ってくれやがりました。そのお陰で次元が歪んでしまったんです。まあさっさと修正させて頂きましたかね」

はあ。

「で。さっさと修正はしたんだがよ。その歪みにや、実は巻き込まれた魑魅魍魎共がいてな、他の世界に跳んじまったんだと」

「……………えー、と。」

ソレって、つまり？

「貴女に悪戯したのは、その時他世界に飛んでしまったアヤカシです」

「……………うーわーあ。」

コレまたスケールでつかい話になってきたね。

「……………ソレだけ、ですか？」

んえ？何が？

「貴女が死んだのは、私の世界のアヤカシの所為なんですよ？つまりは、世界を管理しきれなかった私の所為でもあるんです」

いやいやいやいや。

「アンタん所為じゃないっしょソレ。むしろそのアホとバカの所為っしょ。しかもそのアホとバカにしても、ワザと、ってワケじゃなかったんっしょ」

つまりは事故？っしょ？

「……………まあ、その通りなんですが……………」

「だったらあたしがアンタに言う事はなんもないさ」

車は急に止まれないってゆーし。

まあ、そのアヤカシには一言どころかがつつり恨み事言った上にぎったんぎったんのめためたにしてすぺぺいってしたいけど。

「……………何と言っか……………」

ん？何？

「……………ホントーに、さばさばしてますね、貴女」  
「だな」

「や、だって。死んでからそんな事言われても」

ギヤル男がさつきも言つてたじゃないか。

死んだモノを生き返らせるなんざ神でもやつちやいけない禁忌だつて。

だったら、今更ぎやーぎやー喚いても、あたしは元に、戻らない。  
……………生き、返れないんだ。

「て、ゆーか。ソレが何で巡り巡ってあたし捕まえるって事になったの？」

むしろ今後の問題に取り組むべきでせう。

……………や、死んでるのに今後も何もないんだろーけど。

「ソレはさつきも言っただろ。お前が死んじまったからだよ」

「や。だから」

何で死んじやったからって捕まえるに？

「お前の死が歪みになるからだ」

……………は？

思わず顎がカククン、てしそうになった。何故だ。何故そんなモノにあたしがる。

「お前が死ぬのはまだまだ先だった。数年程度の誤差なら修正も出来るが、30年近く開きがあるとその修正もできねえ。だから今、お前をあの世に受け入れる事ができなんだよ。んでもって、あの世に受け入れられなけりゃ転生もできねえ。かと言って生き返らせるなんざ言語道断。さつきも言ったが死を覆す事は神でもしちやならねえ禁忌だ。オマケに放置もできねえ。お前は異界の要素と接触し

ちまった。なのに放置なんて、んな事したら歪みがどんどん広がってちまうんだ」

「……………じゃあ。

じゃあ、あたしは。

あたしはコレから先、どーなの？

「『貴女』を消させてもらいます」

「……………は、い？」

ヤサ男の静かな言葉は、理解するのにしばらくかかった。

ちよつと待て。すっごい物騒な単語だったぞ。

あたしを、『消す』？

「ああ。お前が存在していた事を消して、お前が死んだ事実を無かった事にする。コレから生まれてどんどん広がってく歪みより、ちつと骨だがソツチの方が確実安全なんだ、世界にとっては。生まれた事実も無くなっちゃうが、何も無いトコに歪みなんざできねえからな」

「……………そ、れって」

ざあ、つと血の気が引く思いがした。

ソレって、あたしに、死ね、って事？

自我とか、心とか、魂、とか。そーゆー、あたしがあたしである為の元をひとつ残らず消して？

あたしに、何も残さず、文字通り消滅しろ、って？

そっいう、事なの？

「ええ、その通りです」

っ嫌だ!!!

何でっ、何であたしが!!

なんで!?

なんでソコまでされないといけないの!?!?

「……………ソコまでしねえと、世界が崩壊するかもしれないんだよ」

「っっ!?!」

息を、呑むしかなかった。

崩壊って。世界、世界が、崩壊?

何で、そんな大事になるの。

「お前の歪みは、ソコまでの危険性を孕んでんだ。納得しろとは言わねえ。けど『お前』には消えてもらう」

バツサリ。まさしく一刀両断。希望のキの字も見当たらない。なんて理不尽。

コレは、コレは怒っても良いはずだ。あたしにはその権利がある。だけど怒れないのは。あたしがいる所為で世界が崩壊するかもしれない、なんて。イキナリずしんと重くのしかかってきた言葉の、所為か。

消滅。ソレはどんなのだ。怖いのか。痛いのか辛いのか。ギャル男は転生って言葉を出した。死んでも生まれ変わるんならまだ良いけどソレすら出来ないってあんまりじゃないのか。

嫌だ、消えたくない。でもあたしがいたら崩壊する。何で。嫌だいやだイヤだどっちも嫌だ。

ぐるぐる。思考が渦巻く。何であたしが。何で。どうしてこんな事に。何でなんでナンデ

「まあ、物事の捉え方等は少々変わるでしょうが。表面上に変化はあまり出ないと思うので、安心して下さい」

「……………は？」

ニコヤカ〜に。言われた言葉に目が点になった。

はい？ソレって、どーゆー？

「フ〜ワケで。どんな力が欲しいよ？今なら大出血サービスで3つまで特典希望聞いてやってもいーぞ？」

「ああ、でも私の『加護』だと私の特色も出てしまいますけどソコはご了承下さいね？」

「あー、確かに出そうだな。羽根とか。俺の魔眼の特色も出るんだろーなあ」

「え、ちょ、え？え？え？」

ま、待って。ねえちょっと待って？

カゴって何。どんなになりたいって？

一体なんのお話デスカ？

「ん？お前を消す話だよ」

いやだから。

「あれ、もしかして文字通り『消滅』されると思っていました？」

え。違うの？

「いやいやいや。いくら何でもソレはしねえって。例え事故とはいえ、サプレスはアヤカシが何かする前に自分の界に戻さなきゃならなかったのに、ソレがでんかかつたし。俺も俺で何か影響出る前に捕縛なり何なり手え打つとかなきゃならなかったのに、間に合わずにお前っていう被害が出ちまつたんだから」

「ですので、私と陽から『加護』、まあ力の一部を貴女に受け取っ

てもらいます。何故なら、ただ貴女を私達の力だけで変質させるだけでは、この世界の『貴女』という存在は消せても、貴女という異分子が残ってしまって世界が歪む可能性があるからです。だから私達の力の一部を取り込んでもらう事で、この世界の理が及ばない貴女になってもらうんです」

……………ええええええ？

あたしに、ご加護？オタク等の？  
なにソレおいしいの??

「さあ？管理者の力の一部を『加護』として取り込んでもらうから、階梯やらは神位並にグンと上がるだろうが。だからってホントに神になるワケじゃねえしベースは人間だ。そんな損にはなんねえと思っぜ？」

……………か、神様並って……………

あたしとしては、ふっつー（強調）、の人間のままでもいいんだけど……………

「ソレは無理ですね。貴女の死は、本来他世界に干渉する権限を持たないモノによって引き起こされたモノ。貴女を只人のままに残すという事は、歪みが起こる危険性を孕むだけでなく、他世界のモノと接触してしまっただが故に、ふたつの世界が混ざり合ってしまう接点になるかもしれないんです。ですので貴女にはココできっぱり世界意志から離れて貰う為に、世界の干渉を受けない私達管理者と同等の力を少しでも持って頂かないといけないのですよ」

……………やー。なんかワケ分かんなくなってきた……………

「つまりお前に拒否権は無えって事だ」

……………えー。

「えー、じゃねえ。今回の事はそんだけ大事なんだ。お前も潔く諦める」

「……………うー。でーもーなーあ。」

「……………はあ、仕方ないですね。そんなにイヤでしたらもうひとつの手を使わせて頂きます」

ん？なにになに？

もうひとつの手？

「なんか他にも手があんの？」

よっしゃバツチ来い、とサプレス（仮）に向き直った。

そしたら、なんだかすつごくイイ笑顔。

……………あ。何だかヤな予感。

「ええ 説明して納得してもらった上で変わって頂くなんてまだるっこしい事はせず、さくつと実力行使させて頂いて事後に承諾して頂きます」

「だな。もーメンドクセーしソレでいつか」

へ？ ちよ、ま！？

「待ちません」

って何であたし頭鷲掴みされてんの！？がしっつて鷲掴みされてんの！？

ちよ！！待って待って顔近 ……！？

ぶच्चゅうううううううー！！

ぶぐつつ！?!?!?

むー！ー！つつ！?!?んむー！ー！つつ！!!

ごっくんつつ。

きゅぽんつ。ぺいつ。

「はい私の方は終わりですお疲れ様でした」

「んじゃ次俺な」

っっぜーはーぜーはー。

……な、何だ何だったんだ今の一体何でイキナリまっすとう  
まっす

って!？何オタク何その手!？なんで指わきわき!？

「問答無用!」

がしっ!!--ぶっちゅっうっうっうっうっ!!--

むぐうっうっ!?!?!?

ぐむー!!--っっ!?!?うんむむむむー!!--っっ!!--

くっくっっ。

きゅぽんっ。ぺいっ。

「うし。コツチも終わりだ」

……っっうっうっ

なんか飲まされた……ごっくんしちゃったよあたし……

……待ってって言ったのに……言ったのに……

……しかもなんでまっすとうまっす……

「あ。早速馴染んできましたよ。羽根が生えてきました」

「……ふえ?ってぎゃーナニこれナニこれナニこれー!!--

!!--っっ!?!?!?」

感心した声に背中を見てみたら。

ソコには人に生えるハズの無いモノが!!--

「何って、さつき飲ませた私達の力の一部が貴女の魂に溶け込んだ  
証拠みたいなものですよ……ふむ。無色透明ひふみの……22枚で

すか。コレはかなり上位の階梯にまで上がりましたねえ。エーテルの総量だけ見れば私より上行ってますよ」

「おー、そーだなー」

「はいい！？じょうい！？今上位って言った！？ねえ言った！？」

「おう。俺等の属神ポジションに納まるかと思いきや、世界の一柱任せても良いくらいに上がった。お前の元の魂がそーゆー性質だったんだろーなあ。喜べ、レアだぞ？」

「両眼も変わりましたね。コレは……ああ、朱金と青銀ですか。コレまた随分な魔眼引き当てましたねー」

「はいい！？！？しかも魔眼！？魔眼って言った！？ねえ言った！？」

「おう。どっちも魔眼の一種だ。氣の流れを視る朱金と、魔の流れが視える青銀。しかも視えるだけじゃなく任意で解析、干渉、操作まで出来る。コレまたレアもんだな」

「……………そんなレアもんいらんわー！っ！っ！」

コレじゃあたしホントに人間やめちゃいました、てへっっっじゃないかー！っ！っ！

そりゃあ若い頃はチート貰って異世界トリップ黄金ぱーんとか良く妄想してたけど……！

つか未だに自分でドリー夢書いてるけども……！

「今軽くオタク宣言したな」

「ええ、しましたね」

うっさいオタクがそーそー真人間に戻れるか……！

「つか、ちょ、ナニこれ何とかしてよねえちよつと……！」

ばさばさばさ。

感情に連動してるんだろっ、慌てたあたしの至る所に生えた羽が動く。

「あ、その羽根肉体の一部というより貴女から漏れた魔力やら霊力やら氣力やらが実体化しただけなので。力が身体の内部を循環するイメージをすれば簡単に消えます。だからまず落ち着いて下さいね？」

「……お、おつちけーおつちけー。」

「こーゆー時はひっひっふー。ひっひっふー……って違うー！マズは落ち着くのよあたくし！！」

「落ち着いてー。身体ん中ぐるぐるー。ぐるぐるー……あ。ホントだ消えた。」

「スゴイよあたしやっぱリアンタはやればできる子！！」

「や。子って年でもねーだろ」

「うっさい。……つか、コレだけ？」

「いやコレだけでもじゅーぶんブツビだけど。」

「なんか、羽根生えて目の色変わった以外なんも変わりが無いよーな……いやソレでもじゅーぶん人外だけど。」

「そりゃ、今は取り込んですぐだからな。完全に混ざり合って馴染むまでにやまだ掛かるだろうよ」

「……いえ、如何やら彼女、もう既に完全に馴染んだ様ですよ」

「……ほへ？」

「ああ？マジでか。お前ホント、染まり易い魂してんなー」

「いえ、と、いうより此れは……」

「んあ？……あー、苗床、か？」

「の、様ですね……ああ、其れで魔眼もこの2種なんですな」

「いやいやいやいや。」

「ナニ2人だけで納得してんの。」

「いやー、サスガ、オタクの根性はすげーなー、と」  
「……………はい？」  
「どーゆー意味さ。」

「まあまあ、あまり気にせず」  
「いやムリっす。その含み笑いすっげ気になるっす。」  
「いやいや。ホンツト気にするホドの事じゃねーっつて。つかそろそろ先に進ませてくれ。俺もそんなヒマなワケじゃねえんだから」  
「ですね。私も陽の界に落ちてしまった者達の回収は終わりましたが、他の界がまだなので色々忙しいですし」

……………え。

サラツと言われたセリフに固まりましたよ、ええ。

「まだ回収終わってないの？」  
「なのにだいじょぶなのあたしなんかにかまってて？」  
「もしかしたらあたしみたくなるハズのない事故とかで死んじゃったりする人とか、出てくるんじゃないの？」

「ソレは大丈夫です。取り敢えず他の管理者達への先触れは終わらせてますし。陽の界の様に、ある程度成熟していると制約や縛りも厳しいんですが、私の界はまだ若いので、何かしでかしそうなら最悪消滅させてしまっても大丈夫だと許可も出してますし」  
「被害に関しても、取り敢えず現時点で判明してんのお前だけだからよ」

「ええっつっ!？」  
「あたしだけ!?もしかしてあたしホンツトに運悪いの!？」  
「悪い。トコトン悪い。犬に噛まれるどころか宝くじの1等賞に当たるよりも確率低い」

「だからこそ私達が出張ってきたんです。あまりにも貴女が不憫で」  
「……………へう。」

へ、へ「む……

「納得したか？ならさくさく行くぞ？つか逃げ？」

「いやいやいやいや待って待って待って下さい！？」

「思わず突っ込んだ。

でも仕方ないと思うんだ、うん。

だってさ。

「んあ？」

「何です？」

だってナニその逃げって！？字違わない！？

「いや、ある意味正しい。なあ？」

「ですね」

だから何で！？

ってゆーかイキナリ出てきたその黒い穴ナニ！？

なんか地獄の入口っぽいおどろおどろしさなんですけどっ！？

生き返りも転生もできないから違うのに生まれ変わるんじゃないのあたし！？

「あ。お前地球には戻れねえから」

「……………は？」

頭が真っ白ぱーとすりー。

思わずビキンッと固まったあたしに、だけど2人は止まらない。

「貴女には陽の世界でも私の世界でもない、他の世界に行って頂きます」

……………へ？

「『お前』を消した上、存在を根本から覆したと言っても、安心は出来ねえからな。ま、万一に備えて、だ」

「幸い世界には色々、本当に色々、『異世界からの人間がたまに現れる』という伝承を残す処が多いですから」

「そんなのひとつにランダムで落とす」

「ちよつと待てえい！！」

コレ以上やったらホントに事故死その後異世界トリップ黄金パターンだつてば！！

とゆーかムリ！！そんな右も左も解らないトコに落されたつてあたし生きてけない！！

「大丈夫だ。俺からの『加護』はアークと魔眼と知識。そーそのたれ死ぬ事はねーって」

「因みに私からの『加護』はエーテルと翼と技術です。生半可な相手では戦って負ける事もありませんよ」

つてナニそののたれ死ぬとか戦つてとかつっ！！

ちよつと待つてもしかしてそんなのがふつーにある世界なの！？

やめてよあたし平和主義者！！戦争も経験した事ない現代っ子！！

いつ、いやいや待つて下さい！？ナニその手！？なんでわきわき

！？ねえわきわき！？

「だーから。サスガに捕まえてそつこー蹴落とすのは不親切だからつて力をやつたんだろ？」

「ああ、名前は変えて下さいね？でないと『貴女』が完全に消えた事にならないので」

「因みに外見に関しては、『俺等の加護を受け取って変質したお前自身の魂』から形成されっからな」

「まあ。階梯は上位、智・技・体も最上。ドコに落ちても大丈夫でしよう」

「だな。着いた瞬間魔獣に襲われようが、即死ルートは回避出来そっだ」

「怖い事言っただけ！すっごい怖い事言っただよこの人達っじゃない神様達っ！？」

「って、やめて待ってホントすとっぶいやちよっぎゃー！ー！ー！？！？」

「ぎゃーぎゃー喚くなほら逝って来ーい」

「新しい人生悔い無く生きて下さいねー」

どげしっ。

「ちよっ、待てコレでめえ等話はまだ

ああああああああ

あああ！？！？！？！？！？」

しかもいつてこいの字絶対『行』くじゃなく『逝』くだっただろ  
おおおおおおおおお！！

ろお

ろお

ろお

.....そんな感じで、あたしはイキナリ出来た黒い穴に蹴り落とされた。

ちくせう。あいつ等今度会ったら絶対殴る。

相手は上位の神様？はっ、知るかそんなん！！

）．．．．）

そして次に目が覚めた先には広がる樹海がありました。

……ナニそれイキナリ死亡フラグ？

思わずがくつと頂垂れたあたしは悪くない、悪くないったらない。

くそう。どーせだったらどっかの王様の前とか魔王様の前とか皇子様の前とかつ。

王道だったらその辺でしょー！？

………や。現実的に考えればソレこそそっこーで首ちよんぱじやない？

イキナリ空とかから降って来たアヤしさ爆発な人間。下手すりゃ暗殺者と間違えられかねない。今まで色んなサイトさんで色々読み漁ってきたんだ。貴族は平民をおんなじ人間だとも思っていないヤツが多い、ってのは、アンチ設定が入ってなくても多い多い。

現代でも「コレだから学歴の無い人間は」ってのは多いからねえ

……

ソレにしても、ココ、ドコだろ。

前を見ても後ろを見ても右も左も緑みどりミドリ。

うん。森だ。しかも多分、ど真ん中だ。

ぴーひよろろ、とかどっかで鳥が鳴いてる。時々ぎゃあぎゃああ、

って鳴き声も。  
うん。森だ。

……はあ。

霧困氣的にイヤな感じはしないし明るいし。視界を巡らす限り、見える場所にも感じるモノも何にもないけど。

これはちょっと、ないんじゃないでしょーか？

王様の前とか、せめて町のだ真ん中だとかに落して、とはもう言わないけど……だってそんなん明らかに不審者だ。

けどせめて、人のいる場所に近いトコに落して欲しかった。まあ今となっちゃ文句言いまくりたいヤツ等は遙か彼方なんだろうけど。

だから何時までもぐちぐち言ってたって仕方無い。  
まあ取り敢えずは。

「ドコまでイけるか試してみますか」

森だから食べられる木の実とかいつこぐらいあるだろうし。

木の実無くて兎か鳥でも狩れば……うん、頭ん中漁ってみたらあった。サバイバルに役立ちそーな知識が。しかもその中には捌き方も入ってた。

多分コレがギャル男のくれた知識とやらなんだろう。あつて良かったと思うホントに。

こんだけ緑豊かなんだから、水場だつてあるハズ。魚の三枚おろしはけっこー得意。こちらら小学生の頃から母親に家事手伝わされてたんだ。自炊生活20年近くを舐めるなよ？

「あ。でも包丁持ってない」  
思わず呟いて頭の中で思い浮かべたら  
目の前で、ホントに包丁が出現してサクッと地面に突き刺さった。

……………ちよ、つと待てーい。

これは我が家の切れない包丁じゃないか。この青い取っ手。間違いない。

知識の中を漁る。何でこんなのがイキナリ出て来たのか。その理由を。

そしてソレはそっこーで出てきた。

ふうん。ヤサ男の技術のひとつ、魔力の具現化、造魔の力、ね。

しかも1回でも見た事のあるモノ、知識にあるモノなら何でも具現化させられる、ってか。

……………何だその某守護者の投影魔術みたいな魔法は。

しかもあたしの魔力はほぼ無尽蔵、思い浮かべただけで魔力がホントに物質になるなんて。

力のセーブ、憶えなきゃなあ。でないとホント、ちょっと考えただけでぽこぽこ作ってしまいそう。

まあだけど、コレで捌く為の刃物はゲットした。

次は食材だな、と。刺さった包丁に手を伸ばしたトコで。

……………あれ？

あれあれあれえ???

伸ばした手が筋張ってる。

てんでんでん、と視線を動かして、肩……………の前に目に付くハズの

胸の脂肪が、無い。

更に、何も付いてないハズのトコに、なんかイヤな感覚。  
そしてなんで目に入ってきた脚が、素足？

思わず自分の身体を見下ろす。

……………いや、うん。

そりゃ自分コレでもおばちゃんって言われる程度には生きてきたし  
生娘でも無いから？

チチが真つ平らとか脚の付け根にぶらんぶらんとか。

きゃあ、なんてカワイイ悲鳴上げて恥じらう事もしませんが？

……………なぜにまっぱ？

……………そしてなぜに男？オス？MAN？ほわい？

ホントに身ひとつで落としてくれやがったのかアイツ

等！！

ココまで色々してくれたんだから服くらいオマケしてよ！？

ちよ、気付いて良かったすっごい良かった！！

コレでホントに王様の前とか町のご真ん中なんか落とされた日  
にや露出狂変態扱いだよ！！

しかも男って何さ男って！！

魂から形成されるって言ってたよね！？ねえ言ってたよね！？

どっかのマッドサイエンティストふうに言うなら『ありえないわ  
だよ！？』

あたしコレでも30過ぎよ！？

女としてなんか色々捨ててたしっ、腐の方向に間違っつて突き進ん  
でたけどっつ、でもソレだけ女として生きてきたんだよ！？

「かつ、鏡鏡！！」

ぱっ。

出てきてポトツと落ちてきたソレを速攻拾い上げる。  
をを、ウチにあった手鏡と全く同じでわなないですか。  
いやいやソレは今はどうでもいーんだどーでも……

「…………どうしてこうなった。」

そしてココで、冒頭へと至る、のですが。  
や、だって、その、ねえ？

あたしの感情の変化に連動して動くこの顔、確かに『今』のあた  
しの顔なんだろうけど…………美人だ。

華奢で、美麗で、優雅で、婀娜で、綺麗で、この世にある『ふつ  
くしい』の類義語全部集めて並べたとしても足りないくらい、美人  
だ。

元が日本人なのに、何故か水晶みみたいな透明感のある銀？の髪と  
か、病氣的、ではないけどシミひとつ無い白い肌とか。

ゼツミヨ一な形と大きさとバランスで配置された各部のパーツと  
か。

赤みがかった金の左目とか青みがかった銀の右目とか。

身体にしたってそうだ。マッチョでは無いけど腹筋割れてる。た  
だ細いだけじゃなくちゃんと筋肉付いてる。

ドコぞの彫像か。

……………これほんとに生きてんのかって思ってしまった。いやあ  
たしなんだけど。生きてるけど。

ホントありえんくらいに美人だ。

いや、ソレはこの際放り投げる。この顔だけでこはん3杯どころ  
か7杯8杯イケそうだけど放り投げる。

問題は、この顔。

「……………なにゆえ『世癒』の顔。」

そう。

あたしは文章は書くものの絵は下手だったから描きもしなかったが。コレは、あたしが書いてたドリー夢の、主人公の外見特徴に見事にマッチする。

……………魂で肉体の形成ってあのチャラ男は言ってたけど……………ココに来てまさかのヲタク根性発動？

ガサガサと頭ん中漁ってみた。ら、ありました。

あの2人の力を『加護』として貰った時、あたしの妄想がその力に作用した、らしい。

そして、この姿……………何か確か苗床がどーとかってニヤニヤしてたけどあの2人……………こーゆー事か。

……………あたしどんだけオタクやねん。

「……………うをう、しかも羽が」

直してたハズのモノが出てるし。頭から肘から膝の横から背中から腰から。

と、とりあえずー、ナイナイしましよーねーナイナイー。

……………うし。収まった。

あ。とか思ったら髪の毛が真っ黒に。

うぬ？と思ってもっかい鏡を覗き込む……………ビンゴ。目も黒になった。

「……………ソレにしても……………」

ホントにあたし人外じゃないか。

今後どーやって生きて行けと。

「……………ま、いつか」

サジ投げた。

だつて考えても仕方ない。

事故に巻き込まれて死んで神様に会つてチート貰つて異世界蹴り落とされるなんて黄金律の上に更にTS要素つて何、て感じだけど。

何事もポジティブに行こう、うん。

既に階梯としては、アイツ等の言葉を信じるなら神様モドキ。今更女に拘るのもアホらしい。

更にあたしは可愛い女の子綺麗なおねーさん大好きだ。

やんちゃな男の子もダンディーなおぢさまも大好きだけど。

何より慢性的な肩こりの元凶だった無駄にでかいチチと月一で訪れる腹痛が無くなるのは万々歳。

取り敢えず、そーと決めればごはんよりも先にまず服。

服が欲しい服が。

ばさばさばさっつっ！！

……………うん。そーいやさつき思つたばっかだよな。

ちよつと考えただけでばこばこ出てきそうだから力のセーブ覚えなきゃ、つて。

ナニこの服の山。

こんなに要らないわよー着でいーのよ取り敢えずは。

つてつ、消えちゃった消えちゃった全部消えちゃった！！

ああつ、折角の包丁さんや手鏡さんまで消えちゃった！！

出てきた時と同じく一瞬で消えた服に思わずがつくりOTZ。  
……や、ホント。早く力のセーブ覚えなきゃ。

「……はふう、取り敢えずパンツ欲しい。ボクサータイプ。灰色で  
イヤ。」

ぱっ。

「……厚手の靴下。色は紺で。」  
ぱっ。

「……某最期の幻想7子供達の訪れ主人公の服。」  
ぱっぱっ。

「……某灰男ポニーテールの団服。」

ぱっぱっ。

「……某幻想の星未開の翼。」

ぱっぱっぱっ。

……

……なにこれオモシロイ。

はっ。いかんいかんっ。いくら楽しいからってコスプレ衣装作  
ってごーする!?

……や、でも、まあ。

惹かれる。すっごい惹かれる。生前(?)手先の不器用さで断念  
してたから特に。

……取り敢えず。作っちゃったし。

着てみよっ

や、でもフロンティアウイングは却下だな。

袖とか裾とかの羽っぱいの好きだけど、近未来的過ぎる。

この世界が化学繊維とかふっーに普及してる文明レベルならギリ  
で誤魔化せるだろうけど。

逆に中世ヨーロッパとか、もつと悪くて原始時代だったりしたらオーパーツだ。

団服、もなあ。

ホントにどっかの制服、に見えるからなあ。

しかも左胸のローズクロスはルビィにシルバア。細工も細かい。  
どんだけお金掛けてんのって感じだよね。パツと見。

チヨコボ頭の衣装、もなあ。

肩当てなんて現代には必要ないっしょ。

ココが剣と魔法のファンタジーな世界ならアリだけど。  
ソコまで確認してないから何とも。

けど肩当てさえなければこの中では一番ふつーな……

ヨシ。

肩当て抜きでコレ着よう。

ぱぱぱっ。

って思ったらまた全部消えちゃった!?

ぱぱぱっ。

……………うん。

便利なのは解った。

服を着た自分、を思い浮かべただけで袖も通さず動きすらもせず  
に着れるのは解った。

着せ替えやりたいほーだいだね!!

ココに姿見があれば……………いえいえ何でもないです。

……はあ、つかれた。  
体力とかじゃなく精神的に疲れた。

まあいや。後の2着は消して、と。

取り敢えず、いつ何時何があってもいやーに。

食べ物と水とネグラの確保をしに行きますか。

## 2・そして初っ端からこんなのと遭遇だなんて

「とか思ってたのに何でこんな事にー！ー！っ！？！？」

大絶叫上げながら走る走る。

でも仕方ないと思うんだ。思わず声を上げたって。

走るスピードは落とさずに、ちろん、と後ろを見る。

ソコにはあたしよりも大きな白い虎。しかもでっかい牙付き。

進化の過程で牙が犬歯に退化する前の虎。サーベルタイガーと呼ばれる種類の肉食獣。

頭の中の知識からそんなんが出てくるけど今はどーでもイイ。

あんなでかいって何。多分クマよりでかいよアレ。

「ウチなんか食っても美味くないてー！ー！ー！ー！ー！ー！」

あらかだ思わず幼少の頃の訛りが。

ってソレもどーでもイイ。

今はこの危機的状況を打破するのだ！！

ってどーやって！？

いち、体力限界まで鬼ごっこ。

に、諦めて逃げるのやめる。

さん、木に登ろう。

……ライフカードみたく言ってもダメじゃん！？

体力尽きたら食べられるじゃん！？

諦めても食べられるじゃん!?  
ネコ科動物だって木に登れるじゃん!?

あ。

知識内の剣歯虎の項目。

豹やチーター、ライオン虎に比べて走るのが遅い。

身体がずんぐりむっくりしてるので、木には登れない。

……………何故ソレを早く出さない!!

アレがホントに地球にいたサーベルタイガーと同種なんかは知らないがっつ。

取り敢えず木!!あの巨体が頭突きかましても倒れない様な!!  
でっかいぶつといそして高い高い木!!

ってあったあああああ!!理想そのモノなでっかい大木ううう  
う!!

ぐ、と更に脚に力を込めてスピードアップ。

そのまま突進!!タタタタツ、と幹を駆け登って、ていつ!!掴  
んだ枝で鉄棒みたく大車輪っ。

上に着地、そのままてんつと幹を蹴って枝を蹴って更に上っ。

……………こ、ココまでくれば、だいじょうぶか、にゃ?

ちろん、下を見る。ををう、すっげ登ったねあたし。前に住ん  
たアパート3階くらいの高さはあるよ。

しかもあんだけ走ったのに息切れてないし。疲れも感じてないし。  
なんつーハイスペックだこの身体。

……………コレで木の根元であたしを見てるアレがいなけりゃ万々歳な  
んだけど…………

取り敢えず、枝の上でしゃがみ込んで下を警戒。  
どーやらホントに木は登れないみたい。

コツチが降りる気配無い事を悟ったら諦めて次の獲物を探しに行  
ってくれるだろう。

うん絶対。……きっと……たぶん。

サーベルタイガーはコツチを見上げながらうろたうろたうろたうろ。

あ、座った……立った。あ、また座った。

立って、またうろたうろた。ふい、目が逸れた。

後ろ向いて？いやいや振り返らなくてイイ。諦めて興味なくして  
お願いだから。

俯いた。顔上げた。あたしをじいいつと見て。

だからっ、いくら待ってても降りないからあたし！！

いやいや見上げなくてイイって！！

諦めて興味なくしてお願いだから！！

「おい、その人型」

………は？

「ココはボク達の縄張りだぞ。お前なんか餌にされても文句言えな  
いんだぞ。なのに何でいるんだ」

………え？

だれ？このちよつと高めな変声期前の男の子っぽい声。

誰がしゃべってんの？ねえホント一体どなたが？

………まさかあのサーベルタイガーですかいつっ！？

！？

「によおおおおおおお！?!?!?」

「をうつっ??何だよイキナリ大声出すなよ」

「と、と、ととと、と、ととと、ととととと」

「と？鳥の真似か？」

「とらがしゃべってる~~~~っっ!?!?!?」

しかもタダの虎じゃないんだよ白い虎なんだだよしかも熊より大きいんだよ牙がすつごいんだよもしかしなくてもサーベルタイガーってヤツなんだよ!?!?!?

「むっ、何だよお前。ボクが喋ったら何か悪いのか」

「い、いえいえいえいえ。そんなメツソウモゴザイマセン。」

「じゃあ何だ。何でココにいる。ボク達を捕まえにでも来たのか？」

「イヤえーとソレは……」

「何だ。はつきり言えよのろま」

むかつ。

誰がノロマだお前なんかあたしに追い付けなかったクセにつつ。

「言えない事なんだな。やっぱりボク達を殺しに来たんだ。

かーさまー!!!ココに人型がいるー!!!ボク達を殺しに来たって

ー!!!」

「だから違うっての迷子だったのこっちは!!!」

「……………ふえ？」

何だよネコ科のクセにそのポカンとした顔!!!

正確には迷子違うしっつ!!!

でもココがドコか解らないしドツチ行けばイイかも解らないしそ  
ーといった意味では間違ってる……かも？

うん。やっぱり迷子ですすみません。

……………けどこの年で迷子……………じ、地味にへこむ……………

「ほづ。迷子とな」

「…………や。迷子と言っても道に迷ったとか誰かと逸れたとかそーゆーんでなく」

「では何だ。地図の読み方でも間違えたか」

「いやいやそもそも地図持ってないからドツチの方角に何があつてどんなのあんのかも解らないし…………」

「で。誤つてこの森に入つてしまったと…………それは迷子以前の問題ではないか？」

「…………そーなんだよね迷子以前の問題なんだよねあああどーしよーう…………」

つて、ん？んんん？？

さつきから返答の返つてきてるこの声は、何ですかな？

男の子っぽいヴォイスとは違うんですが。

なんかすつごい落ち着いた熟女の声なんですが。  
しかも随分と近くから。

……………つてゆーか、背後、から？

そろーり。そろーり。

……………

……………

……………はい？

「……………なんつでネコ科の肉食獣が空飛んでんのっ？！？！？」

ちよつとねえ何でこの高さの足場つてホント今あたしが座つて  
様な枝しか周りに無いのに！！

下にいるサーベルタイガーよりでっかいのが何でさもソコに地面  
あるかの様に浮いてるワケ！？！？

「何だ。お前魔獣を見るのは初めてか」

「はあ！？魔獣！？」

ばらばらばら。

頭の中で書庫にブチ込まれてた情報から、魔獣に関するものが引っぱり出されてくる。

ゲームや漫画によって色々設定は違うけど、その殆んどは魔力の籠った土地で生まれ育った突然変異。

魔力に晒されてきた為か、知能が上昇。魔術も使える。中には人型を取れるモノも。

そしてコレまた魔力のお陰（？）で性質も歪んで性格は残虐凶悪非道。

文字通りダークサイドな生き物である、まる。

「ってその魔獣！？まぢで！？」

「その、と言うのがどういふのかは知らんが、魔獣だ。……まあ我等と遭遇して生きていられる人型など全体の1%もおらんからな。驚くのは当り前だろうが」

「のおおおおおおお！！！！！！」

はいビンゴオオオオオオ！！！！

1%！！すっごい数字出てきましたよ！！

コレはアレですね詰みとかゆるヤツですね今までホントにありがとうございまして！！

「……み、短い人生だった……」

……そっかあたしココで食べられるのか……

まだ生き返って（？）から1日も経ってないってゆるのに。

こーなるならさっき1人ファクションショーやっつくべきだったよ。

てかうおいこらギャル男にヤサ男おおおおああ!!  
落ちて早々即死フラグはないんじゃないかなかったんかい!!??!

「何だお前、食われたいのか？」

「……………へ？」

いやだつて。

虎でしょ肉食でしょ追い掛けてきたでしょ人間なんてパクリでしょ。  
よ。

「他の魔獣はどうか知らんが。我等の一族は人を食わん」

「え。そーなの？じゃない、そうなんですか？」

「ああ。人間は色々とクセがあるからな。特にお前みたいな成体の男は、骨張つてて筋張つてて硬くて食べたものではない」

……………え。ソレって食べた事ある、んじゃない。

「他にも、薬だとか何だとかで人間の肉は汚れている。食ったら腹を下すのだ」

化合物とか添加物、ですか。

まあ確かに身体にイイもんじゃないよね。

野生動物がそんなん食べたら一発でぴーごろごろだよね。

「だがお前は美味そうだな。蜜の様な匂いがするし、感じる魔力も清涼だ……………齧つてみて良いか？」

「いやいやいやいや止めて下さいオネガイシマスそんなんされたら死んじゃいますからっっ!!」

そんな馬鹿デカイ口に齧られたりなんかしたら腕一本どころか身体半分持ってかれる！！

痛すぎて死ぬるよ出血多量でぱっくり逝っちゃうよその前にショック死するよ！！

「そうか……残念だ」

いやそんなホントに残念そうにしないで下さい。心臓に悪いですから。

「まあ良い。トコロで迷子」

「……いやちよつとその呼び方は……」

「迷子を迷子と呼んで何が悪い」

「……忘れて。お願いだから忘れて下さいオネガイぷりーず。」

「注文が多いな。では此処が魔獣の住処だとも気付けず迷い込んでしまった間抜け」

「………うんもーいーです好きに呼んで………」

「そうか。では間抜け。もう直ぐ日も暮れる。此処は夜行性の獣の方が凶暴だからな。我等が罫へ招待してやろう」

………えー、と。

「いい、の？」

「お前を其処等の悪食な奴等に喰わせてやるには少々勿体無い」

………ソレって裏を読めばネグラにご招待 今晚のこはん？

「安心しろ。さっきも言ったが我は人は食わん。我が愛し子に食わせるつもりも無い」

「………あ。さいですか………」

「という訳で其処から降りろ 『ちいさいの』。今からこの間抜けは我等が客だ。遊ぶのは構わんが噛み付くなよ。人の血肉は汚いからな」

「はーいかーさまー！！」

き、汚いつて。

なんかそんな言われ方すると何か月もお風呂に入っていない汚ギヤルみたいな。

しかもイイ子なお返事返して下さってますし。

遊ぶつて何あたし『と』なのかあたし『で』なのかそこんトコ具体的におせーて。

……はふう。

まあ、取り敢えず今日の寝床は確保？……うん確保、とゆー事でお邪魔してみますか、魔獣のネグラへ。

）．．）．．）．．）．．）

その虎の母子は、銀天琥とゆー魔獣らしい。

銀天琥、とゆーのは、この世界『ラグディシア』に生息する魔獣の一種でも、とつてもレアな魔獣だそうぞ。

特徴は銀の毛皮、象牙の様な牙。そして空を駆け吹雪と雷を纏うという特殊能力。

世間一般の魔獣とは一線を画すくらいに強く、滅多に………というか殆んど人前に姿を現さない。

そして、魔獣なのに人を襲って食う事はしない、っていう魔獣の中では異端な性質を持つ。

故に、金の毛皮に翼を持つ、金天狼と呼ばれる魔獣と合わせて、伝説の双魔獣、なんて呼ばれているらしい。

で。

「どれだけ伝説級の魔獣でも獣は獣。寝床なんて洞窟か地面掘ったアナグラが定番だ。」

そして彼女等のネグラも例に漏れず岩穴だった。

……… ついでにソコには既に2匹の魔獣がいなすった。

「ねえ『まぬけ』。あなたキレイな毛並みをしているのね。ほんの少しだけど花の蜜の様な良い香りもするし。いつもどんな手入れをしているの？教えて下さるかしら？」

いやそんな事言われましても。

この身体になってまだ1日経ってないし。匂いなんて解らん。

「なーなー『まぬけ』ー。人の縄張りってどんななんだ？美味しいモンいっぱいあんの？」

いやですから。

コッチ来てまだ1日経ってないんですってば。

村とか町とかまだ1回も見えてないんですってば。

「『まぬけ』は色んなトコに行った事ある？どんなトコに行った事ある？ねえねえねえ」

行った事も何も。

この森が初めてでございませよ他なんか行った事ありませんよ。だから聞かれても何もお話し出来ないのございませよ。

「いいや、愛し子達。正確には『まぬけ』は人では無いよ」

「「「え?」「」」

……………うわお。

おかーさま良く解りましたね。  
てゆーか何で解ったんですか。

「『まぬけ』は人でないのお母様?」

「えー?でもちゃんと2本足で歩けるし指も5本だけ?獣の耳も尾もないし」

「妖精族みたいに耳尖ってないし、竜人みたいな鱗もないし。前に見た人と同じ形だよ?」

「見た目は確かにそうだな　　だが愛し子達、『まぬけ』をよく見てごらん」

……………あ。痛いイタイ。

つぶらな瞳がじいつと凝視すつごい痛い。

やめてそんな純粋な目で見ないで!!

あたしの汚れた部分暴かないで!!

「……………まあ。まあまあまあ。なんてキレイなのかしら、『美味しそう』だわ」

「っ何だお前?何で俺達より、母さんよりも魔力多いんだ?」

「うわあ。信じらんない。良くソレで身体破裂しないね」

「気付いたかい?　　我等魔獣と同等の魔力を持つ人間ですら数える程しかおらんに。人間が有するには有り得ない魔力の量だろっ?」

お、美味しそう、って。破裂、って。

魔獣一家の皆様より魔力多いって。

なんか物騒な単語並びますね。

「其れに                    その目と髪の色。『まぬけ』、お前は妖族族だな？」

……………はい？

ようまぞく、ですと？

ソレって、妖怪・魔物・魑魅魍魎エトセトラえとせとら、の事？

「えっ『まぬけ』妖族族なのか!？」

「ゼンゼン解りませんでしたわちつともそんな感じしないのですもの!!」

「うわーうわー初めて見た!!人型の妖族族!!」

「ちよつと待つてドコをどーしたらあたしが妖族!？」

あ、思わず一人称までポロつと素が。

だけどドナタもソコントコに気付かずに、あたしのセリフに首を傾げた。

「妖族族でなければ何だと言うのだ。黒髪黒目と言えば妖族、しかも高位の魔人族や墮天族の一部にしか出ん色だぞ？」

え。

「えええ、ちよちよちよつと、ちよつと待つて」

「何だ」

「……………黒髪黒目は妖族、つて……………黒髪黒目の人は、この世界にはいないの?」

「……………む?『この世界には』、だと?」

……………あ。しまったまたやった。

「『まぬけ』、お前まさか異界の者か」

……って、あんれえ？

「って、言う事は。この世界には『異界』って概念があるんですか？」

「まあな。召喚術の事故やら失敗なんかで異界の人を喚んでしまうというのは、昔は多々あった事だからな」

「……そ、そうなんだ……」

…………てゆーかあたしの名前『まぬけ』で決定なのですか  
決定なのですねおかーさま。

「ふむ。其れでも、人が内包するにはその魔力はあまりに膨大過ぎる。『まぬけ』、お前は一体『何』だ？」

なに、と。

言われましても。

「……あー。いや、実はかくかくしかじかで」

「かくかくしかじかって何？」

「意味わかんねー」

「話せない事なんですの？」

「噛み付いて良いか？」

はいスミマセン。

謝りますジャンピング土下座だつてしちゃいます。  
だからおかーさま牙剥きだすのやーめーてーえ。

「…………元、人間です」

「……もと？」

あらお子様達一斉におんなじ方向に首を傾げてかわゆらしい。

「……さて。人間を元にした者など、ゾンビやスケルトンといったアンデットか、妖魔族との契約に失敗して異形になった者しか聞いた事が無いが」

「ヤメテ下さいそんなになつた覚えはナイです」

某ヨミヨミの実を食べた鼻歌おじさんは愛すべきキャラだが、自分があんなになりたいとは微塵も思いません。

「じゃあ何ですか？」

「……いちおう、階梯は神位、らしいです」

「かいてい？海の底？」

「しんいつて何ですかーさま？」

きよとん、とする様が愛らしい。

抱き付いてイイですかまふまふしてイイですかお子様方。

……うわ。しかも何でおかーさまそんなに驚いてるんです。

「……人が神になる？死後に亜神に祭り上げられるのなら兎も角、生きた人が神になど、聞いた事が無いぞそんな事」

ですよー。

さっきアンデット系か契約失敗の異形しかいないって言ってましたもんねー。

「へ？」

「は？」

「かみ、さま？」

いやんお子様方見つめないで。

あたしコレでも恥ずかしがり屋なの。

……って冗談はおいといて。

説明、やっぱ必要ですか必要ですね。

「ぢつはですねー……」

あたしが元いた世界で事故死した事。

その事故が、本来なら起こるはずじゃないモノだった事。

その所為で、あたしが文字通り『消滅』しなきゃいけなくなった事。

そんなあたしに責任感じちゃった(？)神様の最高位の管理者としてのが、あたしを神様にしてくれた事。

神様になった上に起こった事故の所為で、元いた世界にはいられない事。

そして穴っぽいのにイキナリ蹴り落とされて、気が付いたら森の中だった事。

「……そっか。ソレで『まぬけ』はアソコにいたんだ」

「……イキナリ蹴り落とされてって。なんつーか、すっげ乱暴なんだな。神様より上ったら創造神様だろ？」

「……災難、でしたのね」

うんもうホントに。

一生分の災難だったと思うよコレ以上の災難はのーせんきゅーだよ。

「……異界があるというのも、時折召喚事故で異界のモノがコチラに跳んでくるというのも知ってはいたが。まさか神となった者がや

ってくるとは、な」

しみじみ言わないでおかーさま。

神様つても成り立てとゆーかベースは人間だったりするんだから。

「……………なあ、『まぬけ』」

「んえ？はいはい何です？」

「……………その、あの、な？」

「うん？」

「……………悲しく、ないのか？」

ふえ？

一体ナニが？

「だ、つて。お前、イキナリ死んじまった、んだろ？」

「うんまあ。即死だったらしいのですよ」

「……………行き成り、神様になったんですわよね？」

「うん。拒否は却下で実力行使されましたよ」

「……………いきなり。コツチの世界に蹴り落とされた、んだよね？」

「ソーデスネあんにやるうドモ今度会ったらタコ殴りにしてやるも

ー2度と会えないでしょーけどね」

……………あれ？

なにゆえお子様方ソコでしょんぼり？

「……………お前、親兄弟は」

ああ。

そーゆー事、ですかおかーさま。

「父親は小さい時に余所に女作って蒸発しました。母親とは色々あって関係悪化して今じゃ絶縁状態です。弟が1人いましたけど、仕事の関係で引越し繰り返し返してるウチに疎遠になってもう10年以上会ってないですね。友達、も。関心ないというか上辺だけとか何というか。深い付き合いあったのなんて1人もいないし。とゆーか自分存在してた事すら消去されてるしもう2度と戻れないんで」

だから、ってワケじゃないけど。対人関係で悲しいとか寂しいとかはあんまり思っていない。

ゲーム出来ないとか漫画読めないとかネットサーフィン出来ないとかはすつごく悔しいけどね!!

あれ？

あれれれ？？

何故ナニどーして沈黙？

「……お前、ほんとに、悲しくないのか？」

「そーですね。然程思ってます」

「……会いたとは思いませんの？」

「そーゆー欲求は浮かんでこないですねえ」

「……『まぬけ』は自分のとーさまやかーさま、嫌いなのか？」

「嫌いじゃないですよ？ただ、別にコレと言って何とも思わないだけ」

うんだからソコでなにゆえ沈黙。

「随分、殺伐としているのだな、異界の人は」

「いやいや自分はまだまだ可愛い方ですよ？親が子を捨てる、子が親を殺す。人間社会にはそんなんけつこーありますからねえ。まあ、人間皆が皆そんなんばかりじゃないですけど」

けど、同種で殺し合うのは人間だけの特性だ。  
少なくとも地球ではそうだった。

イイ人も優しい人もいるけど、ムカつくヤツも屑みたいな悪人も  
いる。

「ソレに、多分神位に上がった副作用も、あるんだと思いますよ」  
「……副作用、だと？」

「ええ。物事の捉え方とか、人の魂に上位の神様の力を混ぜた事で、  
多少変わってる、みたいですよ」

そう。そう思わないとおかしいと思う事が満載だ。

生前あたしはふつーのおばちゃんだった。

小学生の時にいじめにあって不登校、その頃本屋で出会った男の  
子同士のアレなアンソロジー本で腐った女子の道を一直線。

中学時代は厨二病持ちのイタい子にまで発展し。

トーゼン現実の男なんかじゃ……いや、ちょっとはあるけど、漫画  
やゲーム程には興味が沸かず。

仕事先ではあたし生粋のヲタクです、と同僚はおろか上司にまで  
暴露して。

だけどソレでも、ふつーのおばちゃんだったのだ。

趣味がアレな所為で、引きこもりとまではいかないけど人間関係  
は薄かったし、事無かれ主義でもあったし、熱しやすく冷めやすく  
もあったし、元々淡泊でもあったし、多分世間一般的な考えからはか  
なりズレてるんだろうけど。

感情希薄、ってワケじゃないんだろうけど、ソレに似たよーな、

事は起こってる気がする。

でないとな今のあたし自身のこの状態の精神状態が納得いかん。例えあのギャル男ドモにあたしの死んだ理由とか神の上位に上がってもらつとか異世界に落つこちてもらつからとか前置きされていても。

ふつーなら、色んな意味でパニクるハズだ。

「確かに。神々の精神構造は、生物とは違うのだろうな」  
だからと言ってあたし神様の自覚全くナッシングですが。

「……………かーさま！！『まぬけ』をおとーにしてもいいですかー！！」

……………はい？

一体ナ二言ってくれちゃってんのこのお子様。

「あら、宜しいんではなくて？毛並みのお手入れ方法も聞きたいし。私からもお願いしますわお母様」

「元々人だったんだよな？料理ってできるか？出来るよな！作ってくれよ明日！！」

「いやいやいやいや。ちょっと待って下さいよお子様方」

なぜなにどーしてそーなる？

そりゃもー人間じゃないけどさ、あたし。

だからつてもふもふ様とは違うのですよ。町に出てみたいのですよ野宿よりもふかふかベッドが恋しいのですよ。

「ふむ。異界の神を養子にか。面白そうだな、中々無い経験だ」

「……………って。おかーさままでそんな事」

「じゃあおとーとにしていいいんですねかーさま!？」

「まあ、そうだなあ」

「ちよ、だから待っ」

「『ちいさいの』の弟なら、俺にとつても弟だな!！」

「私の事はお姉様とお呼びなさいね？」

「いやだからですね」

「……イヤなの(か)?」「」

「……あう。」

「コレはどーやって遣り過ぐすべき？」

「……っておかーさま。おもしろそーに見てないで助けなさいよ。」

「……ちなみに、お子様方のお年はお幾つで？」

「後1年もすれば成体、独り立ち出来る事になりますわ」

「とゆー事は。現在人間で言うトコの、未成年、大人の一步手前、なワケですね？」

「ああ。けど『まぬけ』はまだ幼体だろ?身体は成体に近いけど」

「人型つて、一人前つて言われるまでだいたい15年くらいかかるんだよね？」

「そーですけど……お子様方、忘れてません？」

「……何を(かしら)?」「」

「ワタクシ人間から神様モドキにジヨブチェンジしてるのですよ。」

「……ソレが?」「」

「……ジヨブチェンジして若返つてる、のはいちおー自覚してるんですがね。ワタクシ死んだ時の年齢は32歳。自分で自分の世話が出来る成人になって12年。世間一般じゃ中年のおじちゃんおばちゃんと呼ばれても仕方ナイ年頃なのですよ」

「……え?」「」

えってちよつとナニその反応えって。

「『まぬけ』って素でボク達よりも年上なの!？」  
「ぜってー15、6年くらいしか生きてねえって思ってた!！」  
「しんっじられませんか!! 如何してそんなに若くいられますの!」  
「?」

いやだからソレはジョブチェンジの所為ですって。  
つかおかーさま何故ソコでブハッて吹くの。

「くつくく……い、愛し子達、良く覚えておおき。人は見た目によ  
らぬのだよ。魔術師と呼ばれる人の中には、『まぬけ』と変わらぬ  
見目でありながら3百年を生きる者もいるからね」

……いやそれはちょっと若造りし過ぎなんじゃ……

ちょっとツッコミさせてもらおうかと思っただけども。

そんな事を面白そうに言うおかーさまにお子様達が「はい」と  
イイ子な返事を返して、あたしはしゆるしゆる小さくなるのだった。

### 3・いつの間にか死にかけて順応して色々試して

銀天琥一家のお家、とゆうか洞窟にご招待されてから約3か月。

……………この3ヶ月の間色々あった。良くまだ生きてんねあたし  
って思う。

朝起きて。朝ごはん探しにネグラの周りを散歩したりして。

……………魔物に追い掛けられて。

お昼に食べれるモノを探しに森に入ったりして。

……………食肉植物に呑み込まれ掛けて。

夕方に、晩御飯にしようと川で釣りしたりして。

……………怪物みたいな魚に引き摺り込まれ掛けて。

他にもさ、齧った途端爆発する木の実とかさ。

見た目ふつーなのに猛毒なきのことかさ。

甘い花の蜜を飲んだ途端にオスメス関係無く動物達にサカられて  
追い掛けられるとかさ。

うん。良くはまだ生きてる凄いやあたし。

おかーさま達いなかったらホントに死んでたよあたし。

まあでも、悪い事ばかりでも、なかったと思う。

夜寝る前、おかーさまはあたしに色んな話を聞かせてくれた。

お子様方にとっては復習だ。

この世界、ラグディシアの事。ラグディシアの神様の事。

大陸の事。種族の事。色々、教えてくれた。

他にも、神様モドキになった所為か、運動神経とか体力あり得んくらいに良くなってた事が解ったし。

岩を拳で粉碎するだけの力がある事もチーターもどきから余裕で逃げられるくらい足が速くなった事も解った。

何より一番嬉しかったのは、あのギャル男神様のくれた知識の中に魔法があった事と、ヤサ男神様の魔法使いとしての技術と経験。その魔法知識の中に、錬成魔法があった事だ。

人のいる場所まで降りるには、あたしの髪と目の色は目立ち過ぎる。

妖魔族で無いと主張したトコロで、誰が一体その事を信じてくれるだろう。

見つかった途端に有無を言わず拘束、そしてリンチ、もしくは処刑台、の構図はどうしても消えない。

しかも黒髪黒目は不老の妙薬とされている。らしい……薬なんかになりたくないよガクブルガクブル。

だけどあたしは人のいるトコロに行きたかった。欲しいモノがあったのだ。

………だつて何時までもマツパってイヤじゃない!!

や。だつて魔力の具現化は楽なんだけど、一定の時間が経ったら魔力に戻るのですよ。

某チヨコボ頭が着てたのを模した服は、1日で魔力に還った。

半永久的に物質化させとくには、メンドーな術式を組み立てておかないといけない事が後に判明。

熱さも寒さも痛みも一定以上になると解らなくなるし、風邪ひいた、とかなかつたけど。お子様方の毛皮気持ちイイんだけど。

……でも何時までも葉っぱで大切なトコ隠してほばすっぱんぼんはイヤじゃない！！

だから練成魔法に気が付いた時は思わず小躍りしちゃった。てへ。絹とかカシミヤなんて贅沢は言わない。ふつーの服が欲しいのあたし。

まあ、幸運にも布の元になるのはいっぱいあった。木の柔繊維は麻になるし、ごはんとして今まで狩ってきた獣の毛とか皮とか、やっぱりごはんになった鳥の羽毛とかもあった。

ソレからはもう練成ラツシュだった。

服が出来たら今度は鉄を掘り起こして包丁とか鍋とか。

その次は刀とか鎌とか。ちよーしこいて今までやった事のあるゲームに出てきた武器とか。

武器だけじゃ飽き足らなくなってアクセサリーとか。

薬草から薬とか。

「……ふむ。何とも面白いものだな、異界の魔術は」

おかーさまに感心されました。てれてれ。

ちなみに今はお昼ご飯も終わった正午過ぎ。お子様方は外で遊んでなさる。

どーゆー遊びなのかは……き、聞かないでくれると嬉しいか、にやー？

て、ゆーかですね。

「この世界にはこーゆー練成魔法、無いんですか？」

「どうだろうな。我等魔獣の魔力の行使と人の魔術形態は全く違うものだし、土人形を作ったり火を剣に纏わせたりする魔術は見た事

があるが、素材を揃えただけで物を作る魔術や身体能力そのものを上げる魔術など聞いた事は無い。いや、古代魔法であれば探せばあるかも知れぬが」

ありや。そーなのか。

「ソレにしても、お前の魔力は本当に無尽蔵だな。コレだけ作って、未だ枯渴せんとは」

うん。まだまだゼンゼン余裕です。

あのギャル男の言葉を借りるなら、『世界の一柱任せても良いくらい』な階梯にまでスキップしたらしいかねあたし。

「……そういえば『まぬけ』は異界の神だったか」

む。もしかしておかーさま忘れてましたか。

「ああ。すっかり忘れていた。何せ見目は普通の人型で、しかも全く神々しくないからな」

「……うんソレはあたしも認めます。あたしだって良く忘れてるくらいだし。」

あ。神様で思い出した。

「この世界の神様って、あたしの事どー思ってたんだろ」

いちおー、ココで無い世界の神様の『加護』ちからをもらって神位まで昇ったけど。

あたしは純粋な神様じゃない。ベースは人間だ。

出来得る事なら人として、暮らしたいとも思ってる。まあムリだと解ってるけども。

……でも。あたしがココにいる事自体、この世界の神様達が拒絶したら。

あたしコレからどしたらいいんだろ。

そんなあたしの独り言を聞いてたおかーさまが、ふ、と目を細める。

「大丈夫なのではないか？」

「イヤにハッキリ言いますね」

「まあ、な。もしお前が『良くない』者であれば、この世界に落ちてくる事すらあり得んだろうからな」

「……まあ、そりゃそうかもしれないけど」

「ソレに、この世界の創神ラグディシアは慈悲深い。異界の神たるお前を歓迎してくれるだろう。ソレでも気になるんだったら、ルーデルディアに行ってみれば良い」

はい？

るーでる、なに？

「神の庭、とも呼ばれている、空に浮かぶ島だ。神々が下界の様子を見る時に降りるとされていいてな」

「……そんな、トコがあるんですか」

「まあ、本当にあるかどうかは知らんが」

がくーっ。

ソレって、お伽噺とかそーゆー類ですか。

「古代、天使は神の使い、そして竜はそのルーデルディアの門番だったという。だから竜族や天使族に話を聞いてみれば、何か解るかも知れん」

「……………天使に、竜、ですか」

てゆーかそんな、いるんですか天使。

しかも竜族なんてのもいるんですか。

黒髪黒目な魔人族も墮天族もいて、妖魔とやらもいらつしやる。尚且つ目の前にいるのは喋る魔獣。

………そーとー死亡フラグが乱立しそうな世界ですと。

「まあ、行くにしても行かんにしても。まずはこの世界の基礎知識が必要だろうがな」

「………あははは、宜しく申し上げます………」

この年でまたお勉強。

はあ、ホントいやんなっちゃうなあ。

この先、生きていけるのかしら。

「だがお前、見目は本当に殆んど人と変わり無いな。異界の神は皆そうなのか？」

「みんなそうって、何がです？」

「いや、神は異形が多いからな。創造神ラグディシアは背に翼と蛇の下半身を持つと言われているし」

「あ、そーゆーコト……そーでもない、と思います。あたしだっていちおー、隠してるのあるんで　えーと、コレですケド」

ばさり。翼を出してみた。

背中に6枚、2本角の鬼みたいに頭、というかコメカミの上の部分に4枚。両耳の裏に1枚ずつ。

あと両手の甲と肘、両足の膝の横と踵に1枚ずつと、腰の左右に1枚ずつ、大小合わせて全部で22枚。

しかも見た目は無色透明なガラス。なのに触り心地は羽毛。

ぷちん、と頭の中から1枚抜いて、おかーさまの目の前にかざす。

で、手から離れたら光って雪みたいに溶けて消えて再びあたしの

頭から生えた。

「サスガに、こんな羽持ったの、この世界にはいないんじゃないかなあ、と」

ポーンと。目を真ん丸くしてあたしを凝視するおかーさまに、ちよつと苦笑。

だけどおかーさまは瞬時に目付きを厳しくして。

「……………お前」

「はい？」

「今後一切その羽根を出してはならん」

「……………はい？」

え、イキナリなに。

「人前でも魔物にも魔獣にも」

「たっただいまー！！」

うにゅ？

あら、お子様方戻って来たわ。今日の練成はココまでかしら。

なんて。

そんな事をのほほんと考えた、その時。

「来るな！！愛し子達！！」  
咆哮。

気付いた時にはおかーさまは、その大きな身体であたしをお子様方から隠していた。

辛うじて、見えた。お子様方の顔は

驚愕と。ソレ以上の、恐怖。

.....え。なん、で？

「『まぬけ』！！その羽根をしまえ！！早く！！」

ビリビリと、おかーさまの怒号にハッと我に返る。

そしてワタワタ慌てて、羽根を消した。

ちらん、とあたしを見たおかーさまは、はふ、と小さく溜息を吐く。

そして。

「すまなかつたね、愛し子達。行き成り大声を出してしまつて。もう、大丈夫だ」

お子様方に近付いて、丁寧に顔を舐めて毛繕いをする。

だけどお子様方は、固まったまま。

恐怖に彩られた顔で、あたしを見たまま。

「.....な、なんだったんですの、今は.....」

「.....お、おまえ、ま、まぬけ、だよな、そうだ、よな.....」

「?」

「.....こ、こわかつたよう.....」

え、だから、なん、で？

呆然、とお子様方を見る。

おかーさまに舐められて、徐々に強張りが溶けていくお子様方を。

「訳が解らん、と言った顔だな、『まぬけ』？」

そのおかーさまが、ある程度お子様方がホツとしたところで、あたしに向き直った。

じとり、掌に汗が滲む。背筋が伸びる。  
あたしを見るおかーさまの目は、厳しい。

「……我もうつかりしていた。余りにもお前が人に近過ぎて、其処まで深刻に考えていなかった。神とは、我等地上に住む生き物とは何もかもが逸脱した存在だ。命も力も、他に与える影響も全  
て」

「……………うん」

「お前が結晶の翼を出した途端、お前の威圧感、魅了が半端無く跳ね上がった。我だからこそ理性を保っていたが、心が未熟な者ならお前の魅了に狂い、弱い生き物なら見ただけで息が止まってそのまま死んでしまっても可笑しくない程だ」

え。

あたし神様モドキになった覚えはあっても、そんな物騒な生き物になった覚えはないんだけど。

「しかもお前は、どうやら魔の宰らしい。魔を司る神。我等魔獣は魔力を糧に生きている故、お前の影響を大きく受ける」

げ。そなの？

あたしモドキだから、力とか貰っても、何の、神様なのかとか、決定してないって思ってたのに。

イキナリごつくんさせられてハイお前今から神様ね、なんて軽いノリだったのに。

……………あ。でも確かに。

言われてがさがさ漁ってみた、頭ん中にブチ込まれた知識には、確かにある。あたしの持つ神の力の属性。

世界の全ては、生のアーグ（氣力）、命のエーテル（魔力）、魂のユピル（靈力）、と大体3つに分かれるって知識にはあって、その中でもあたしはエーテルが強い。

あの22枚の翼の大部分は、そのエーテルが結晶化したモノだ。そして右目にもエーテルが集中してる。左目はアーグが集中してるけど。

しかもあたしのエーテルは純度すらが高い。何にでも溶け込むくらいに。

けれど何にも染まらない 故に何にでも、ある程度干渉出来て、取り込んで、操って、作り変えられる。森羅万象、全てに効果を持つ力だ、とある。

「……………最強、ではないか」

うん確かに。

ココって剣と魔法で魔物と戦うファンタジーな世界だから、魔力司るって最強以外の何者でもないけどさ。

「でも神様成りたてだし。力の使い方に慣れない間は、多分ソコ等の人に毛が生えた程度でしかないと思うんだけども」

「其れでも魔力の質量は人の魔術師やエルフ、魔人族すら軽く凌駕している 何より、あの羽根は毒だ」

「…………ど、毒って…………」

「強過ぎる薬として身体を害すだろう。其れと同じだ、と言っている 真面目に言っただけのおかーさまの目は真剣そのもの。」

「だから『まぬけ』。今後一切、結晶の羽根は出さぬ様に」

「……………ぜ、善処します」

「善処ではならん。よし、出さなくても良くなる様に我が鍛えてやる」

……………うーわーあ。

おかーさまやる気まんまんですね。

まあでも、コレはあたしにとっても、良い事なんじゃなかるーか？  
だって最強、っても。自分の力を使いこなせる様にならなきゃ、  
ただの宝の持ち腐れ。

ソレに、大き過ぎる力は時に自爆要素となる。

今まで読み漁ってきた小説やら何やらの中じゃ、テンプレだ。

この森の中で魔物に襲われた時だって、おかーさまやお子様方が  
いたから何とか生きてられただけだし。

幸い目の前のおかーさまは伝説級の魔獣。先生としては申し分ない、かも？

「お、お手柔らかかお願いします」

「ああ。身にも心にも強さを叩き込んでやる」

へこん、と頭を下げたら、牙を剥き出しにして笑った。

……………は、早まったかもしんない。

#### 4・ジゴクののちに巢立ちの時は訪れた

ソレからの約半年。

その期間はあたしにとって、思い出したくもないくらいの地獄と  
なった。

おかーさますっごいスパルタなんだよ訓練とか修行とかじゃなく  
て苦行だよアレ!!

もー何度脱走試みようと思った事か!!

……………後が怖かったからソレすら出来なかったけど。

寝る時のお子様方と団子になる状態だけが心の癒しだった。ぐす  
ん。

しかもその地獄の特訓と並行して、錬成なんかもしてたしね。

だってお子様方がもうすぐ独り立ちなのだ。

独り立ち、いこーる、この森を出る。

おかーさまも、お子様方の旅立ちを見送ったら旦那さんのトコに  
行くそーだ。

……………あたし1人だけ森に残るのってイヤじゃない!!

だからお子様方の独り立ちに合わせて、あたしも森を出て人のい  
るトコロに行ってみよう、って決めた。

けどそーするには問題がけっこーあって、その所為で疲れてる中  
コツコツと錬成ラッシュ、と相成ったのだ。

こんな魔物ばかりなトコに、ひょっこり人が来るわきゃないとは思っけど。

もし万が一来たとして。ネグラにした洞窟の奥には、今もちょっとした小山の様に積み上がる、武器とか薬とか服とか装飾品とか、アレの中にはオーパーツもどきな見付かったら大層ヤバイものがごまんとある。

おかーさまに「こんなに作ってどうするんだ」って呆れられた時にストップしとけば良かった。

……………どーしてあたしあんなに作った。今更ながらにちょっと後悔。

そう。つまり今回、あの小山をどーにかする為の、魔法の道具を練成しよう、とゆるワケで。

ぶっちゃけ、この山のよーな武器とか薬とか服とか装飾品とか、あと使わず取るだけ取っておいた、獲物の羽根とか毛皮とか牙とかを、収納出来るモノが欲しかったのだ。

例えるなら某青い見た目タヌキなネコ型ロボットの、ポケット、みたいな。

幸い貰った知識の中には、魔道具作成に関するモノも空間魔法の類もある。

その中であつた。ナマモノ（生き物）以外であれば何でも入る、鞆やポーチなんかの作り方が。

だからその知識を引き摺り出して、四次元ポケットもどきを作る事にした。

腰に着ける形のポーチの内側に、ちくちくちくちく空間魔法の魔方陣を刺繍して。

磨耗防止の状態固定化の魔法を掛けた上で、ポーチの内側に空間魔法を展開。

1個目は失敗。だけど2個目で完成。

そのまま全部、ポーチの中突っ込んで良かったんだけど。

武器に関しては、某光の勇者シリーズ4作目のリング・ウェポンみたく。

衣服は衣服で、某最期の幻想10の2番目のドレスファイアや、バイクに乗って疾走する昆虫類の改造人間の变身ベルトみたく。

望む時や必要な時に必要なモノを、直ぐ様装備出来る様にしたいなあ、なんて思ったり。

なんでどーにか腕輪に収納、意識するだけで欲しい武器が手の中に出てくる、着たい服をそのまま身に纏える様に出来ないか、なんて悪戦苦闘。

27回失敗した。

「……うううおっしやー！ー！かんつせー！ー！」

28個目で完成した時には思わずガッツポーズ取った。

お子様方に変な人を見る様な目で見られた……その目がすっごく心に痛かったです、ハイ。

出来た腕輪は白金の、1センチ幅。内側に細かい魔方陣ビッチリ。ふう、苦労した。コレ1個作るのにひと月掛かったよホント。

まあでも、1個作っちゃえば2個目なんてサクッと出来ちゃうモノで。

1個目の腕輪には武器ばっか。2個目の腕輪には服と装飾品を全部ブチ込んだ。

これで荷物は何とかなった。

で、次にする事はといえば、でまたうんうん唸るハメになった。

「……目と髪の色、何とかした方が良いです？」

「そうだな。妖魔族と他の種族は折り合いが悪いからな」

出会い初っ端におかーさまに言われた。黒は妖魔の上位一族でも滅多に無い色だと。

しかも妖魔は数千年前、人の国に対して宣戦布告して。数百年くらい前までドンパチやって、今では絶賛冷戦中なんだそーな。

ついでに黒髪黒目は不老長寿の薬の元、とゆー話もあるらしく。

………しかも妖魔族って話聞く限りもろダークサイドな種族らしいからな。

そんなのの仲間になるのはイヤだ。そして仲間に見られるのもヤだ。

平平凡凡が1番だようん。

んで。

コレまた都合良く、光を屈折させて作ったマボロシを被って別人に見せる、変身魔法、なんぞというモノがあったのですが。

はつきり言おう。難易度低いワリにめんどうなのだ。

だっつてずーっと意識してなきゃいけないんだよ。動きたんびにそのマボロシも動くよーについて。

かと言って、この世界は地球でいう『中世ヨーロッパ』。

科学でなく魔術？魔法とどう違うのか解らないけど、とにかくその魔術が普及してるから、ソレナリに便利っちゃー便利なんだけど。髪染めもカラコンもない。

直接身体に掛けて髪と目の色素を変化させる、なんて魔法も……  
あ、あった。

漁ってた知識の中から見付けた魔法を吟味する。

ふぬ。物質の元素単位から魔力で介入、分解・変化・変質させる  
元素魔法、ですか。

ぶっちゃけ元素配列の書き換え？ナニソレ？チートにも程がある  
でせうが。

……………そんな魔法があるんだつたら今までのあたしの苦勞  
は！！

素材探してソレを元に練成してたあたしの苦勞は！！

ぶんすかしながら、元素魔法を元に魔法の道具を作る事にした。

名付けて変化の首飾り。元素魔法の上に変身魔法まで重ね掛けし  
て、意識しなくても被ったマボロシが持主の動きに合わせてくれる  
様な。

5回失敗した。

6回目で、顔や体格の変化を抜いて、色の変化だけに重点を置き  
て、やっと5センチくらいの菱形のネックレスが完成した。

コレまた1月かかった。泣きそうになった……お子様方に慰めら  
れて、何とか復活出来たけど。

ちなみにこの世界の人で、良くいるのが金髪蒼眼らしい。次点で  
茶髪碧眼。

金パツはあのギャル男と一緒に光モノでちょっと御遠慮させて頂  
きたかったから、茶髪碧眼にさせてもらいました。

コレで大体大丈夫かな、と思ったりもしたけど。

あたしには、荷物より髪や目の色よりも、隠さなきゃならないモ  
ノがあった。

ソレは、魔力。  
そう、魔力だ。

おかーさまが言ってた。

人には持ち得ぬ程の魔力。この世界で魔力総量の多い魔族や精霊族や天使族すら。赤子に思えてしまつくらいに、あたしの魔力はとてつもなく大きいと。

そして氣力もまた。生命力の強い竜や魔獣を遙かに超えて、きつと心臓が潰れても首と胴体が離れても、瞬時に治癒再生するくらいには死に辛い。

ドツチも、見る人が見れば直ぐに看破されるんだそうな。

折りしも今は冷戦真つ只中。

そんな中に、ポツとあたしが出てつたら、色んなトコから狙われる。

例えば、大きな戦力として丸めこんでしまおう、とか。

例えば、敵になる前に殺してしまおう、とか。

……森に1人残るのは寂しくてイヤだけど、そんなに巻き込まれて死にたくもない。

なのでコレコレまたまた、魔法の道具に頼る事に。

知識にある結界魔法封印魔法試しに試して、結晶の羽根を封印する、魔力を隠蔽する、気配を誤魔化す効力のあるピアスを作った。

……2ヶ月掛かった。

80個くらい失敗して、漸く作れた。

しかも1個だけじゃ、羽根2枚分しか封印出来なかった。

だから羽根と同じ11個作って、耳に全部着けて、よーやくおかーさまと同じくらいの魔力になった。  
もう1個作って、更に半分封印した。

でも多分、コレでもタダの人にしてみれば宮廷魔術師……魔章師とか呼ばれてるとタメを張る。

まあでも、取り敢えずコレで人のいるトコに出られる目途は立つて。

ついでに、そんな事してる間に時期も宜しくなっちゃって。

「なーなー。まだなのかーマヌー」

「うんちよっと待って……っと、よし」

『おおぐい』に急かされ、帯剣用のベルトを着けて4次元ポケットもどきなポーチも腰に着けて、ぽんと叩く。

そして岩壁に立て掛けてた2本の刀を差して、見た目四角いリュックを背負ったら準備おっけー。

……ソレにしても。

お子様方の中で一番食べて一番食にうるさいから『おおぐい』って。

なんて安直で解り易い名前なんだろう。

「準備は出来ましたのマヌ？」

「あ、『ながお』。うん出来ましたよ」

「マヌー、早く早くー。にーさま待ってるよー？」

「はいはい。解ってますって『ちいさいの』」

そしてお子様方の中で紅一点。一番尻尾が長くてキレイだから『ながお』って。

末っ子で体格一番ちっちゃいから『ちいさいの』って。  
なんてあんちょ以下略。

「お待たせです『おおぐい』」

「マヌ、俺もう『おおぐい』ちげーし」

「あ、そうでしたそうでした。お待たせですメーレ」

はい『おおぐい』改名しました。

何でも彼等銀天琥と呼ばれる種族は、レアな上に変わり種なのだ  
そーで。

おかーさまが仰るには、魔獣が生まれ育つ要素の殆んどが、大量  
の魔力の籠った土地で産まれ育つから、らしく。その魔力にずーっ  
と当たってきた魔獣は、その土地ではさいきよーになる。

だけどその土地から一歩出てしまうと、そのさいきよーの力がガ  
クツと落ちる、らしいのだ。

だから魔獣は滅多に住処から出てこない。

だけど銀天琥は進んでお出かけするのだそう。時にはお出かけ  
した先が凄く気に入ってそのままお引越し、なんて事も。

だけどさつきも言ったとおり。生まれ育った土地から出た魔獣は  
その力を著しく低下させる。日頃空気の様に摂取してる魔力が外に  
は無いから。

そしてその土地から吹き出てる魔力に、良くも悪くも慣れちゃっ  
てるから。

ソレでも並みの獣やモンスターや人間よりは強いけど。対峙した  
瞬間「あ、コレやべ」なんて思っちゃうよーなヤツ等も、とーぜん  
中にはいる。

ソコで銀天琥のご先祖様は考えた。

自分に合った魔力くれるヤツと契約結ばいんじゃね？

その相手が主に人間になったのは、ただ単に一番相性が良かったから、なんだそーだ。

妖精族の魔力は味気ない。妖魔族の魔力はマズイ。竜の魔力は硬いし、獣人亜人は持つてる魔力自体が少なすぎる。存在ソノモノが殆ど魔力の塊な肉体を持たない精霊族なんて、契約した途端にペロリと平らげてしまつてアウトだ。

だけど人間はたくさんいて、魔力の質も量もピンからキリまでだ。探せば好みクリインヒットも見つかるらしく。

だから銀天琥は、『美味しそうな』人間を見つけたら即行動する様に親に躑けられる。

猛烈アタックかまして押して引いて泣き落してでも契約を交わせ、と。

……いやあ。その話が出た時のお子様方凄かったです。

『必見！！契約を交わすのは誰だまぬけ争奪戦！！』なんて勃発したくらいですから。

……何故お子様方あたしと契約したかったんだろ。腐の心に侵された魔力なんて腹下しそうなモンなのに。

………笑つてないで止めて欲しかったわおかーさま。

続けよう。

契約したらその人に新しく名前付けてもらおうんですと。

争奪戦の勝者は『おおぐい』。

審判役のおかーさまから「勝者、『おおぐい』！」「と言われた時

の彼の喜びようは凄かった。

……そしてキノコ栽培しそうなくらいにずーんと落ち込んだ残りのお子様方の落ち込みようも凄かった。

ソレはさておき。

魔力を分けてあげるくらい、あたしには否やも無かったからすんなり契約してあげた。

いち、『おおぐい』の血の一滴をあたしが舐める。

に、あたしの血の一滴を『おおぐい』が舐める。

さん、あたしが『おおぐい』に新しい名前を付けたげる。

よん、あたしの真名を教える。

ソレで終わり。

名前は、あたしセンスあんま良くないんだけどー、と思いながら、長くてカッコイイのカッコイイのー……て考えて考えて考えた結果、『メルルガシユアレオ』て名前を送った。

でも彼は気に入ってくれて……良く気に入ったなとは思ってたけど、略してメーレ。

そしてあたしの真名は、真神世癒。この世界ではセユ・コーヤ。

……本当の名前じゃないんだけどね。じゃあドコから持ってきた名前だつて言われたら、あたしの書いてた夢小説の主人公の名前さ  
！！

でもコレも出来るだけ伏せておけ、っておかーさまに言われた。

何でもホントの名前、真名ってゆーのは大変大切なモノらしい。

古い魔術の中には、真名を使ってその人を操ったり出来る禁術もあるそうなの……現在世間一般、ドコロかこの世界の魔術師でもコレ知ってる人は少ないらしいけど。

でも、昔の名残か何なのか。この世界の人間、特に王族貴族が最初に名乗る時はその真名を擦った愛称みたいのだったり仮の名だったりするらしい。

メーレの『メラルガシユアレオ』も出来るだけ伏せろって言われた。

……………うん怖いね。あたしむやみやたらと名乗らないよーにするよー!!

往来のど真ん中で腹踊りでもさせられたら憤死する!!

あ、ちなみにさっきからお子様方が呼んでる『マヌ』ってのはあたしです。

……………いやだっっていくら何でも『まぬけ』はねえ……………?

「準備は整った様だな」

「あ、かーさん」

「おかーさま」

「マヌ、忘れ物は、無いな？」

「大丈夫です」

この1年で、色々手に入れたのは全部ポーチの中。服だっ武器だっ、例の腕輪の中にブチ込んだ。うんやり過ぎた。でも悔いはない(きりっ)。

「じゃあかーさん。『ながお』も『ちいさいの』も」

「ああ、身体には気を付ける様にな」

「アレが食べたいコレが食べたいなどと、マヌを困らせてはいけませんわよお兄様」

「食べ過ぎてお腹壊さないでね？」

「だっ、大丈夫だっの!!お前等にーちゃんの事どんなふーに思

つてんだよ!？」

「えー。そりゃあ、ねえねーさま?」

「そうですわねえ」

「『食べる事に目が無い』おおぐい』だよね(ですわよね)」「

「ぐはつつ!？」

「確かにな」

「……うぐっ、かーさんまで……」

イヤでもおおぐ、メーレはそー言われても仕方ないと思うなあ？

毎日毎日獲って来た獲物をあたしんトコに持ってきては料理しろ料理しろ料理しろ料理しろ。

あたしがおかーさまに人の一般知識教えてもらってる時間までツブしてくれやがって。

え?なにゆえおかーさまが人の一般知識を知ってたかつて?

何でもおかーさま、お子様方が生まれる前は色んなトコ旅したり、旦那様と一緒に人の町で暮らしてた事もあるそーですよ?

魔獣はけっこー寿命の長い種だけど、中でも銀天琥は竜とエルフと魔族の次くらいに寿命が長くて、モチロン人型にもなれるんだって。お子様方はまだ無理らしいけど。

で、おかーさまの旦那様は、今もとある国の王様と契約を交わしているという。

おかーさまがこの森に帰省したのは子育ての為。

お子様方が成体になったら送り出して、旦那様の元へ帰るんだそーな。

そしておかーさまがお子様方に仰るには。

おとーさまには自力で会いに行け、そうすりゃ晴れてホントに一人前だから、らしい。

「マヌ、我が愛し子を頼む」

「まあ、自信はないですケドお腹を壊さないよーにだけは注意します」

「マヌっ、何だよお前まで!!」

いやだからメーレはそー言われても仕方ないんだっつてば。  
はっはっはっつと笑ってメーレの首をなでなでかきかき。  
やっぱネコ科です。ぐるぐるいってますココ気持ちイイみたいで  
す。

「んじゃあ、かーさん。王都で」

「ああ、待っている」

「にーさま!!ボクの方が絶対早く見つけるんだから!!」

「あら、私だつて負けませんわよ?」

「へんっ、俺だつて負けねーよっつ!!」

おとーさまがドコの国の王様と契約してるのか、あたし達は聞いてない。

モチロン『ながお』も『ちいさいの』も、おかーさまから聞いてない。

けど王様だ。大小含めて10くらいあるらしい国の中の1人。

ドコぞの傭兵と契約してるとかってゆーおとーさまのお兄さんの銀天琥よりゼンゼン見付け易い。

見送るおかーさまと残りのお子様達に手を振って。

1人と一匹、おとーさま探しの旅に出発です。

## 5・人生初の異世界の街はやっぱりふぁんたずい

……………だけど初っ端から挫折しそうになりました。

いちおう、森の南に人の集落がある、っておかーさまに聞いてはいたんだけど。

真っ直ぐ真っ直ぐ歩いても歩いても樹、木、き、キ。

まさかこの森がこんなにでっかいとは思ってもみなかった。

歩いて歩いてタマに食べれそうな木の実を齧りながらまた歩いて襲ってくる魔物を吹っ飛ばして捌いて食べてまた歩いて。

やっと木の無い、草原？を見つけた時には、10日経ってた。

……………しかもそっから先も長かった。

なんかサバンナみたいな平地を歩いて歩いて、こぢんまりした湖見付けて野宿して。

街道どころか獣道すら無い草ボーボー時々木の平地をたぶん南に向ってひたすら真っ直ぐ真っ直ぐ歩いて。

遭遇してしまった魔物をまたまたぶっ飛ばして。ちっちゃい川を見つけてホッと一息野宿して。

そしてまたまた草&木時々林な平地をたぶん南に向ってひたすら真っ直ぐ真っ直ぐ歩いて。

メーレ空飛べるんだし背中に乗って駆け抜けたら直ぐじゃん、とか思ったし実際言っても見たけど、困った顔されて断られました。

人の近いトコで空を飛ぶのはイヤらしい。

あの森は人如きが楽に攻略出来る様な魔物はいなくて、人は近付いて来ないから元の姿でも過ごせていたけど、森を一步出たらドコで見られるか解ったモンじゃないからだ。

ソレにこの徒歩での旅、はあたしを鍛える為でもあるらしい。

魔力の総量はピカイチで、基礎体力も高スペック。知識と技術はこの世界のあらゆる分野を進歩させる事が出来る程だけど、戦いや力の使い方に関しては経験のけの字くらいしかなくほぼ完璧ド素人。

その経験を少しでも身に付けさせる、でないと万が一の時に困る、この世界は良くも悪くも弱肉強食だから。

……と、おかーさまにそう言われたそうなの。

……うん。解っちゃいたけどやっぱり弱肉強食なのね。

まあ、持つてるだけの力なんて宝の持ち腐れってのは解るし、今まで自分の書いてきた夢小説でも、自分が望む道に行く為に、望む望まないは二の次で、力はゼツタイ必要だって書いた事もある。だから鍛える事に関して不満はない。

ないけど、サスガに3週間近く出会った魔物全て悉く吹っ飛ばすのにはちょっと辟易した。

だから21日目にして、ソレを見つけた時はカンドーした。

「……………はー。でっかいな……………」

ぼてぼてのほほん。大口開けてソレを見上げながら、歩く。しかしソレにしても、とつてもでかい。

端が見えない程に長くて高い塀。多分外の獣やモンスターが入ら

ない為の、防壁。

歩いて一周するとしたらどれくらい時間が掛かるんだろう。5日？下手したら10日？

ソレくらい、でかい防壁。

コレくらいおっきい防壁に囲まれてるとなると、町というより街だ。

しかも国の要所、とか。流通の要、とか。凄い特産物がある、とか。王都、って可能性もある。

……イキナリビンゴですか？

『なあなあマヌ。コレが人の縄張りの町ってヤツなのか？』

「町、っていうより都市の部類に入るかな。町よりおっきいんだよ」

『町よりでさえ！？じゃあじゃあ、食いモンもいっぱいあるか！？』

「まあ、種類は豊富だと思うけど。見てないから何ともなあ」

『じゃあ行こうぜ早く早く！！』

あたしの肩に器用にしがみ付いた、メーレの言葉に思わず苦笑。

……ホントこいつ食う事しか頭にないな。

そのメーレは今、あたしの両手の掌よりちょっとおっきいくらいの、毛の長い銀色金目な子猫の姿になっている。

だって3〜4メートルもありそうな本来の姿なんて、心臓の弱い人なら見ただけで死ねるわ。

ソレに、変わり種っていても銀天琥は魔獣。

魔獣は残虐非道で人を食うってゆーのが世間一般の人の常識。

正体バレた途端討伐命令とかでも出されたりしたらメンドーです。

ちなみに見た目だけでなく魔術師対策もバツチシ。

『メーレ』とカタカナで彫った菱形のプラチナのメダルに、青いびろつどのリボンを通して首に着けさせた。

そのメダルには魔獣の気配をふつーの猫の気配に誤魔化す魔法を刻んでる。

モチのロンでその魔法自体にも検索魔術なんかで引つ掛からない様なジャミングみたいな魔法が掛かってる。

この世界、検索探索の魔術はあってもソレを妨害する様な魔術はないらしい。

いやあホントチートっていいね!!

あと、リボンは刃物が欠けるくらい丈夫にして、コレを解けるのはあたしかメーレ本人だけな魔法も付属してる。

ちなみにこーいった形状記憶、固定化、物質強化に個人承認とかの魔術はけっこーあるそうです。

まあ、何はともあれ。

首輪を付けたメーレは、誰がどう見たってふつーの猫、でしかない。ハズ。うん多分。

『はー、ソレにしてもでっけーなー。良くこんな作れんな。人型すげえ』

『はは、そーだねー。ワタクシの世界なんか、月まで行ける空飛ぶ船まで作りましたからねー人間は』

『えつまじ!?あの月!?空に浮かんでるアレ!?!』

『そーそー。』

ぼてぼてのほほん。防壁沿いに沿って歩く。

多分どっかに門がある。コレだけでかけりゃ東西南北複数にでも子猫ばーじょんのメーレの声は、メダルを通して直であたしの頭の中に響く。

だから傍目にはいいにいい鳴く子猫に話しかけるちよつとイタイ人

ですが。周りにや人の気配なんかないから気にシナイ。

で。そんな傍目にはイタイ人しながら歩いて10分。  
ようやく、入口みたいなのが見えた。

あたしの胸はもうドキドキだ。まるで東京に初めてやって来た田舎っ子みたいく。

……………ようやく、だ。

ようやく、この世界の人と、ご対面！！

この世界、人間、というのはひとつの種族だっておかーさまは言  
ってた。

人の形をした者は、他に純白の翼を持つ天使族。瞳孔縦長な金の  
目と皮膚の所々に鱗がある竜族。  
妖精族のエルフにドワーフ、霊体に近い精霊族や、獣の耳や尻尾  
を持つ獣人族もいるという。

この壁の向こうには、そんな、人間じゃない人が、たくさんいる  
んだ。

防壁沿いにぼてぼて歩く。

緊張と不安からくるドキドキと、好奇心からくるワクワクを胸に  
宿しながら。

これだけおつきい防壁なら、何個か門があるだろう。  
……………すぐ見つかるの良いんだけど。

だけどそんなに時間も掛からず。  
がっぱり開いた、入口みたいのが見えた。

『うわでつか。何でこんな入口でけえの。巨人族でも住んでんのか  
ココ？』

「れ？巨人族って東大陸の小島にしかないんじゃないんじやなかったっけ？」  
「かーさんもそー言ってた。けどソレっくらいでかいぞコレ。夜と  
かどーなってるの。危なくね？」

「人間って無駄なトコで見栄張る生き物ですからねー。危険はない  
でしょ、警邏の兵もいるだろうし夜になったら閉めるだろうし」

「てゆーかソレって、コレを毎晩閉めるって事だよな。あらやだす  
っごい労力じゃない？」

ほへー、と大口開けながらぼてぼて。

進むにつれて、聞こえる雑音。

ソレは喧噪になって、近付くたびだんだんと大きくなる。

「……うーわっはー。」

『……遠目からでも十分見えてたけど、ホント無駄なくらいでっ  
けえなこの門』

しかもずいぶんと賑やかですよ。

防壁見る限りでかい街だと思ってたけど、こりゃ本格的に首都王  
都の線が濃くなってきた。

門がおっきいだけあってか、色んな方向から広い街道が伸びてる。  
そしてその門の前には、広々とした広場。全ての街道の終着点だ  
からか。ホント広いよ。

そしてその広場にはホントに沢山、色んな意味で沢山の人。

露天開いてるトカゲの商人とか。

品物じっくりみてるウサ耳なナイスミドルとか。

でっかい大剣背中に担いだ虎耳尻尾付きのバン！キュッ！ボン！

とか。

緑のローブを着てぴこぴこタヌキみたいな丸い耳動かしてるちっちな子とか。

2足歩行で服を着て歩いてるクマさんとか。

オプシヨン付けてない人も、色んな鎧とか武器とか。うをう、ハイレグ発見。

「…………ふあんたじーだ。」

本物だ。実物だ。夢みたいだ。でも夢じゃないんだ。

いや『ちいさいの』がしゃべった時点である程度思っではいたけど。

魔力とか魔獣とか、もしココが科学の発達した世界だったらあるワケないよねえ？なんて思ってたけど。

実際おかしさまに色々話聞いた時には、ああもうコレ確定だっと思ってたけど。

でも、実際。こーしてナマを見てみると、こう、なんか、うわあ。

だからあたしは気付くの遅れた。

あたしの周りだけ何故だかしーんとしてる事に。

『…………なあ、マヌ。なんか、見られてねえ？』

「そりゃね。こおんな絶世の美青年がいたら誰だっで見ます」

『…………自分で言うなよ自分で』

いやん何でソコで溜息吐くの。

ホントの事なんだから仕方ないじゃないっ。

『…………けど、なんか嫌だ。この視線…………みんな、まるで』

「怖がってるんでしょうねえ」

『っ、マヌ？』

でもソレは仕方ないぱーとっー。  
だって今のあたしの外見は。あたしが書いてた夢小説の主人公の  
姿は。

『世癒』ってキャラは、あたしがそう設定したのだから。

アレは本当に生きているのか。

人とは思えない。

近付きたくない。

そう思われる様な。空恐ろしささえ感じてしまう程の美貌を持つ、  
と。

……………中身あたしでごめんなさい。いやなんかもー、ホン  
トにごめんなさい。

出来るだけキャラ壊さない様にするから許して下さい。

ちろん、と。右に視線を流す。

バツと誰もが目を逸らした。

ちろん。今度は左。

ザツと誰もが一步引いた。

お子様連れのネコ耳おかしさんはお子様を抱えてふるふる震え。  
狐色の尻尾と耳した兵士さんは顔を真っ青にしている。

あたしに気付いた人は目に見て解る程に驚いて。声を失くしてあ  
たしを見る。

綺麗なのに怖い。怖いのに目が離せない。そんなふうに。

『……………なあ、マヌ』

「……………大丈夫」

噛み付きませんよシツレーな。

あたしはそんな人の中、でっかい溜息吐きたくなりながら。

取り敢えず当座の生活費を稼ごうと、目当てのお店を見つければ  
く門をくぐったのだった。

## 6・世界が変わろうと先立つモノはいるモノなのです

初めて見た異世界の街はおっきくて綺麗。  
そしてやっぱりふぁんたじーでした。まる。

「……………なーマヌ」

「何かなメーレ？」

「……………お前、気になんねーの。この視線」

うん確かにグサグサ刺さるけどね。

前方の人が気付いてギョツとしてそのまま硬直。  
擦れ違った人もえっウソ！？みたいに振り返ってそのまま凝視。

「大丈夫なのですよワタクシにはATフィールドがあるので」

「……………何だソレ？」

「心の壁、ってヤツです」

それに元々あたしは鈍感だ。鋼鉄で分厚くて図太いくらいに。

ジョブチェンジした事で、五感どころか気配なんかまでもすごい解る様になってしまったのはソレナリにイタイけど。

職場で同僚の旦那がバイトに手を出して修羅場繰り広げてた時も。ちよっと思ひ込みの激しかった子が何時の間にか課長のストーリーになってた時も。

事が終って笑い話に上がってきて初めて気付くよーなあたしだ。  
アンタほんとに平和でイイわよね、なんて何度言われた事か。

『……………ソレって単に鈍感って意味じゃ』  
「だからそう言ってるでしょ」

あの時の事を掻い摘んで話したら、メーレはげっそり溜息吐いた。  
……………ソレはソレで失礼な。

『……………で。ドコに行くんだマヌ?』

「まずは換金所。或いは質屋。若しくは宝石商、はたまたでっかい商会、ですかね」

『食いモン屋じゃないのか!?!』

「あのねメーレ。人の世界じゃ、何をするにもまずお金が必要なのですよ」

『おかね?何だソレ?つか何でだ?』

「何で、と言われでも……………メーレは、もし知らない人に今日狩った獲物をくれて言われたら。あげます?」

『何で知らないヤツにやんねーといけねーんだよ』

「食べ物屋さんもメーレを知りません。だからメーレに『食いモンくれ』って言われてもくれません」

『あ。』

解りましたか解りましたね。

「じゃあ次に。メーレは今日ピールラビットを3体狩りました。知らない人が『ユニコーン狩ったんだけど、オレユニコーン食えないからそのピールラビット3体と交換してくれ』ってユニコーン1体持つてきました。さてメーレはどうします?」

『……………んー。交換する。1匹でも、ピールラビットよりユニコーンの方がでかいし美味いし……………っそうか!!代わりになるモン持つてけばいいーんだな!?!狩ってくびやうぐ!?!』

「これこれ。早とちりしないの」

『けほつ、けつ、こんつ……くくつつ、マヌー！イキナリ首根っこ掴むなよ！！俺は猫じゃねーぞ！？』

……………いや、お前今ドツカらどー見たって手乗りネ……………うつほん。

「お前が人の話を最後まで聞かないのが悪いんでしょーが。……さて。代わりになるモノを持っていく、のは合ってます。でもソレだけじゃ正解はまだ半分です」

『……………何だよそしたら、後の半分って』

「ソレはですね。もし交換してくれ、って出されたのがドリアラキノコだったりしたら。メーレ交換します？」

『うげ。やだ俺あのキノコ嫌い』

「でしょ？そんなふうに、交換するのが互いに『コレでイイ』って思うモノでなきゃ、取引は成立しないんですよ」

『……………そっか。そー言われてみればそーだよな』

猫なのに、器用に顔をしかめてメーレが唸る。

そんなメーレの頭をあたしはぼんぼん撫でて。

「うん。でもね、何時でも自分の持つてるモノと、自分の欲しいモノが直ぐに交換出来るか、って言ったら。そうでもないでしょ？だから、人の世界ではそーゆー事が無いよーに、誰でも好きな時に好きなモノを手に入れられる様に。誰であっても価値が一律一定なお金というモノを王様が作りました」

『いちりついついてい？』

「そ。例えばおれが持つてても、メーレが持つてても、アソコのウサ耳の女の子が持つてても、この国の王様が持つてても。そのお金つてのはソコの露店で売ってるジューズ一杯分の価値なのです」

『……ふーん？カーさんが持ってもか？』

「うんおかーさまが持っても。で、人の社会にはね、狩った獲物とか自分で作ったモノとか持つてくと、お金と交換してくれたり出来る場所とか、ココでは野菜と交換しますよー、とかがあるんです」  
『うー……ああ、そっか！！欲しいモン持つてるヤツをいちいち探すの、メンドーだからか！！』

「そゆこと」

『けどマヌ、お前その、おかね？ってヤツと交換できるヤツ、持つてんのか？』

「うん、ソレはもうどっさり」と

主にポーチの中とか腕輪の中とか背負ってるリュックの中とかにホントあの森資源の宝庫だ。もう出るわ出るわ、金の塊とか宝石とか色々。

あの時は鉄が欲しくて欲しくて仕方無かったけど、スルーせずに集めといて良かった良かった。

そんな事を話しながら歩いてるウチに、お目当てのお店らしきモノが見つかった。

でっかい外観に重厚な扉。周りには乱雑に荷物を積んだ馬車達。看板に書いてある、ミミズののったくった様な字は読めないけど、多分ココで当たりのハズ。

用心棒さんなんだろう、ソレっぽい格好の扉の左右に立ってた2人のイヌ耳さんとウサ耳さんがあたしを見て固まって尻尾をぶわあ！！と膨らませて。

『……マヌ、ココ？』

「はいな　　メーレ、今からこの建物に入りますけど。ココを出るまでの間、静かにしてて下さいね？」

あたしは用心棒さん達を見なかった事にして、茶色いドアノブに手を掛けた。

〃・〃・〃・〃・〃

ちりんちりんとドアベルが鳴って、入った室内はけっこう広い広さ。センスのいい調度品に、カウンターの前に座る品の良さそうな、鱗がうつすらと見え隠れする青白い肌の、紳士。確か獣人の、鱗人族、だったっけ。

「ようこそ、グランギニョル商、か、い、へ……」

だけどその品の良さも、あたしを目にしたら驚愕に変わって。

……泣いてないわよあたし。コレは心の汗、そう汗なのよ。

「ど、どういった、ごようけん、でしょう？」

「……買い取りを、お願いしたい物が、あって」

「買取、ですか……紹介状は、お持ちですか？」

うあ。

いるのか紹介状。

「……いえ、何処へ持っていけば、買い取って貰えるのか、解らなかつたものだから」

しゅくつた。

こんな事なら、おつきいお店じゃなく、ソコ等のちっちゃい店に入っておけば良かった。

「売れるか如何か、解らない、ですか……恐れ入りますが、どういったモノを、お売りしたいのです？」

「あ、と……貴石、です」

「きせき、ですか？」

「……あー」

何だコツチの世界じゃ貴石って言わないのか。

どうしよう、メーレに聞いて……魔獣が光りモノの事なんて知るワケないか。『ながお』はあたしの作ったアクセに興味深々だったけど。

見せた方が早い、かな？

「……えと、こういう、モノなんですけど」

「ごそごそと、背負ってたリュックを胸の前に持って来て、中から手の平サイズの大きさの、臙脂色したフェルトもどきの巾着袋を出す。」

括つてた紐を解いて口を開けたら、まず最初に出てきたのは綿。

その綿に、くるむみたいに入れてたソレを出す。

青色の、丸い2センチくらいの大きさのサファイアルースを。

「……ソレは……もしかして、サファイア、ですか？」

「はい」

「ころん、と手の平に転がした、ソレを見た紳士さんの目付きが変わった。」

……なんかコワイ。

「……あの、こういったモノは、何処へ持って行けば売れるんでしょうっ。」

「しよ、少々お待ち下さい!」

あれ。何で奥に引つ込んだじゃうんですか紳士さん。  
泣くよ? ホントに泣くよあたし?

『……行っちゃったぞ、マヌ』

「……だね。でもちよっと待って、ってゆー事は。多分直ぐ戻ってくるよ」

……てゆーか早く戻って来て下さいお願いします。

とか思いながら所在なさげにする事約5分。

紳士さんが戻って来た。

ほっ。良かったサスガにコレ以上の放置プレイは寂しいからね。

「お待たせ致しました。当商会の責任者が奥で待っておりますので、此方へどうぞ」

………は?

「え、あ、の?」

「其方の宝石を買い取らせて頂く為にも、一度お話を伺いしたいとの事でした」

「え。買って、くれるんですか?」

「はい。その様に責任者は思っております」

まぢですか。

ニコニコ笑顔な紳士さんに促され、首を捻る。

そして紳士さんに着いて行った先にはやっぱりどどんと重厚な扉

の前。

合図、になつてゐるんだろーか。面白いリズムで紳士さんがノックをして。

すると中から扉が開かれた。入る方が開けるんでないんかい。

しかも中には、数人の護衛っぽい人と、秘書さんみたいな女の人を背後に侍らせ、中央の机に座る白髪交じりな5〜60代の、肌の所々にウロコが見える笑顔の男性。

「ようこそ、グランギニョル商会へ。歓迎致します。私はこの館長を務めます、グランと申す者です。以後、お見知り置きを」

「……はあ」

しかも笑顔のまま立ち上がって近付いて来て右手を差し出された。これはアレか。握手しませう、って意味か。

「……あれ？でも」

「商人の人って、商談が成立した時に握手するんじゃないかなかったつけ。」

あれ、館長さん驚いた。違った？

あ、笑った。

「いやはや、何処で商人の流儀をお聞きになつたんです？」

「……えー、知り合い、から、です？」

うん。仕事先の業者さんとか業者さんとか営業の人とか業者さんとか。

「そうですか。では、握手は商談が成立した後という事で。まずは商品を見せて頂きましょう？」

「え、あの、本当に買ってくれるん、ですか？」

「ええ、ええ。むしろ此方からお願ひしたいくらいでございますよ」

促されて、来客用なんだろう、黒い革のソファに座る。メーレも、あたしの肩から降りてあたしの隣にちょこんと座り。

館長さんは近くにいた女の人にお茶の用意を、とか言っつて、あたしの向かいに同じ様に座った。

「さて、どちらをお売りになりたいのでしょうか？」

「……え、と。コレを」

さつき紳士さんに見せたサファイアルースを、巾着と一緒にテーブルの上に置く。

「あとコレと、コレと、コレも……売れる、のかな？」

だけでなく、リュックの中からおんなじ大きさの巾着を9個出して。

「コレ……は。ダイヤです。コレは、ああ、エメラルドで。コレはー、あ、ルビーだ」

「……コレは、また……」

「コレはジルコン。他にも、ガーネットに、アクアマリン。コレはトパーズ」

「此方は……もしかしてアレキサンドライトですか？ほう、ペリドットまで」

うん。こーして見るとけっこー集めたな。

しかもリュックの中にはまだまだ、パワーストーンなるモノも入ってます。

そしてポーチの方には研磨すらしてない原石がごろごろ。

今出したヤツは、知識ひっくり返して、色々と練成でカットさせて貰ったモノだ。

会心の出来はやっぱりダイヤ。ラウンドブリリアントカットはホ

ントにむずかった。

「手に取っても宜しいですか？」

「あ、はい」

どーぞどーぞと言ってみれば、館長さんは傍に控えてた紳士さんから手袋を受け取って、ソレを手に嵌めてルース達をじっくり見ていく。

窓の外から入ってくる太陽光に当てたり、逆にカーテンを一度閉めさせてランプっぽいヤツの明かりに当てたり、ホントにじっくりと。

……や、いちおー全部ホンモノですよ？解析魔法で調べたし、不純物は練成魔法で取り除いたし。

出された紅茶をしずかーに啜っていると、ようやく納得したらしい。持ってたルースを元の場所に戻し、館長さんは天を仰ぎ見るかのように天井を見つめて、次いで目頭を指で揉み解す。

「……………素晴らしい、としか言い様がありませんな」

その声は、ドコかボー然、とした声で。

「大きさ、純度、そして何よりこの形……其々の宝石の特徴を生かし、そして最も美しく魅せる為の技術が詰まっている。長年商人として生きて来ましたが、これほどの物を見るところは思いも寄りませんでした……何方がこの研磨を？」

「あ、おれです」

え。なんでそんな、ぼかーんとした顔してあたしを見るの。

しかも護衛さん達や紳士さんや女の人まで。そんなにおかしい事かしらん？

「……貴方が、コレを？」

「はい。全部おれが手掛けました」

「ほう……では貴方は、加工技師なのですか？ 装飾品の類は、作られるのですかな？」

「ええ……いえ、確かに指輪とかネックレスとかも作りますけど。旅の合間の手慰み、程度で始めたものなんで、コレが本職、とかじゃないです」

「旅の……何と勿体無い」

「うえ？ もつたい、ない？」

「コレ程の腕前、このまま野に埋もれさせるには実に惜しい。如何です、ウチの専属加工技師として働いてみる気はありませんかな」

「……まさかこんなトコで勧誘を受けるハメになるとは。」

『……マヌ……なんかこのおっさん目がやべえ……』

「ちょこん、と座つてたメーレがあたしにすすすと寄ってきた。うん真剣です。目が怖いですね。」

「や、嬉しいんですけどね？ ホント。でも。」

「……すみません。行かなきゃ、いけないトコロがあるんです」  
きゆう。テーブルの下で手を握りながら、俯く。

メーレのおとーさま。ドコかの国の王様と、契約してるそのヒト（？）に、あたしはメーレを会わせてやりたい。そしてメーレはちゃんと一人前になったぞつて認めさせてやりたい。ソレに、あたしはあたしで行きたいトコがある。

ルーデルディア、神の庭に。

お伽噺かもしれない、実在するのかどうか解らないトコだけど。会ってみたい、この世界の神様に。そして聞いてみたいんだ、あた

しはホントにこの世界にいて良いのか。

俯いてた顔を上げ、あたしはしっかり顔を上げて、じつ、と館長さんの目を見る。

そしたら館長さんは、仕方ないなあ、みたいな感じで、溜息吐いた。

「そうですか。決意は固い様ですな」

「…………… ホントに、すみません。せつかく、誘ってもらったのに」「いえいえ、此方こそ行き成り勧誘してしまい、申し訳ありません…………… もし気が変わる様でしたら、何時でも私を訪ねて来て下さいね。歓迎しますから」

「はは、ありがとうございます」

謝ってみたらく軽く謝り返されて。

しかもお茶目にウインクまで付けられて言われて、思わず笑う。なんだか和やかムードでございます。嬉しいね。

「さて、ソレでは商談に入りましょうか 私としましては、此方の宝石全て買い取らせて頂きたいと思っておりますが、お幾らでお売り頂けますかな？」

「ああ、それなんですケド。おれ、こーゆーの相場、とか解らないんで。館長さんの言い値でお願いできませんか？」

「…………… は？」

え。なんでそんな、ぼかーんとした顔してあたしを見るのぱーとっ！。

しかも護衛さん達も紳士さんも女の人も、さっきよりも口開いてませんか。

「……ちなみに、コレ等の元手はお幾らで？」

「ほぼゼロですね。原石は旅の途中に自分で採掘したモノだし、加工道具も全部自分の手作りですし」

実際の採掘はお子様方に手伝ってもらったし、加工は練成魔法一発で事足りるのですが。

あ。今度は沈黙しちゃった。

「……参考までにお伺い致しますが」

「はい」

「……幾らで売れば良いと、思ってますか」

「そうですね……取り敢えず1月くらい、普通に安い宿屋に泊れて3食食事が出来るくらいの値段になれば良いな、とは思いますが」

あれ。あたし達何か変な事言った？

何でみんな固まるの。

「……取り敢えず、コレ全てでひと家族が約一生遊んで暮らせるだけの額にはなりますな」

「え」

まぢですか。

思わず固まったあたしに、館長さんは深々と、ほんっとーに深々と重い溜息を吐いた。

「……知らないのは仕方ないとして、ソレでも馬鹿正直過ぎます。そんなでは何時か足元見られますよ？」

……す、すみません。ホントにすみません。



## 7・テンプレ的に発生した王道は逃走というナナメ上をいって

びつくらこいた。

宿屋1泊約1万として。1日朝昼晩の食事代に約3千円。

この世界のひと月は25日らしいから、しめて40万くらいになればいっかな、なんて思ってたのに。

あたしホントにそー思ってたのに。

5千万ってナニ。

しかもこの額、館長さんが渋って渋って、最後まで渋ったけどあたしに押し負けて最終的にはじき出された額だ。ホントはコレの4倍だった。

そりゃあ、地球でも貴石は高かった。

台座にもよるけど、1カラットのダイアの指輪なんて最低でも30万はかかる。

しかも館長さんの驚きを見る限り、この世界での宝石加工技術はそんなに高くない。

ソレでも全部で2億ってナニ。

銀行、みたいなのがあれば良いんだけど。

金貸し・換金所はあっても銀行はまだこの世界にない。

だから売り買いは基本的に一括現金。ローンもあるけど、館長さんは一括で出してきた。

あたし庶民すつごい庶民。そんな大金恐ろしくて持ってられませ  
ん。

ちなみにこの世界のお金の単価はレジエという。そして紙幣は無  
い。

銅レジエ半硬貨っていう、5円玉みたいなヤツ1枚は日本で言う  
トコの10円くらいの金銭的価値。うん多分。

で、この銅半貨10枚で、10円玉みたいな赤銅貨1枚に。

赤銅貨10枚で、青銅貨1枚。

青銅貨10枚で、銀貨1枚。

銀貨10枚で、金貨1枚。

そして、なんと金レジエ硬貨10枚で白金レジエ角硬貨1枚。  
な感じです。

……白金レジエ角硬貨1枚ひやくまんえんです。そんなの50枚  
も貰ってしまったんです。

しかもこの白金レジエ角硬貨、見た目はほぼインゴットなだけ  
ど。

でっかい商談とか王宮とかでしか滅多に見る事が無く。

そのうち2枚ホド両替して頂きましたが。

……あたし庶民すつごいしょみ以下略。

救いなのは、四次元ポケットもどきのポーチがあたし専用な事だ。

あたしが手え突っ込めば亜空間に繋がるけど、他の人から見たら  
空っぽのポーチ。

……なくしたら一貫の終わり。薬とか素材とかも入ってるか  
らソレナリに大事にしてきたけど、今後は肌身離さず着けとこう、  
うん。

いや、ソレよりも肌身離さず着けておける腕輪をまた作った方が  
良いんじゃないかしら？

そんな事を考えつつ、次なる目的地へとひた歩……

『なーマヌー。お金つての手に入ったんだろー。なんか食いモン交  
換、じゃねえ買ってくれよー』

「つてまだお昼にもなってないでしょ」

『せっかく人の町に来たのにー。なーなーマヌー。買ってー』

……………まったくこの子つてば。

あんだだけ妹弟に言われて、早速コレかい。

右肩にべったり貼り付いて耳元でにやーにやー鳴くメーレの頭を  
ぺしんと叩く。

そして脚の向きを近くにあつた屋台らしきトコへ。

どーやら串焼き屋さんっぽい。焼き鳥よりはでかいけど、バーベ  
キューよりはちっさいか。

「一本売ってくれ」

「っ！？はっ、はいい！！」

固まってたおっちゃんに一声かけたら慌てて動き出して……あ、  
落とした。

あらら、また一本。ぶるぶる震えながら広げた紙の上に、あつま  
た。

「……………そのまま良い」

「へっ、へいいー！！」

4本目の串焼きを落とす前に搔っ攫って、代わりにちゃりりんと  
青銅貨1枚と赤銅貨2枚をその手の中に落とす。

「……………へ？……………あのっ、お客さん!？」  
「何」

「ひいつ……………い、いや、あの、お代が、い、一本、300レジエで」  
「……………アンタの足元の分込みだよ」  
「へえっ!?!いや、あの……………ちよっと!?!」

スルーだスルー。

おっちゃんの声なんか何の可愛げもない。

「ほら、メーレ。今はコレでガマンして」

「……………」  
「メーレ?」

あれ？

さっきまであんなに喚いてたのに。なにゆえイキナリ不機嫌？

「……………マヌ、さあ」

「うん?」

「なんであんなに怖がられてんの。何もしてねえのに、なんで……………」

「そりゃあ、見た目が怖いからでしょ」

「ドコがつ!?!キレイじゃんっ、マヌ!?!」

「キレイだからこそ、ですよ」

「……………」  
「キレイ過ぎるのを見るとね。逆に怖くなってくるんですよ」

「なんだソレ?」

「はは、じゃあ逆に聞くけどメーレ、おれが羽根出した時どんな感じがしました?」

「そりゃ、すっげキレイなのに身体の芯から震えが奔るみたいな……………」

……………あ

「何となく解りました？」

『……おう……でも今のマヌ、こんなキレイなのに』

「ソレもまた、人と魔獣の価値観の違いですよ……食べないんですか？」

『食う食う食う……えねえ』

ああ、そりゃ串に刺さりっぱなしですもんねー。サスガにニクキユウでは持てないよねー。

ちよつとぎょーぎ悪いけど、まいつか。

持ってた串を右手に持ち替えて、歯で左手の指無し手袋を脱がす。脱いだ手袋はポケットに突っ込んで。

で。串に刺さった一番上。四角く切られた肉を串から抜いてころんと掌に転がした。

「ほら」

『ん。………つつんつめ！！ナニこれうつめ！！』

「牛の肉と玉葱の串焼き、じゃないですかね」

『ちよつとしよっぱいしぴりってるっ！！マヌマヌ、その白っぽいのも！！あと肉もーいつこー！！』

「はいはい……あれ。猫って玉葱大丈夫だったかな」

『俺雑食！！魔獣！！だから大丈夫！！』

「あ、そいやそだった」

言われるままに玉葱抜いて目の前持ってたたら『コレもんつめー！！』って言いながらガツガツ食べる。

そして玉葱がなくなったら今度はお肉2段目。

コレまたぺろりと平らげ。

そんなぎょーぎ悪い事を歩きながらやってたからだろう。

どんっ、と誰かにぶつかった。  
しかも玉葱2段目を抜いてる最中で、串も玉葱も手から落ちちゃったりして。

「あ。」

『ぎゃー！ー！俺のくしやきー！ー！』

誰が俺のだ買っただげたのあたしでしょ。  
しかもいたたたっ、肩に爪立てるな痛いっつっ。

「あっごめ　　っつー！」

ぶつかった人が、慌ててあたしを見て、固まった。

背はあたしより少し下。

ぴん、と立ったイヌ柄の耳、灰色っぽい髪。……なんか見た目某ワードで戦うコスプレイヤーの主人公のチャラ男ばい、けっこーなイケメン。

きましたよ奥さん！！イケメン！！しかも犬！！わんこ！！

その彼の顔が、どんどん強張っていく。

彼の服の裾をつんと引っ張って、怯えた女の子が泣きそうになりながらあたしを見て。

きゃっほいコッチはにゃんこちゃんですか！！かわいいでございませう持ち帰りしちゃっていいですか！！

……………はっつ。

いかにいかに。イキナリキレイどころ並べられてトぶトコだった。

危づく猫被り取っ払っちゃうトコだったわ！！

しかも猫取っ払っちゃったらあたしに残るのヘンタイだけじゃない!??

人付き合いつて得意じゃないから事無かれ主義でいきたいけどそーゆー意味での疎遠はされたくないの！！

「いえ、此方も注意を怠っていました。すみません」

「……い、い、え……そん、な……」

『おーれーのーにーくー……』  
諦めなさい。

『……にーくー……くいもんー……』  
だから諦めなさいってば。

『……くーしーやーきー……』  
後でまた買ってあげるから、アレは諦めなさい

「……は？」

あ。

思わず声が。

『えつまじホント!?!?』

……お前ホント単純だな。

見なさいよあのイヌ耳とネコ耳のポカンとした顔元の作りがイイと間抜けな表情もカワイイのね。

しかもおんなじタイミングで、てんてん、とあたしの足元に目を向けて。

……うんこの顔で串焼きは似合わないとあたしも解ってる。

だからそう何度も目をあたしの顔と串焼きの残骸に行ったり来た

りさせないで。

『マヌ！マヌ！早く！早く買って！！』

って、そーよね謝ったんだしもう行っていいよね。

一歩横にずれてイヌ耳ネコ耳の横を通り過ぎる。

『マヌちげえ！！アレ売ってたのアツチ！！』

「後で、って言ったでしょ。まずは用事を済ませてからです」

「……………あつ、あの！！」

ぐいつ。

って、あつぶないな誰よ人の服引つ張るのって！！……………て、イヌ耳？

ちよ、イヌ耳すつげへたれてるんですけど！！！！びるびるしてるんですけどカワイイんですけどおおおお！！？

何だお前そんなにあたしにお持ち帰りされたいのか！！？

『串焼き買ってマヌー。くーしーやーきー』

……………はつつ。

……………ま、またまたぶつとぶとコだった……………

むううつつ、恐るべしケモ耳つつ。

そしてメーレお前少しは食から離れなさいつつ。

ってゆーか何この子あたしに

「何か」

用でもあんの？もしかしてアレ？

ぶつかつたトコが骨折しちまった慰謝料寄越せやひゃっはーあ……………

……………じゃないですよね遊びすぎましたすみません。

あ、あ、いや、凄んでないから。凄んでないからねあたしっつ。  
だからそんなカタカタピルピルしないでほらネコ耳ちゃんもっ！  
取り敢えず要件言ってほらほら周囲の視線が凄くなってきたるで  
しょ！？

「 なにか」

「っ、っつ、あ、のっ、オレの、オレのっ所為だからっ、そのっ…  
…っ…買ってきますっううっ！！」

「ちよっシユア！？」

「え、おい、ちよ」

いっ ちゃ った。

ナニあれ凄い。文字通り脱兎の如く。

ぽつんと取り残されたネコ耳ちゃんの中途半端に上がった手が寂  
しい。

「……………何事か？」

「っっ、っめんなさいいいいい！！！」

思わず素で呟いちゃった声は。

静かな怒声に聞こえたらしいネコ耳ちゃんをガタガタ震わせ逃げ  
させたのだった。

……………うん。あたし強い子。泣かないわっ。

## 8・この世界の知識なんかは無いモノでして

イヌ耳くんもネコ耳ちゃんも戻ってくる事を待つ事なく、あたしはぼてぼて次の目的地に向かった。

……だつて痛かつたんだもの。主に周りの視線が。

ちなみにメーレは『めしーめしー』煩かつたので、近くにあつたハンバーガーっぽいのを買ってやりました。

で、あたしの次の目的地、だが。

おかーさま、この世界の神様とか人種とか大陸とか暦とか人の世の一般常識とかは教えてくれたけど、ソレ等はホントに、5歳児でも知ってる様な常識、だけ。

この世界の文字とか、どんな国があるとか、ココ最近の情勢とか、そーゆーのは全く解らないのだ。

さてココで問題。知識を得たいなら？

答え　そりゃあ本だろう。

とゆーワケで、あたしがグランギニョル商会の次に探したのは、本屋。

ヒアリングは神様特典で補修か修正が入ってる所為か、何故か一度も不自由した事はないんだけど、読み書きはほんとんど解らない。他にも、この周辺の地図や、風俗、文化、宗教、歴史なんて知りたいし。

『むー。何でそんなメンドーな』

「いやいや。そんなバカにしちゃいけないよ？特に宗教」  
「何でだ？」

「うん、地球……おれのいた世界であつただけだね。とある神様を崇めてる人達がいたんだけど。ソイツ等が『自分達が崇めてる神様を崇めないヤツはみんな悪いヤツだ』つって、自分達以外の人、大量に虐殺したりつて事が何回かあつただよ」

17・8世紀頃の異教徒・魔女狩りなんてモロその代表……裏事情はともかく、怖いねホント。

「……………うげ。何だソレ」

「まあ、この世界じゃ神様は実在するモノつて認識されてるみたいだし？そんな極端な事はないだろーけど。念には念を、つてね」

ソレに、この世界は種族が豊富だ。

ドコその小説では、獣人は奴隷扱いだつた。そして素のあたしは妖魔族そのものの髪と目で、他の人種とはウン百年も戦争するくらい犬猿の仲。

宗教以前に人種差別の方が深刻かもしれない。

「あと、出来れば初心者向けの魔術の入門書なんかも欲しかったりするんだよね」

「うえ？マ又魔術使えんじやん」

「や、おれの使う魔法はこの世界の魔術とは別モンだから。誰も見た事ない魔法だーって騒がれるのイヤなんだよね……………つと。アレ、かな」

きよるきよると通りを見渡しながら探せば、道の角に本の絵の描かれた看板があつた。

ちよつとばかりオドオドしながら店内に踏み込む。

『……………うわ。すっげ匂い。何だ？』

踏み込んだ途端、メーレが顔をしかめた。

やっぱ獣。鼻が良い。

「多分、紙とインク……………我慢してね、メーレ」

『……………後で串焼き』

「……………あー、はいはい」

短く条件出してきたメーレに呆れながら、ぐるりと店内を見回す。そんな広くない店内に所狭しと、上から下まで本というのは圧巻だ。

「……………さて」

ふむ、とひとつ頷いて、取り敢えず見つけたお子様向けっぽい挿絵に単語いっぱいいな本を何冊かぱらぱらと流し読み。

こーゆー時、神様もどきになって良かったと思う。1回見ただけで丸暗記できるなんて。どんだけ優秀な瞬間記憶能力だ。英単語や漢字のテストに欲しかったよこのスキル。

ソレ等を本棚に戻したら、今度は絵本。

ところどころ読めない単語はあったけど、ソレはソレ。あーコレは多分あれだろーな、とかでほぼ問題なく読めた。ちくせう、やっぱり学生時代のテストの時に欲しかったなこのスキル。

「……………うし」

『うし、って。何だ、欲しかった本なのかソレ？』

「や。文字をね。覚えてたのさ」

『……………マ又って、時々ホントにあり得ねえよな』

んまっ、そんな事言う子には串焼き買ってあげないわよっ……………自分でもそう思うけど。

手にしていた絵本を本棚に戻し、さて今度こそ目当ての本を、と別の本棚に向かう。

「……………うん。でもドレから手を付けたらいいんだろね。」

取り敢えず、近場の本棚から本を1冊。

「……………『隠し武器。身だしなみの教え』。どんな本だコレは。」

そつと本を棚に戻し、あたしは店主のおじいさんに声を掛ける事にした。

あたしが入って来た時にはギョツとして固まって、何冊かぱらぱらしてる時にはうさんくさそーな目を向け、今さっきの本を手にした時にはキュピーンと目を輝かせてたおじいさんは、近付いてきたあたしにちよつと身構える。

「うんキニシナイ。気にしないっいたら気にしない。」

「あの、すみません。ちよつと、本を探してるんですけど」

「……………どんな本だね」

「はい、えと、馬鹿でも解る魔術の入門書とか、なんですけど」

「……………は？」

あ。ココへ来て3度目の既視感。

ナニその似合わないーいって感じの声と顔は。

「……………お前さん、ランカーじゃないのかね？」

「違います。……………この後登録しに行こうかな、とは思ってますけど」

あれ、絶句。

何故だあたしどつからどー見たって優男でしょ。剣なんか振り回せそつに見えないでしょ。

いや実際剣どころか大剣でも槍2本でもモーニングスターもどき

な鉄球でも振り回すけどさ。

けど元日本人としてはやっぱり刀。あとウケ狙いでハリセンなんかを良く使いますが。

「あの、ありませんか、そういう本」

「っ、あ、ああ、少し待つとれ」

声を掛けたあたしにおじいさんはアタフタと動き出して、何冊かの本を出して来てくれた。

「お前さん、字は読めるんか？」

「はい、一応」

さつき丸暗記しました。とは言わず。

とゆーか勉強開始数分で大体の文字が解るなんてどんだけ。

おじいさんの持つて来てくれた本の題に目を通す。

……うん。ホントに『バカでも解る魔術入門初級編』なんて本があるんだ。

他にも、『食べれる種類が解るモンスター図鑑』『ホントは怖い薬草の教え』『コレで君も剣士になれる！剣術技巧書初級編』『知って得するサバイバルのススメ』などなど。

……『先手必勝。それは人生の合言葉』て何だ。何を先手必勝するんだ。

……ををう。しかもさっきの『隠し武器。身だしなみの教え』まで。

しかも今手にしてみた本の題名は。

「……『証拠隠滅。それが至上の礼儀です』……」

「……何がどうなったら証拠隠滅が礼儀になるんだよ……？」  
思わずメーレと揃って首を捻ってしまった。

取り敢えず『バカでも解る魔術入門初級編』と『食べれる種類が解るモンスター図鑑』と『ホントは怖い薬草の教え』を買った。指南書とゆーか武器の訓練方法は、知識として頭の中に幾らでも入ってるし。

サバイバルはおかーさま方と一緒に森の中でイヤってほどやった。他の本は……うん。要らないでしょう。

ちなみにこの本だけど。思ったよりも高かったです。1冊が約銀貨1枚。ソレナリの厚さではあるけど、いちまんえんぜんごって。でも『地球の中世ヨーロッパレベル』で考えれば、この世界、紙って普及率低いんだろうなあ。

断った時、おじいさんは目に見えてがっくりした。

……オススメだったのかアレ。凄いまニアツクなオススメだな。思わず引いてもあたしに責任はナイ、はず。

～・～・～・～・～

買い込んだ本をポーチの中につっ込んだあたしは、次に依頼斡旋所、通称ギルド、なるモノを探した。

……そう。この世界にはギルドがある。

おかーさまのお話の中にちよろっとあったけど、ファンタジーノベルとかゲームとかに登場する、アレと多分ほぼ同じって思って大丈夫なはず。うん。

色んな国にあつて、色んな依頼が舞い込んできて、色んな人が携わる。

情勢を知りたいなら、多分ギルドが1番良いと踏んだのだ。

そしてあたしが辿り着いたのは、さつき行ってきたグランギニョル商会よりでつかい建物。

盾の前に杖と剣が交差した絵が描かれてる、看板。

『ココがそのぎるどってトコか、マヌ?』

「……………たぶん?」

……………うん。傍で見ても、剣とか斧とか持った、そーゆー系の人の出入りが多い。

ソレに看板にもちゃんと『依頼斡旋所・シュリスタリア本部』て書かれてる。

でもなんか……………イメージとだいぶ違う様な。

ギルドつてもつとこー、荒くれなおっさんなんか屯する薄暗い酒場つてイメージがあつただけだ。

でも、目の前の建物はなんてゆーか、キレイ。で、デカイ。

酒場つてゆーより、なんか、そうそう、ちっちゃなビルつて感じ。何となく。何となくだけど、威圧感、みたいなのが。

『入んねえの?』

「……………うーん」

入るべきか。入らざるべきか。

ギルドのお仕事つて言ったら、ファンタジーノベルとかゲームとか憶えてる限り色々だ。

いなくなつてしまつたペットの搜索とか。農作物の収穫のお手伝いとか。薬草採取とか。武器やら装飾具やらの素材集めとか。手が足りない時の荷物運びとか。商隊の護衛とか。盗賊の討伐とか。魔物の討伐とか。

……盗賊や魔物の討伐、とか。

うわああああん！！あたし戦えつてつたつて戦えないよ！？

そりゃ貰つた知識の中には戦い方に関するモノもあつたし技術なんて暗殺系の物騒なモノまであつたしおかーさまから地獄の特訓受けたりもしたけども！！

知識だけあつたつて身体がついてかなきゃ意味ないんだつて！！  
魔物はともかく盗賊なんて無理むりムリ！！

……いやでもお仕事内容は自分で選べるんだし。

そーゆーのを避けてしまえば、ダイジョウブ、かな？かな？

最悪、メーレに全部押し付けちゃえば……

『……マヌ、今なんか変なコト考えただろ』

「いえいえそんなメツソウモゴザイマセン」

だからそんなジト目で見ないでーえ。

……ソレに、コレは本屋の店主さんが、本をオスス

メするのと一緒に教えてくれた事だけど。

国の諜報機関を省いて、やっぱりギルド以上に情報が集まる場合など無い、とか。その情報を見れるのは、ギルドの職員か証明証を持つた者だけ、とか。

それに証明証を提示すれば、引き取ってくれる素材の値段に色を付けてくれたり、武器や防具の値を割り引いてくれたりする店も多い、とか。

証明証を提示すれば国境もすんなり越えられる、とか。

「……………まあ、色んな特典付いてる代わりに、デメリットもあるんだけどね。」

登録者は、依頼のランクや期限によつて異なるけど、ひと月でこなさなければならぬ仕事の内容がある、とか。

今は冷戦中だけど、ひとたび妖族と戦争勃発なんかしちゃったりしたら、国を守る為に戦争に強制参加しなきゃならない、とか。

「……………うしやっぱ作る証明証」

『やっと決まったのかよ』

5分も10分も建物の前で悩んだ結果。

あたしは中に入る決意をした。

「……………決して割引とかの特典に惹かれたワケでは……………ハイ惹かれませんでしたせん。」

意を決し、目の前の扉に手を掛けた。

きい、とちよつとだけ音が鳴つて、開く。

建物の中には、けっこいな人がいた。

誰も彼もが武器を持ってて、カウンターで受け付けさんと話したり掲示板みたいなトコで唸つてたり。

ああ、ココってホントにふあんたじーなんだなあ。思わずしみじみ思ってしまった。

そんな人達が、あたしに気付いて固まって。

……………ココでもそーゆー扱いですかあたし。

一般市民ならまだ解るんだ、うん。

でもギルドって傭兵やら冒険者の集まりでしょーよ。もっと肝が据わってても良くない？あやし氣当たりなんてしてないよ？見た目だけで露骨に怖がるって何。

なんだかなあ、な気持ちになりながら。

あたしはキレイな……多分、エルフなおねーさまがいるカウンタ―に即直行。

「すみません」

「……ひっ」

何だその悲鳴は。

しかも何で、あたしを凝視してそんなガクガクブルブルなんだ。

……変だな、目から塩辛い水が……や、氣の所為氣の所為。

ゼンゼン、コレツぽっちも、悲しくも寂しくも泣きたくもなつてないもんねっ。

よしっ、もう一回だ！！

「……すみません」

「……あ、あ……あ……」

もっかい声を掛けても、おねーさまはガクブル。

……うん。

決意は早くも崩れ去った。

泣いてもイイかな。

「お、客様っ、私が、代わりに対応致しますっ！！」

うをつと。おねーさま押し退けて真打ち登場。

うわっほい、男の子なのにケモ耳なのですなケモ耳っ。あ、尻尾茶色と黒のシマシマだー。虎かしらっ。

あ。おねーさまへなへなつて。座り込んだへなへなつて。

……………腰抜かすホド怖かったんかい。

ををう、ケモ耳くんの尻尾が……………ぶふわ、って。膨らんでますがな。

……………見た目……………やっぱ見た目がダメなのか。ネックレス手抜きするんじゃないかなかったのか。

コレは後で、どーにかしよう。つか作り直そう……………作り直せる、かな？

兎に角今はサクツと用事を済ましてココから出るんだ！！

「……………ギルドの、登録手続きを、お願いしたいんですが」

「……………はい？」

ふつーにサラツと言ってみた。

ら、なんか変な顔された。

あれ、何だか既視感。しかもつい最近……………ああ、商会の館長さんだ。

一体ナニをしたあたし！？今度はどんなおバカを出したんだ！？

「……………あの、申し訳ありませんがお客様」

「……………はい？」

「既に登録された方が2度登録する事は出来ないんですが……………」

『え。マヌつてもー登録してたのか？』

いやいやいやいや。そんなハズないない。

あたし初めて。1回も登録した事ないない。初心者初心者。

「あ、紛失・破損によるランカー証の再発行手続きですね。ソレでしたら……………」

「いえ、再発行手続きじゃなく。登録手続きです」

「……いえ、ですが……」

いやだから。

「おれは初心者です」

「……は？」

「おれは、初心者、です」

びしい！と。

空間に亀裂が入った様な、音がした。

……や。だから何で。

「ランカーじゃない！？初心者！？アンタが！？マジかよ！？」

おっひよおおい！！

トラ耳くんイキナリ身を乗り出して来ないで！！大声出さないで！！

しかも言葉使い崩れてるよソッチが素なんだね！！

「しんつつじらんねえ！！ホントに初心者なのかよ！？」

あ。なんだかそんなに力いっぱい否定されると。

何だかムカツと。

「おれが初心者である事に、何か問題でも？」

「……イエ、メッソウモゴザイマセン……」

『……ま、マ又怖え……』

ををう、何故トラ耳くんだけでなく周囲の皆様まで大合唱。

あとメーレ。あたしのドコが一体怖いつていうのかにゃー？

「……では、コチラの登録用紙にサインと、あと手の模様を取らせて頂きます……」

「あ、はい」

ぎこちなく出された紙と羽根ペン。そして青いインク。

紙に書くのは名前だけでいーそーだ。

他にも出身地とか色々欄はあるけど、ギルドという仕事の性質上、あと登録者の中には色んな理由で書きたくない人種もいるからって良かった。出身なんか根掘り葉掘り聞かれたらどうしようって内心心配してたんだ。

ちなみにさっき言ってた、1度登録された人は2度登録出来ない理由も聞いた。

本人認証が必要な時の為や、紛失や強奪されたランカー証を悪用されない為なんだとか。

登録申請用紙と青いインク、そして羽根ペンに秘密があるらしい。

何でも、魔力を帯びた特別な鉱物を粉末にして、ギルドで開発した特殊な魔術液を混合してインクを作成。

ソレで登録書に両手の文様、いわゆる指紋、を取る。そうする事で個人の魔力の波長を保存するとか。

また同じインクを使って、特殊な材料と製法で造られた魂の伝導率がもの凄く高いペンで、登録書の記入欄を埋める事で、魂の情報すら用紙に刻むと。

ギルドのこのシステムは今まで一度も間違いがあった事は無いらしい。

スゴいね魔術。下手な科学より正確だ。

「……えー、はい、大丈夫です。ありがとうございます。では、登

録証の作成、発行には3日掛かりますので、3日後にまた起こし下さい……」

「はい、解りました」

むづ。3日後か。

まあソレだけ手の込んだ(?)登録証なら、作成にソレくらいの時間が掛かるのは解る、かな。

うんならココでの用事はもう終わった。サクッと出ようサクッとだって何時までもこんなぐさぐさぐさぐさっつ、針のムシロみたいな気持ちを味わっていたくない!!

そう思ったあたしは、そそくさとギルドを出る事にしたのだった。

……… コレは逃げてるんじゃない。そう、策略的撤退だ、なんて考えながら。

## 9・調べたモノと自分の頭の中の差に撃沈

そそくさーとギルドを後にした、次の目的は宿屋。

出来れば安くてごはんがおいしートコ。

食べなくても死にはしないけど、魚の姿焼も木の実そのまま肉も飽きた。ちゃんと調理された料理が食べたい。

でもあたし、この世界の宿屋の相場が解らないからなあ。

下手に入ってぼったくられる、のは勘弁願いたい。グランさんにもクギ刺されたし。

「とゆーワケでメーレ、通行人ウオッチング。おれみたいに武器持ってる人が多く入ってくお店探して」

『んあ？何で？』

「武器持ってる人は多分ランカーだ。そーゆー人が入るお店ったら多分宿屋か酒場。値段的にも恐らく世間一般で、お客の入りが多いホドお手頃価格でハズレが少ないから。メーレもどうせなら美味しいごはん食べたいっしょ？」

『おうっ、人がたくさん入ってる店な！！』

……ホントこの子ってば乗せ易い。大丈夫かしら将来。

「……………ん？」

通りをうろつろしながら通行人観察をしてしばらく、よーやくんしっばい店を見つけた。

ズバリ、『日溜まりの草原亭』。

そーいやさっきの本屋も『戦士の学び舎』なんて看板に書いてあったけど、この世界ではそーゆー名前の付け方がデフォルトなんだろうーか。

「あ。イイ匂い」

『マヌ、アソコにしようアソコ！！人もたくさんいるみてーだし！』

「だね」

その匂いに釣られて、ふらふらとドアを潜る。

「いらつしゃい！食事かい？それとも宿、は……………く……………」

そしたらイキナリ元気な声が飛んで……………きたと思ったら尻すばみになった。

……………うん。もう慣れた。

入って直ぐの受付、恰幅の良い女の人。この店の女将さんかな。てゆーか、やっぱりココ宿屋なのね。早速チェックインしなくちゃ。

「両方ともお願いしたいんですけど。あと、ココって動物同伴は可能ですか？」

「……………あ、ああ、はいはい……………動物って、ああ、使い魔連れて歩くランカーも多いからね。大丈夫だよ、ちゃんと面倒見て貰えるんなら……………アンタ、旅の人かい？」

「はい。この街には今日着いたばかりです」

「そうかい……………もしかして闘技大会目当てかい？」

「……………何ですかソレ？」

あ。既視感4度目。

「知らないのかい！？アンタ、ランカーだろっ？」  
「確かにランカーですケド、さつき登録したばかりで登録証もまだない仮ランカーです」

あ。ぽかーんてしたぽかーんて。

何故だ。あたしはそんな強そうに見えるのか。

てゆーかさつき引つ掛かる単語聞いたぞ。

「……その闘技大会って、何なんですか？」

「あ、ええ、と、だね。2年に一度、この街で行われてる大会さ。冒険者傭兵戦士騎士問わず、各国から腕に自信のある人達がこの時期集まってね。アンタ凄く強そうだから出場希望者だと思ったんだよ。すまないね、イキナリ大声出しちまって」

「いえ、コチラこそ教えて下さってありがとうございます。……ソレに、何故かそーゆーふうに見られちゃうのは慣れてますし」

「あはは、そうかいそうかい。見た目はえらい男前でアレだけど、中身は随分大人しそうだねえアンタ。今までさんざ苦労したろ」

「……ええ、まあ」

うん。今日1日ですんごい苦労した。主にぶすぶす突き刺さる視線という名前の凶器に。

「んじゃあ、部屋ひとつね。アツチの、奥の2階に上がって左の1番奥の部屋。1泊5000レジエだ。先払いになるけど、何日泊まるんだい？」

「あ、はい取り敢えず5日で」

「そしたら銀貨2枚と青貨5枚、だね……はい毎度。滞在を伸ばしたい時はまたその時に先払いになるからね。食事はこの1階で摂ってくれ。酒場も兼用してるから、その都度の支払いになるけど。あ、早めに言ってくれれば弁当なんかも作るからね」

「わかりました」

お弁当が出るとな。  
街の外にピクニックもいーな！。

「じゃあ、コレが鍵だ。出かける時は受付に預けてくれ。商店街の裕福層に行けば大衆風呂があるけど、結構高いからね。お湯が欲しい時は声を掛けとくれよ。桶一杯で200レジェ。コレも別料金になるけどね」  
「あ、はい」

ふぬ。

お出かけ時は預けるね。

ソレに、大衆風呂があると。でも高い………どんだけ高いんだろ。

「他に解らない事があつたらあたしか従業員の子に聞いてくれ。あたしはライラってんだ、よろしくね」

「あ、はい、しばらくの間ですけど、宜しくお願いします。おれはマヌ。で、コイツはメーレって言います」

『おばちゃんよろしくう！！』

……いやメーレお前言葉通じないから。おかみさんには「にゃー」としか聞こえてないから。

「ふふつ、そんな畏まらなくて良いよ。ホントに中身はランカーらしくない子だねえ」

「……中身は、って……おれそんなにらしくないですか？」

「そりゃあ、まあ、宿屋の女将やって20年以上経つけど、アンタみたいに敬語を使うランカーなんて、滅多に見ないからねえ」

「……えー、と」

「ま、力が有り余ってる様な連中がやる商売だからね、ランカーっ

てのは。アンタみたいな上品な人は、気を付けないと痛い目みるよ？しつかりね」

「……………あ、あはは。ありがとうございます」

笑って言う女将さんに苦笑を返しつつ、鍵を貰ったあたしは早速部屋に向かう。

鍵に付いた札番は220。階段上がって1番奥の角部屋。

ドアを開けてすぐ横に、ドアがあった。

開けてみたら……………をを、でっかい桶がある。人ひとり入れそうな

これはアレか。お風呂代わりか。洗面台っぽいのも発見。

更に部屋の奥へと入ってみれば、6畳くらいの広さに机と椅子と小さなダンス？うんダンスと、その向こうにベッドがある。

あたしはリュックを机の上に置いて。

とう！！とベッドにだーいぶ！！

『うつ……………マヌ？』

「……………あああひさしぶりのふーとーんーだーああああ」

まふまふだよぼふぼふだよお日様の匂いがするよ〜う。

羽毛布団なんてゼイタク言わない。こーゆーのが欲しかったのよあたし。

くううつつ、1年近く森で生活して、旅に出たら出たで中々町が見つからなくて。

でもっ！今日！！よーやっと、ふつーのふとんにありつけた！！

『……………んなにゴロゴロしてたら落ちるぞ？』

「そんなへマしないよ〜う」

ふとんふとんふーとーんー。

あまりにも嬉しくて、年甲斐なくはしゃいでぐるぐるぐる。  
しらじら〜、とした目でちょこんと枕の上に座るメーレに、へら  
へら笑って。

そのまま、何時の間にか寝てしまったのは……あたしの所為じゃ  
ないと思うんだ。

魅力的なベッドが悪いと思うんだ、絶対。

〜・〜・〜・〜・〜

起きたら昼過ぎだった。

メーレも初めての人の街で色々興奮してたからか、何時の間にか  
あたしと一緒にになって寝ちゃったらしい。

しかもあたしよりもぐーすかと。

無駄に惰眠貪ってしまった。反省。

んで。

今日こそふつーの料理をば！！って1階に降りたら。

……ライラさんに心配されました。

昨日の夕方からごはん食べに降りてこなくて大丈夫だったんかい、  
って。

しかも、アンタ細いんだからしっかり食べな！！って定食大盛り  
にしてくれた。

……2時間掛けて食べ切れず、半分以上メーレに食べさせまし  
た。

や。美味しかったんだけどね。量がね。やっぱりね。  
でもせっかくのご厚意を無下にするのもね。

「んで、今日は何すんだ、マヌ？」

「ん？部屋に戻ってオベンキョウ、だよ」

「えー」

「えー、じゃないの。メーレは早くおとーさまに会いたくない？」

「……うん、まあ。『ながお』と『ちいさいの』より先に見付けた  
いけどさ」

「でしょ？ソレにはまず、色々とおベンキョウしなきゃ」

まあ、昨日買った本は魔物、薬草、そして魔術に関するモノで、  
地理とか国の歴史書みたいのはないけど。

おとーさまを探すには旅をする事が必要不可欠。そして旅に危険  
はつきもの。事前にイロイロと調べておいた方が良いに決まってる。  
昨日買った『バカでも解る魔術入門初級編』をパラリと捲る。初  
級編だからあんまり期待してなかったけど、イヤイヤどっこい。ち  
やんと基礎から丁寧に書かれてた。

で、解った事。

この世界には、3種類の魔術が存在する。

まずひとつ目。

万物からその物質特有の性質を、魔力で干渉する事で取り出し、  
イメージを元に構築して事象を起こす属性魔術。この世界での一番  
ポピュラーな魔術らしい。

ゲームやノベルで良くある、火の玉を出したり氷の矢を出したり、  
ってヤツだ。

そして属性、とある様に、コレには属性があって、火・水・土・

風・闇・光の6種類。

大体の人は1〜2種類しか使えない。これは人間だろーが天使族だろーが魔族だろーが一緒らしい。

そして天使族は闇属性が使えず、妖魔族は光属性が使えない。

3種類使えたら一目置かれ、国から宮廷魔術師になれと引く手数多。

4種使える人なんてのは今までの歴史書を紐解いても数千年に一度現れるか否か。

5種や全種使える人なんていやしない。

「……………ヤバいあたし全種使える」

『マヌは魔の宰なんだから、全部使えない方がヤバいと思うぞ？』

「や、そーゆー意味でなく……………や、イイヤ。後で考えよう」

そしてふたつ目。

万物に宿る精霊に語り掛け、自らの魔力を糧に、精神力で制御して事象を起こしてもらおう精霊魔術。

これはふつーの属性魔術とほぼおなじなだけど。

違うのは、魔力の消費が属性魔術よりも多い、つてのと、精霊と契約して精霊の力を借りて魔術を行使する、つてトコ。精霊の力を借りたら、属性魔術よりも威力が格段に上がるらしい。

例えば火属性の初歩魔術『火の矢』。これを魔力の消費量1、威力1としよう。

コレに精霊の力を借りたら、魔力の消費量は2だけど威力は5以上に跳ね上がるそうぞ。

ちなみにコレ、精霊に気に入れないと使えない。そして精霊に気に入られる人なんてそうそういない。らしい。

『へえ、そうなのか。んじゃ俺等魔獣の魔力行使はどっちかつつたら属性魔術なんだな。精霊に力なんて借りてねえし。んで、マヌ

は何時の間に精霊と契約なんかしたんだ？」

「……………おれ契約してないよ」

『え？いやだつてマヌ、お前魔法ぶつ放す時いつつも精霊侍らせてるじゃん』

「……………侍らせて、つて……………なんか知らないけど力を貸してくれるんだよ。その気もないのに」

『あー……………やつぱ魔の宰だから、か？』

「……………かもねー……………」

んで、最後のみつつ目。

神々に祈りを捧げ、やはり自分の魔力を糧に、神の力を貸してもらつて奇跡を起こす神聖魔術。

これは某最期の幻想ゲームで言う、白魔法、みたいなモノだ。回復、解毒、浄化といった。

時間や結界や空間に関する魔術もコツチらしい。

この神聖魔術、精霊魔術よりも難易度が高く魔力もがつつり喰うらしく。

何より、回復・解毒・浄化には光属性の適性が、結界・空間・時間には闇属性の適正が無いと使えない。

「……………ココまで来たら笑うしかナイよね。全部イケるんだけどおれ」

『いやだからマヌは魔の宰なんだから出来なきゃ変だつて』

「……………いやまーソレはそーなんだどもー……………」

そして、コレは全ての魔術に共通する事だけでも。

魔術を行使するには、必ず『媒体』が必要になる、らしい。

魔力は不確定要素の高い力だ。ソレをコントロールする為の精神力も、体調やら何やらで絶好調と絶不調の波が激しい。

だから、より効率的に、より安定して魔術を使うのに。魔力の集

束、精神力の伝達。制御に発動と、色んな補佐をする『媒介』は、魔術師には必要不可欠なのだとか。

そしてその『媒介』に、決まった形は無い。

ポピュラーなのは短杖に長杖らしいけど、中には独鈷とか錫杖とか、魔石とかったのをあしらったアクセサリーとか、殺傷能力皆無の武器とか、やたら長つたらしい呪文とか、凄いモノでは衣装や踊り、なんてのもあるらしい。

そして魔術陣は必須なのだとか。

「…………… たった一言どころか考えただけで魔法起こせるおれって  
一体……………」

『しかもマヌって他にもイロイロできるよな？』

「…………… うん」

あたしの頭の中、貰った知識や技術の中には、物質を元素からバラバラにして新しく構築し全く別な物質へと変える元素魔法がある。物質に魔力を込める事で様々な効果を半永久的に持続させる付与魔法だってある。

この世界にも、土属性で錬金というモノはあるけど、丸い石を四角くする、程度でしか無い。元素配列の変換も、複数の異なった元素を掛け合わせて化学反応、なんてのも出来ない。練成魔法だけで剣やら何やらを作る、なんてあり得ないのだ。この世界では。

武具なんかへの属性付加だって、簡単にしか出来ない。魔力の籠められる武具に、魔術を掛ける。ソレだけ。だけど魔力が籠ってる間しか威力は発揮しない。その上魔力が尽きると武具は壊れるっていうんだから。

ソレに、純粹に自分の魔力を物質化させる造魔の力だって、一見すると未知の魔法だ。

……しかもあたし、某戦う歌姫の出てくるRPGの如く、詩魔法  
って実際に出来ないのかなってやってみたらホントに出来ちゃった  
からね。

ノリで『ようしやってみよー』なんて軽く思うモンじゃない。つ  
くづくそう思った。

読んでた『バカでも解る魔術入門初級編』をパタンと閉じる。

結論。

いち。人前で魔術使うのは控えませう。

に。使っても火系と風系だけにしませう。

さん。初級のみ使いませう中級上級なんて以ての外です。

よん。神聖魔術に該当するのも造魔も元素魔法も効果付与魔法も  
人前では抑えよう。とゆーか禁止です。

ご。見せかけでもイイから詠唱っぱいの忘れずに。そして魔法陣  
は必ず浮かませせう。

『……………面倒だなソレ』

「面倒でもちゃんと守る。でないと色々メンドクサイ事に巻き込ま  
れそーだ。あ、メーレも人前では魔力使っちゃダメだからね？」

『……………えー』

「だからえー、じゃない。そりゃ魔物を使い魔にしてるランカーと  
かも皆無じやないらしいけどね？ソレでも魔物や魔獣は人にとって  
は害獣、って考えが一般的なの。しかもお前銀天琥でしょ。レアで  
しょ。もし正体バレたら……………お前毛皮の敷物になりたい？」

『うっ、ソレはやだ！！』

そつでせうそつでせう。

コレっくらいしないと正体バレる……………とまではいかなくても、変  
なのに目え付けられる可能性が無きにしも非ず。回避出来る事は回

避しておくに越した事はない。

あたしはちょっとコワモテの、だけど中身はおっとり荒事全くダメメランカー。

ただ、討伐なんて出来ない代わりに、手先が器用で素材なんかの加工が上手いのよ。

そしてメーレは食い意地の張った猫。の使い魔。戦闘能力なんて皆無です。

……………ソレで行こう、うん。

そんなキャラを設定した時には、日もとっぷりと暮れており。

メーレににやーにやーハラ減ったと急かされて、1階に降りるのだった。

10・もらったカードに撃沈した拳句ぶつかった人には再びぶつかる

そして3日目。

起きたのはやっぱり昼過ぎだった。

ダメなんだよあたし朝。弱いんだよホントに。

メーレも惰眠ダイスキなもんだから、朝起こしてっても当てにならないし。

んで。

今日はランカー証が出来る日だから、宿を出ようと1階に降りた  
ら。

……ライラさんに捕まりました。

曰く、どんだけ食が細くても、3食きっちり食べんさい、だそ  
うな。

でも、昨日あんまりにも食べるのに時間が掛かってたから、今日  
の定食あたしの分はふつーより少なめ。

30分掛けて食べた。やっぱりちょっと多かったけど、食べれな  
い量じゃなかった。

……メーレはあたしよりも量が多かったけどね。

明らかに物理法則無視し過ぎだろ自分の(今の)身体と同じくら  
いの量なんて。ほらほらライラさんもウェイターさんもウェイトレ  
スさんもビックリしてるじゃないか。

まあ、ソレはさておき。

ごはん食べ終わった後は行って来まーすと鍵を預け、早速ランカ

「証貰いにギルドへ。  
入ってすぐカウンターに直行して、ランカー証貰ってちよろつと  
説明聞いて速攻で出た。」

「……………や。ちゃんと説明聞きたかったんだけどね。  
帰りにまたあの本屋さん寄りたかったんだけどね。  
ちよつと、そーゆーワケには行かなくなりました。」

「もー競歩なイキオイで肩から落ちそうなメーレを押さえながらだ  
かだかと来た道を戻る。」

『日溜まりの草原亭』が見えた時には小走りだ。  
そのままぱたぱたと走って扉を開けて。」

「いらつしゃ……………おや、マヌちゃんじゃないか。どうしたんだい、  
さつき出たばかりなのに」  
「ええ、ちよつと忘れ物しちゃって」

「きよとん、としたライラさんに、なはは、と空笑いして鍵を受け  
取る。」

「そのまま、2階へダツシュー！！  
どたどたと走って、焦りながらドアを開け。  
入ってすぐぱつたんといキオイ良く閉めて、きつちり鍵掛けて布  
団の上に正座でダイブした。」

「そして、懐からさつき貰ってきたばかりの、ランカー  
証を出す。」

『マヌ？』

「……………何だコレ」

きよとんとした様なメーレの声も無視して思わずばやいても仕方ないと思う。

あの魔法の青い墨と、魔術加工した縦10センチ横5センチ厚さ2ミリくらいの金属板で作られた、ランカー証。

世間一般の、キャッシュカードとかと同じくらいの大きさかな？  
って思ったら、イヤイヤどっこい。

カードはカードでもタロットって感じがした。しかも首から下げられるチェーン付き。

や、ソレは良い。イイんだ。

『マヌ？イキナリどしたんだ？』

「……………何だコレ」

渡された時、コレは表面にあたしの名前しか書かれてなかった。

初回時に、登録書で書いて押してっつけた、魔力と魂のデータしか入ってないって言われた。

コレを正規のランカー証にするには、持主の気を流し込まなきゃならない、と。

……………気つてのが解らなかつたら大体のイメージで、とも言われた。  
なんつーアバウトな。

まあ、ソレもどーでもイイんだ、今は。

『なあ、マヌってば』

「……………何だコレ」

気が初めてカードに循環して、登録証の交付は終わり。晴れて正ランカーとなる。

気が循環したカードには、持主のステータスがRPGばりに出てくる様になるそーだ。

特殊だけど、神聖魔術のウチのひとつらしい。

この世界の神様と言われる『白帝』ソル・ファガン。その彼の属神である『誓約の神』ソフフォードと『記録の神』ラルフォードの力を借りて、このランカーカードは作成されてるぞーだ。

そしてこのカードに浮かび上がった数値は、その神様達が持主の詳細を記したモノである。

……………この世界では、神様とゆーのは実在しててしかも人の生活に密着してるらしい。日本の八百万の神みたく。

いやいやいや、ソレも今はどーでもいんだよ。

『マーヌー』

「……………何だコレ」

あたしのカードも、気を流したら直ぐに循環して、一瞬光って色んな項目がだだーっと出てきた。

名前の下に、魔力・霊力そして気力。知力・体力に、魔力抵抗力。俊敏力・筋力・耐久力。幸運・属性・種族に称号。あとスキル。今見てもホントにRPGだな……………ってのはおいといて。

……………RPGばりに出てきたステータスが尋常じゃなかった。

「……………何だコレ」

そう。あたしのカードに出てきた数値。

それは……………

ギルドランク G

登録名 マヌ

種族 異界の渡神

属性 世界(魔)

気力 SSS(-)

魔力 EX(限界突破)

|     |           |
|-----|-----------|
| 霊力  | A (+)     |
| 知力  | D (-)     |
| 体力  | SS (-)    |
| 抵魔  | EX (限界突破) |
| 俊敏  | SSS (+)   |
| 筋力  | S (-)     |
| 耐久  | S (-)     |
| 幸運  | D (+)     |
| 称号  | 精霊の祝福受けし者 |
| スキル | 底無しの書庫    |
|     | 造魔        |
|     | 二十二翼真の透色  |
|     | オールマイティ   |

何度でも言おう。

なんだこれ。

ギルドランクは、まあ良い。

大きい方からSSS・SS・S・A・B・C・D・E・F・Gと、10段階中、最下位のGランクだ。

このランクはギルドへの貢献度とかも反映されるって言ってた。だから、まあ良い。

ちなみに平均的なランカーのランクはD。ひと月ひと家族を余裕で養えるくらいの稼ぎになる、らしく。

CからBに上がるには、努力の上に才能がいる、とか。

更にAランクの人には、たまに拒否が不可能な仕事や、国家の重要機密にあたる仕事を依頼される事があるとな。

そんなシークレットクエストを数こなし、依頼主の信頼を得てい

く事で、Sランクへと上がっていくらしい。

……脱線した。戻そう、話の路線を。

けどステータスはギルドランクとはちょっと違ってて、ランクGはレベルの0、ランクFはレベルの1っていうふうになってる。レベルを上げたら自動的にランクが上がって、で、最高レベル9のSSSでカンスト。

つまり、何が言いたいかとゆーと。

EXって、限界突破って何だ最高SSSじゃないのか。

あたしはランカー成り立てだぞ。

ふつーFとかGとか一般的な平均値はDじゃないのかB以上は成績優秀者しか着けられないんですよ。

しかも何故知力と幸運値が低い!!

オマケに何だ、このスキル。

書庫、は多分知識の事だ。造魔、も言うに及ばずとして。

二十二翼真の透色、ってのはアレか羽わさわさーっ状態の事が。

でも『オールマイティ』ってのは何だ。

ついでに種族と属性!!誰かに見られたら1発でアウトじゃないか!!

この称号だつて何!?精霊さん達に好かれるよーな事なんてしてないわよあたし!?

……不幸中の幸いは、隠したいトコロに消えろ と思いつながら触ったらホントに消えてくれる事だろーか。

でもソレも完璧じゃない。

落してギルドにでも届けられた日にゃ……あ、悪夢だ。

どーしてギルドなんかに登録しようと思った、あたし。

「マヌ？お前ホントに大丈夫か？」

「……………あー、ちょっとヤバいかも」

ぼふん、とあたしの寝転ぶベッドの縁に座ったメーレに、ぴら、とカードを見せる。

メーレはソレをサラツと見て……………途端に難しい顔をした。

「……………コレ誤魔化せねえの？」

「……………やー、流石にムリでしょ。管理してんの神様らしいし」

「……………サスガだぜ神様……………」

メーレだって、あたしの正体がバレる事がどんなに空恐ろしいモンか、言われなくても解ってる。

こんなの堂々と見せられるモンじゃない。誰かに知られた日にや大騒ぎ間違いナシだ。

ギルドランクと名前以外をケシケシ消したランカー証を前に。

あたしはその日1日、布団の中から出る事は無かった。

〕・〕・〕・〕・〕・〕

次の日。

あたしは開き直った。ええ、開き直りましたとも。

作っちゃった以上もーどーしよーもない。

お財布代わりの腕輪作ったださ!!  
お金と一緒に仕舞い込んださ!!

他の腕輪含め手首を切り落としてもしない限り落ちない大きさに  
しましたさ!!

そんなこんなで、今度こそ本屋に行こうと昼過ぎに1階に降りた  
ら。

……………何故かライラさんが仁王立ちしてました。

「おはよう、マヌちゃん」

「……………お、おはようございます……………」

『……………マヌ、おばちゃん怖え』

うん、そうだね。怖いこわいコワイ。

笑顔なのに怖い。

「……………って言ってももう昼だけだね」

「そ、ソーデスネ」

うん怖い。

何故だ。何故そんな怖いんだライラさん!?

「ねえ、マヌちゃん。昨日あたしが言った事、憶えてるかい?」

「え、昨日、ですか?」

何を言われたあたし。思い出せあたし。

昨日慌てて帰って来た時にビックリされて、その前に……………  
あ。

「思い出したかい？」

「は、はい……えと、すみません」

しゅーん、として謝ったら、でっかい溜息吐かれた。

「……初心者とはいえ、アンタ、ランカーになったんだろ？」

「………はい」

「体力作りも体調管理もランカーの仕事だよ？」

「………はい、すみません」

「朝弱いのも食が細いのも解った。けどね、せめて夕飯はしっかり食べな。お金無いワケじゃないんだろ？」

「………ごめんなさい」

うわぁん。ホントにごめんなさい。

しゅーん、としながら謝って。

そしたら何故か、ぐっ、とたじろいだライラさんは、仕方ないねえ、なんて苦笑い。

「お昼、食べるだろ？」

「はい」

そのまま席に案内されて、ちょっと待ってたら直ぐにライラさんが料理を持って来てくれた。

お肉のソテーっばい。量は少なめ。ロールパンとオニオンスープが付いてた。

『うおー！くいもんー！！』

「はいはいメーレちよっと待って……いただきます。」

『いただきますー！！』

ばむ、と手を合わせて早速食べる。

……うぬ。おいしい。

「だけどこー毎日洋食系ばっかだと……ごはんとお味噌汁が欲しいなあ。」

「や、でも中世ヨーロッパ風な世界に味噌や醤油はないだろう。」

「魚醤でも広めるか？アレ魚の内臓と塩だけで出来るし。」

「なんて思いながらまくまく食べて。」

「午後からは、予定通り本屋さんに行こうと、『日溜まりの草原亭』を出た。」

「出た、んだけど……」

「……てーきゅーび……」

「休みて事か？」

「これは予想してなかった。」

「この世界にもあるのか定休日。」

「しかたないから路線変更。」

「んー、宿に戻って何か作るかな」

「……部屋に籠っちまったら時間忘れねえ？」

「……う、ライラさんにまた怒られるのはヤだな」

「ギルドってトコで情報収集とかってのは？」

「……やー、でもソレもはかどらないんじゃないかなあ」

「何で」

「知り合いいないし、ギルドランク低過ぎ。あんまいい情報手に入らないと思う」

「そっかー。アソコ以外に本のいっぱいあるトコってねえの？」

「探せばあるかもね……このまま、街中を散策してみるかな」

あ、イイかもしない。どっかに図書館無いのかな図書館。

そんな事をブツブツ言いながら歩いてた所為だろう。

どんっ、と。

そんなに強くはないけれど、右の肩が誰かにぶつかってしまった。

「っ」

「じっ、じめ　　っっ!!」

思わず謝ろうとパツと振り向いたら、ぶつかった人もおんなじ様に口を開き掛けて。

……………慌ててあたしを見て、固まった。

ウン、キニシナイヨ、キニシナイ。

て、ゆーか……

この子は人にぶつかるのが特技か何かなんですかい？

灰色の髪とイヌ耳。ふさふさの尻尾。あたしより少し下の背丈のソレは、昨日あたしにぶつかって、脱兎の如く逃げ出したあの少年だ。

そしてやっぱり、というか何ていうか。彼の隣にはあのネコ耳ちゃんもいて。

おろ？今日はもう2人、連れがいるみたいですね。

1人は……ん？んん？

どっかで見た事あると思ったら、ギルドのトラ耳受付くんではないか。

あらヤだ知り合いだったのアナタ達。

「……………あ、あなた……………」

そのトラ耳くんはギルドにいた時の服装とは違う、いかにも冒険者です、みたいなカッコであたしを見てビックリしてる。

そしてもう一人。ネコ耳ちゃんよりちょっと高いくらいの背丈。緑の髪に細めの目の、青白い肌にうつすら見える鱗がグランさんみたい。ネコ耳ちゃんとはタイプが違えど、けっこーな美人さん。……なんだけど……どーしてあたしは初対面でこんなに睨まれてる。

まあいい。今は取り敢えず固まっちゃったイヌ耳くんだ。

「すみません」

「……あ……や、こちらこそ……」

へこり、軽く頭を下げ謝る。

わんこはぎくしゃくと、ソレでも昨日よりは滑らかに、ギチギチと頭を下げた。

ソレを見て、じゃあ、と再びメーレと共に歩き出す。

街中の探索開始、目指せ図書館だ。

だけど歩みは、くん、とした小さな引っ掛かりで数歩しか進まなかった。

………うん。何だろね。何でこんな、でじゃぶが起こるんだろね。

ちろん、と引っ掛かるトコを見てみたら。

腰に着けてるポーチ。ぎゅっと掴んだ腕……辿ってみますと、やっぱり、わんこ。

しかもどーして自分で引き留めておきながらそんなビックリした目で自分の手を見てるのさ。

ってゆーか昨日も思ったけど何この子あたしに

「何か」

用でもあんの？だったら早く言ってよコッチは早く移動したいんだよ周りの目が痛いからっ。

ソレともまた脱兎かもしかして。

ソレも勘弁して下さいよ前のあの後「お前一体何やった」って視線がグサグサ痛かったんだからっつ。

てゆーか今一番痛いの緑の美人さんの視線なんだからねっ。

ネコ耳ちゃんなんて泣きそうだしっつ、トラ耳くんすっごい険しいわよ顔がっ！！

取り敢えず要件言ってほらほら周囲の視線が凄くなってきたるでしよー！？

「 なにか」

「っ、っつ、あ、のっ、き、聞きたい事がっ、有るんですけどっつ  
！！」

……ふぬ？

聞きたい事、とな？

「あっ、あああなたはっ、ととと闘技大会のしゅしゅしゅっ出場者ですかー！！」

……はい？

「とっぎたいかい？」

「「「「え？」「」「」

とっぎ、と言えば討議、いや闘技の事ですか？

とゆーかなんでそんなポカンとしてんの。

「……し、知らない、んですか？」

「何を」

「ひいつ！？ああああのっ、えとあのそのっ、2年に1回の割合でココの闘技場で行われる闘技大会ですっっ！！」

ころしあむ。ギリシャのコロツセオ思い出した。

……ああ、そーいやライラさんが言ってたな。この時期、各国から人型種の強いヤツが集まって世界一を決めるって。

「ああ、アレの事」

「そそそそそっですソレの事ですっっ」

そーいや確かおかーさまの話にもちよろつと出てたぞ。

かなり昔から、戦闘マニアな獣人族の王様主催で闘技大会を大々的に開催する国があるって。

と、ゆー事は？ココってその戦闘マニアな獣人の王様が治める国。南のポミュニス大陸、その北西側に位置する、ファルガス国、てワケですか。

今更ながらに気付きました。

でもソレはソレ、コレはコレ。

何故ナニどーしてあたしが出場者？

「おれは出ませんよ」

戦い？はっ、怖いぢゃないかそんなの。

人間止めてまだたった1年、おかーさまやお子様方のお陰（？）で動物魔物は狩らせて美味しく腹ん中に納めさせて頂きましたが、対人なんて無理ムリむり。

「「「ええつつ!?!?!?!」」」

……………何故そんなに驚くの。

しかも緑の美人さんまで。何でそんな目を皿のよーにするの。

「しゅ、出場しないんですかっ?」

「え、でもランカーですよねっ?」

「しません。つい昨日ランカー証を貰ったばかりの新人です」

おや。絶句。

ライラさんといい本屋の店主といい、あたしはそんなにコワモテなのか。

しかもトラ耳くんは知ってるハズでしょどーして一緒になって驚くの?

あ。ちよーどいや。

「あの、ちょっとお伺いして宜しいですか?」

「「「はっ、はいつつ!?!?!?!」」」

「図書館、この街にありますかね?」

……………だから何でチンモク。

あたしはアレかそんなに本が似合わないとも言っつのか。

コレでも人間時代はけっこーな活字中毒だったんだぞっ。ライノ

べ・漫画限定だったけど!!

### 11・3 度目ともなればコレはもう必然でせう

図書館はホントにあった。

わんこ達に目の前まで連れてってもらいました。

閉館ギリギリまで粘って、読める限りの歴史書や地理系の本を読んだ。

解った事は少ない。

先ずは地理。

この世界には4つの大陸があつて、あたしのいるココは自然の恵みに満ち満ちた草原と雷雨の南大陸、ポミュニス。その北西側に位置するファルガス国の王都、シュリスタリア。

そしてポミュニス大陸にはあと5つ、東の大陸ラキサスには2つ、西の大陸クインには4つ、北の大陸ソエルトには2つ、国がある。

………文明レベル低いのに、国と呼べるモノが14も。

おかーさまから貰ったヒントなんて『ドコかの王様と契約してる』だけだから、下手すりゃ風漬しでおとーさまを探すしかない。コレはけっこーキツイかもしんない。

そして、神様に関する大ざっぱな歴史。

大昔は神様も良くルーデルディアを経由して、ガロ・ファイレル………いわゆる地上、に遊びに来てたそーだ。

だけど、当時1番文明の発達してたアディールという大陸のとある国が、神々になり替わろうとしたらしい。

けれどもヒトが神に敵う事はなく。彼等の帝国は滅び、アディー

ル大陸そのものすら海に沈められた。  
ソレが1万と2千年前、だそうだ。

いちまんねんとにせんねんまえからあ・い・し・て・るー……い  
やいや、違う。

ソレ以来、神様達は祈りを聞いて力を貸してはくれるものの、地  
上に降りてくる事は無くなった。

アディール大陸が沈んだ事によって、ルーデルディアへ至る道も  
無くなってしまった。

とーぜん、1万と2千年も昔の事なので、当時の事を知ってる者  
は天使族にも竜族にもおらず。

現時点で、ルーデルディアへ行く方法は皆無である。

……諦めなきゃなんない、んだろーか。

収穫が無かったモノで、メーレも一緒になつてとぼとぼ宿に戻る。  
しゅーん、としたあたしにライラさんは「何かあったのかい？」  
って聞いてくれたけど。

何でもナイです、としか返しようがないね。

メーレのおとーさまに会いに全部の国の王様手当たり次第に会わ  
なきゃいけないんです、とか。ルーデルディア行きたいけど方法が  
解らないんです、なんて。

そんな言おうものなら、夢多き少年かタダのバカだと思われる。  
や、中身はモロおたくですけどね。似たり寄ったりですけどね。

……まあ、探し始めたばかりだ。そんなさっくり見つかるなん  
て思っていない。

気長に地道に行きませう。

なんて思いつつ、1階食堂のカウンター席に座る。  
今日はちゃんと夕飯を食べるつもりだ。

「おう、マヌ。今日はちゃんと食うのか」

「えと、はい」

「そうかそうか。何食うよ?」

「そうですね……この、タタル魚のムニエル、お願い出来ますか?  
あとメーレにミルクのステーキを」

「はいよ、ちーと待ってな。直ぐ作るからよ」

厨房から声をかけてきたライラさんの旦那さん、コック長もして  
るトマさんが笑って奥へと引っ込んで。

『明日からどーすんだ、マヌ?』

「どーしよつかねー」

歴史書関係なんて、本屋さんに売ってるのと図書館にあったのと、  
あんまり差はないと思う。

そしたらやっぱり、色んな人が集まるギルドで情報収集、なんだ  
ろーけど。

「……貴族とか王族とかのツテが出来たらなあ」

王宮だったらこー、もつと突っ込んだ、重要書物とか、もしかし  
たら禁書指定なのもあるだろーし。

『けどマヌ、キゾクとかオウゾクってめんどーだっつってなかった  
か?』

「……………そーなんだよなー」

政治とか政治とか陰謀とか政治とか、そんなんに関わりたくはな  
い。

『本のいっばいあるトコにもっかい行くってのは?』

「却下。今日行った図書館、お城の書庫を除いたらこの街で一番大きいトコらしいし、置いてある本も似たり寄ったり。コレ以上の収穫は無いと踏んで良いよ」

『うー……じゃあ、やっぱりギルドで聞き込み？』

「ソレしかないかなー……ギルドランクが低いから、閲覧出来る情報も少ないんだけどね」

でも、丁度良いかも知れない。

何が、と言えば。しばらく真面目にギルドの仕事を受けるのに。

ギルドの説明にも本屋の店主の話にもあったけど、登録者は、依頼のランクや期限によって異なるけど、ひと月でこなさなければならぬ仕事のノルマがある。

ギルド登録の特典の為に登録するだけして依頼受けない、なんてのを防ぐ為、って言ったた。

Gランクのランカーは、ひと月最低10件の日雇い依頼をこなさなければ、登録証が無効になるのだ。

ヨシじゃあ明日からしばらく真面目にギルドの仕事を……

「あー！」

ん？

なんか聞こえた。なんかオドロイタよーな声だ。

首を傾げ、ちろん、と店内を流し見る。

酒場を兼用してるこのお店は、だけど時間帯がまだまだ日が暮れただばかり、という事もあって、お客の入りはまだ少ない。

その、少ないお客の中に。

「あ。」

わお。つい最近見た顔。今日の昼間にぶつかったわんこじゃないですか。あ、にゃんこも。

ギルドのトラ耳な受付さんに……ををう、痛い痛い緑の美人さん。つかやっぱイイね美人にイケメン。目の保養だよ。ってゆーか妄想掻き立てられちゃうよ!!

ツンと澄ました気紛れっ子!!かまって欲しいわんこ!!

だけどゼンゼン構ってくれなくてしょんぼり耳垂れさせて諦めた時に!!長いしっぱがわんこの尻尾にくるん、て絡まって来たり!!ソレに気付いてバツとトラ耳くんに振り向くわんこ!!そっぱ向きながら「ドコ行くつもりだよ」なんて文句言うトラ耳くん!!

ああ!!イイわイイわ!!わんこはソコではあって笑ってトラ耳くんに飛び付くのよ!!

そんでもってっ、トラ耳くんはしばらく剥がそうとするんだけどっ、わんこがあんまりにも嬉しそうだから諦めて、でも素直になるのは癪だからニイってあくどい笑みなんて浮かべちゃったりして!!わんこの尻尾に巻き付けてた自分の尻尾移動さすの!!腰とか脇腹とかに!!くすぐったくてわんこ離れようとするんだけど、トラ耳くんは逃がさない様に逆に抱き締めてっ。尻尾っ、しっぱが腰から脚にっ、そしてそして　　っぎゃーっっ!!!!!!イイ!!イイぞそのままベッドイ

ぺちん。

『マヌキもい』

「お待たせしましたー。タタル魚のムニエルとミル牛のステーキです」

……ををう。

メーレから猫ぱんち頂きました。

しかもトマさんとライラさんの娘さんでウエイトレスさんのリチアちゃんにブチ壊されましたありがとうございますございました。

って、ああっ！！あたしの心のオアシスが！！  
でもめげないわだって目の前にネタがあるんだもの！！

ぺちん。

『だからマヌキもいつて』

「ポリウム少なめにしてもらってるけど、マヌさん食べられそう？」

……………ふ、ふふふ、ふふふふふふふ。

2発目いただきましたありがとうございます。

こんにやろつドモ1度ならず2度までも……

……………や、もーいーわ。

確かにこんなトコで、くねくねうにようによしてるのは客観的に見なくてもキモい。

取り敢えずごはんにしよう。

「あ、うん大丈夫。ありがとうね、リチアちゃん」

「いえいえ、どーいたしまして。あ、コレサービスのスープね」

「ん、ありがとう」

にっこり笑って「じゃあ、ごゆっくり」「って言って戻ってくりチアちゃん。

あの子もけっこーカワイイ。ミニなスカートからすらりと伸びる脚は目の保養だ。

トマさんに似なくて良かったと思っ。

まあ、ソレは今はおいといて。

「さて。じゃあ、いただきます」

『おう！いったきまー』

「なあ、アンタ」

「……ふえ？」

『んぬ？』

ぱむ、と手を合わせたら、後ろから声が掛かった。

首を傾げて振り返れば……あれ。トラ耳くんではないか。

「……なにゆえ？」

「アンタ、1人か？」

「え、ええ、まあ」

「なら、俺等と一緒に食わねえ？」

「なにゆえっ!？」

「え、と」

「1人で食うのも味気ないだろ？ソレに、アンタと1度話してみたかったんだ」

「だからなにゆえっ!？」

あうあうあう、てしてる間に。

トラ耳くんはさっさとあたしの目の前の料理を手に持って。

「ほら、行こうぜ」

「……きょーせーですかそーですか。」

『ああっ、俺の食いモンー!!--』

「……………仕方ない、か」

変に断って悪目立ちしたくないし。

お付き合い、いたしませう？

さつさとテーブルに向かうトラ耳くんの後を追っかける。

そのテーブルの上にはガッツリ系な料理が5品ほど。

そして席に座ってたわんことにゃんこはやっぱりドコかぎこちなく。

そして緑の美人さんの視線は凶器ですね。穴開きそうです。

「あのっ、昼間はホントに、すみませんでしたっ」

「……………いえ、コチラこそ……………え、と。お邪魔、します」

「あっ、はいっ、どうぞどうぞー！」

慌てて立ち上がって、椅子を引いてくれるわんに、あたしはちよこんとお辞儀して。

座ったら、トラ耳くんがあたしのムニエルを目の前に、テーブルの上に降りたメーレの前にミルクのステーキを置いてくれた。

「悪いな、付き合ってもらって俺、アンタと1回会ってんだけど、覚えてるか？」

「……………ええ、ギルドの受付さん、ですよね？」

「アタリ。つても、ギルドの受付は臨時なだけだな」

「……………え、そうなんですか？」

ありや。従業員さんだと思ってたよ。

「ああ、親戚が職員やっててさ。人手不足だっけ借り出されたんだ。元は俺も双剣のランカーでランクはC。レグレっていう。宜しくな」  
「えと、オレはシユア、です。大剣使いの、レグレと同じランクC

で

「私、サウラっていいいます。ランクはCで、得意なのは」です」

「……………テトラ。短剣使い。ランクC」

「……………マヌ、です。宜しくお願いします?」

「ナゼ疑問形。というかその敬語何とかならないか?俺等同じ年くらいだろ?」

「……………はあ、多分」

とゆうか30過ぎのおばちゃんですが。

「と、取り敢えず、食べながら話そうか」

「そ、そうね。折角の料理が冷めちゃうし」

「だな……………けどアンタそんなんで足りるのか?つか普通ソッチの猫のと反対だと思うんだが」

「あ、うん。おれ、そんなに量食べれない、から。ソレにメーレ、肉好きだし」

『おう!にくにくーvvv』

へら、と笑いつつムニエルを口に運ぶ。

……………うむ、美味し。トマさんイイ仕事するなあいつつも。

こりゃ本格的に、魚醬作ってもらおっかな。

ソレからポツポツとお話しながら、食事の時間が過ぎていく。

レグレとサウラちゃん、そしてシユアとテトラちゃんは幼馴染、だそーで。

幼馴染設定キタアアアアアアアア!

コレはアレですかアレですねわんこくんを挟んだ3角関係!!!いや4角関係っ!!!

わんこを好きになにゃんこ!!!だけどトラ耳くんもイヌ耳くんが好

きなのをにゃんこは解つてて、敢えて「あたしわんこの事好きなんだけどどーしたら良いと思う？」とかつてトラ耳くんの気持ちに気付かないフリしてトラ耳くんに相談持ち掛けんの幼馴染の特権振り翳して！！

トラ耳くんはソレにすっごい動揺して迷ってするんだけどわんこの事考えたら彼女作って結婚して子供作ってのが幸せだろって心を痛めながら2人の事を応援しちゃうのよ！！

ただどだんだん中睦まじい2人を見てる事に耐えきれなくなってある日突然姿を消しちゃうの！！

ソコヘトラ耳くんの事が好きだった美人さんが爆発！！アンタの所為でっ、アンタの所為でー！！ってわんこに八つ当たり！！

そしてわんこはハツとする！！いなくなっって初めて解るトラ耳くんの存在！！追い続けるにゃんこの手を振り払いっ、わんこは言う！！「俺の一番は……やっぱアイツなんだ」　きいいいやああ

ああああ！！イイわイイわよそしてわんこはわんこを探す旅に出がりがりっつ。

『マヌキもい』

あうちっ！！ナニするのさメーレ！！イキナリ手の甲引っ搔かないでよ！！

……………や。モチつけあたし。もとい、落ち着け。

トリップするのはイイけど、時と場所と場合を考えよう、うん。

彼等はココ、シユリスタリアから歩いて5日くらいのトコにあるタルカって町からやって来たらしい。

目的はもちろん、闘技大会。シユアは重量級部門、レグレとテトラちゃんも軽量級部門、サウラちゃんはエトセトラ部門とやらに出るんだそーな。

「で、団体戦、つてのもあるんだけど」

「団体戦の参加資格が、5人以上のパーティなの」

「オレ達、4人しかないから、出たくても出られなくて」

「……………あ。なんかヤな予感。」

思わず身構えてしまったあたしに、彼等は真剣な顔をする。

そして、次に出た言葉は。

「アンタに頼みがあるんだ」

「……………えーと。イキナリで悪い、とは思っただけど」

「私達と一緒に、団体戦に出てみる気、ないかしら？」

「……………あっはん。」

「やっぱそーきますか。」

「……………え、と。おれ、弱いですよ？」

「ああ、アンタが登録したばかりの初心者だって事は知ってる」

「けど、他の知り合いに声をかけようにも、皆もうパーティ組んじゃってて」

「モチロンちゃんとフォローはするし、大会までにギルドの討伐依頼とかで戦い方も教えるよ」

「ソレに、ランカーに登録するくらいだから、多少は戦えるんだろ？」

「……………だからお願い（頼む）パーティ組んでくれないか（な）？」

「……………あっ。」

「どーしようあたし。どーすればいいあたし。」

大会に出るメリットなんて……………ああでもギルドランクに影響するんだっけ。

いや、でも付け焼刃で連携なんか取れるかううーん。

『どーすんだ、マヌ？』

「……ううーん……」

考えて。かんがえて。カンガエテ。

「……折角のお誘いですけど……」

バツサリ言い切る、とまではいかないけど、そろり、と。

だけどわんにゃんトリオはあたしの声に力が無い事を見抜き。

「どうしても無理、か？」

……うぬ。アツサリ諦める様ならあたしみたいなペーペーに

声掛ける、なんてしないよね。

だけど、ねえ。

「ランカー成り立ての人間に声を掛けて、短期間の戦闘実  
施訓練をして、付け焼刃の連携しか出来ないのに出て、勝てる様な  
温い大会じゃ、ないでしょう？」

「……うっ」「」

「参加する事に意義がある、とは良く言いますが。数合わせだけ  
のパーティで、本当に参加する意義はあるんですかね？」

「……うぐっ」「」

……おー。わんにゃんトリオが沈黙した。

そしてテトラちゃんはさっきから無言だね。しかもあたしが断つ  
た途端、あたしに興味失くしたみたいにガン見して来なくなっただし。

……そんなにあたし嫌われてんのかこの子に。

ま、まあ、でも言葉とーりだと思っただあたしは。

「個人戦は出るんでしょう？なら今回はソレだけに絞って、団体戦は仲間が増えてから、次の機会にしたらどうですか」  
正論じゃなかるーか。

……でもちよつとバツサリ言い過ぎたかな、なんて思うのはあたしが元日本人だからか。

「……うん。そうね。確かにその通りだわ」

「……だね。ごめん、イキナリこんな話して」

「や、コツチこそ………て、事は」

「……ああ、この話は無かった事にしてくれ」

しみじみ、ほんとーにしみじみ言うわんにゃんトリオと我聞せず  
な緑の美人さんに。

あたしは、ちっちゃく苦笑した。

## 12・悩んだけど結局は特典欲しさに楽しようと思ひまして

食事の後は呑みに突入したわんこ達。

モチロンあたしも誘われたんだけど。

あたし「お酒？なにそれおいしいの？」な人なので、丁重にお断りさせてもらった。

どーせならタバコがイイ。生前はチェーンスモーカーでした。コッチ来てから禁煙最高記録更新中だけどね！！

ちなみに彼等、今はレグレのおじさんのお家にご厄介になつてるそーだ。で、ココはごはんが美味しいから、ってんで食べに来たらしい。

……ひとつ屋根の下に若い男女が4人。あつはんなシチュエーションそのまんまだ。

美少女2人のいちやいちやもイイよね！！もー今から妄想の世界に旅立つてもイイかしらっ。

……いや、止めておこう。とゆーか今は止めとくよ妄想はだからメーレその爪しまいなさいっ。

ごはんを食べて直ぐ様部屋に戻ったあたしとメーレは、ココ最近の恒例、ベッドにダイブ、を決行。そして。

「……………どーしよっか、なあ」

小さく呟いて考えたのは、さっきのわんこ達との会話。

『何がどーしよっかなあなんだ？』

「あの4人にはああ言ったけど、いつそおれも個人で参加しようかなあ、って」

『…………どーゆー風の吹き回しだよ?』

「や、だつてねえ…………」

ギルドの情報閲覧には、ギルドランクが影響する。

ランクが高ければ高い程、入手出来る情報の質も上がるのだ。地道に依頼をこなしてランクを上げていくのも良いんだけど。ぶっっちゃけソレはメンドー。

だけどそのランクアップ、サクッと上がる方法がある。

公式の試合や大会に出て優秀な成績を収める事だ。

あのわんこ達も、ソレが目的でエントリーしたと言っていた。

優勝なんてした日にゃ豪勢な褒美までが出る。しかもコチラの希望もある程度聞いてくれるから、禁書の閲覧は無理でも王城の書庫くらいなら開放してくれるかも知れない。

そして褒美を出すのは王様だから、もしかしたら王様から直接、おとーさまの事が聞けるかもしれない。

『いーじゃん!!出よーぜマヌ!!』

「…………でもなー。戦わなきゃいけないんだよなー」

あたし戦うのニガテ。

そりゃあ、神様モドキになって魔法使える様になって身体能力もチートになって、森にいた時とか旅の途中とか、魔物をぶっ飛ばして切つて捨ててしてきたから?ソレナリには強いよ?

だけどあたしは戦専門の神様じゃない。あたしの力は元々戦いには向いてない。

何でもかんでも自分の力で侵して、自分の力に取り込んで、作り変える。ソレはどっちかって言ったら、創造の力。

使える魔法の威力が強いのは、魔力のキャパが規格外だからってだけの、タダの副産物だ。

ソレに、あたしが今まで容赦無くぶっ飛ばしてきた相手は、魔物。死活問題だったからね。やられる前にやれを念頭に置いてきました  
が。

人間相手に切り結びが出来るかどーか、と問われれば。ちよつち自信ナイですハイ。

『や。マ又だったらかるーく勝てるぞ多分』

「どっから出てきたその自信」

根っこはちよー平和な世界に生きてたあたしのまんまなんだよ。ケンカなんかちつちやい頃に弟としかやった事がないんだよ。命の危機に陥ったりするんじゃないや戦いなんてしたくもないんだよ。

「……ソレに、ゼツタイに隠したい事があるからなー」

『……あー、まーなー……』

もしバレたら、下手すりゃ巻き込んだ周囲から何から、国家レベルで大騒動間違いナシだ。常識だつて転覆しかねない。

ソレくらい、あたしがあのギャル男やヤサ男から貰った『加護』はヤバイ。

「……適当に手を抜いて、適当に誤魔化して、適当な辺りで適当に負けるかなあ……」

『めんどーだなー、ソレ』

「……だよー……」

手加減も演技もニガテなのですよ、ハイ。

ソレに、大会には名の在るランカーも出場する。歴戦の軍人も騎士も、都合が合えば出場する、らしい。

「そんなツワモノ共を相手にさー、戦闘覚えたてのおれなんかさー、ドコまで通用するのかさー」

『けど、やってみて損はないんじゃない？』

「……うーん、やってみるかなー……いや、でもなー……」

そんな事をぐるぐる考えて。

あたし達は、そのまま何時の間にかぐーすか眠ってしまったのだった。

………や、だって頭使う事してたら眠くなりませんか？

）．．．．．

次の日。あたしは毎度の如く肩にメーレを貼り付かせて、朝から闘技大会の受付所にいた。

正確には、お城の前の大広場に設けられた特設ブースね。

………はい。悩んで悩んで、結局はエントリーする事に決めました。  
………ぶっちゃけノルマも昇給試験もメンドーだと思ったから  
なのですが。

だってCから上のランクはノルマが免除されるとかゆるんだもの。  
サクッと上げておくに越した事はないって思うのはトーゼン。

世の中上には上がいるし、優勝狙う気も全くないけど、イイトコ

まで行けたら良いなあ。そしてせめてDくらいにまでランクが上がれば言う事ナシ。

そんな事を思って踏み切ったワケなのです……が。

あたしが受付所にやってきた時、ソコには既に、けっこうな人が列を成していた。

「……コレ全部出場者かー」  
『……多いなー』

聞けば受付は5日前から始まって、今日が最終日らしく、締切に追われた希望者が殺到するのは、毎年の事だとか。

ソレにしても……

「……はー。ホント多いなー」  
『……おー。マヌ、アソコのにーちゃんけっこう強そーだぜ』  
「どれどれ？……あー、ホントだねー……」

屈強なおっさん腕に自信のありそーなにーちゃんがゾロゾロ。

そんな中、武器すら持ってない、よーに見える、しかも肩に猫を貼り付かせたヒョロいあたしの存在は場違いな感じ。

気合だつて、勝てたらラッキー、って軽い気持ちでエントリーしようとしてるあたしとは違うし。

……まあ、この世界有数の一大イベントらしいし。この大会で王族に目を掛けられれば騎士団入隊も夢じゃ無いらしいし。名を上げるにも持って来いらしいし。

列の最後尾に回ってそんな事をつらつら考え。

で、30分くらいして、やっと順番が回ってきた。

「お待たせしました。コチラの用紙にお名前と出場希望部門を記入して下さい」

受付ブースの兵士のおにーさんに渡された、エントリー用紙を前に首を傾げる。

……そーいや、レグレ達も言ってたけど。

「部門って、何ですか？」

「え？ ああ、大会参加は初めてですか？」

「はい」

「そうですか。なら軽く説明をさせて貰いますね」

おにーさんの話してくれた内容は以下の通り。

この大会、軽量級・重量級・エトセトラ・団体・無差別の5つの部門があるそーな。

軽量級は、短剣とか細剣とか軽い武器を扱う人用。

重量級は、大剣とか大斧とか重い武器を扱う人用。

エトセトラってゆーのは、戦闘能力じゃなく技術や飛距離を競う弓とかで。

で、団体は文字通りの団体戦。5人以上8人未満のパーティvsパーティで行う。

最後の無差別。これは魔術以外何でもアリな部門らしく。

……うーん。あたし今まで相手によって武器使い分けてたからなあ。刀とか大鎌とかハリセンとか。

ソレに、レグレ達のお誘いを断った手前……何時かバレル時があるのは解ってるけど、出来るだけそのバレル時を遅らせたいし。

あ。無差別なら戦闘中の武器の交換おっけい？なら無差別にしよつと。

「お願いします」

「無差別級部門にエントリーですね。了解しました。参加費に銀貨1枚掛かりますが宜しいですか？」

「あ、はい」

さらっと申込用紙に書いてペツと渡したら……参加費用いるのか。まあ当たり前だな。

ポーチに手を突っ込んで、外から見えない様に腕輪から銀貨を出して、おにーさんに払う。

「はい、確かに受理しました。ソレでは、コチラが貴方のエントリーナンバーになります」

そしたら、カードサイズのプレートをもたらった。

ソコに書かれてた数字が……666番。

もしかして666人目かあたし。そんなにエントリーしてんのか。てゆーか何でココで悪魔の数字。

「このナンバープレートが参加者の証になりますので、無くさない様にして下さいね。もし無くされた場合、再発行は出来かねますので、再度参加費をお支払いになった後新しいナンバープレート発行という形になります。また、受付時間が過ぎてしまえば参加すら認められなくなりますので」

「はい」

……うし。お財布腕輪に入れておこうそうしよう。

「予選は5日後の、秋の3の紅姫の月11日、午前10時より王城の正規軍訓練施設で開始、1時間前にこの場に集合となります。時間に遅れましても参加は無効となりますので、気を付けて下さい」

「じつくり。」

5日後、か。忘れないようにしよう。

「では、受付は終了です。5日後にまたお越し下さい」「  
「ありがとうございます」

ぺこり、と頭を下げて。

あたしはさっさとその場を後にしたのだった。

～・～・～・～・～

「あれっ？マヌ？」

大会への登録も終わって、目当ての図書館も本屋も攻略して。  
作りたてなのにサラツと無効になっちゃうのはイヤだから、って  
んで依頼を受けにギルドに来たあたしは。

「あれ、レグレ。今日は受付じゃないの？」

「ああ、そのバイトは昨日で終わったからな。今日から本業のラン  
カーに戻った」

わんこ達と遭遇しました。

「マヌさんは、依頼受けに来たの？」

何故そんなに興味深々。

「うん。ノルマこなしとかないと、折角作ったランカー証が無効に

なるでしょ？」

「「「ああ、そういえば」「」

あ。納得した。

もしかしてアレか。忘れてたのか。

そりゃノルマ免除されたランクの人には気にしなくてもイイんだろーけどねキミタチ。

「マ又はどんな依頼受けるの？」

「んー……この辺、かな？」

聞いてきたシユアに、物色してた依頼書をぴらんと見せる。

ソコに書いてあるのは、作物の収穫を手伝ってくれー、だとか、壊れた柵を直したいから木材持ってきてくれー、だとか。

「平和ね……………」

「平和だな……………」

「平和だね……………」

「平和……………」

む。何だそのしみじみな反応は。

「その、マさんは、魔物の討伐とかは、しないの？」

そろそろと、上目遣いで聞いてくるサウラちゃんに、苦笑する。

「しない、って訳じゃないんだけど……あんまり受けたくはないかなあ。おれ基本戦い苦手な人だから」

「……戦いが苦手なのに、ランカーになったの？」

首を傾げるシユアに、更に苦笑を深くして。

「探してるのと、行きたいトコがあるのさ。で、ソコに行くのに一番無難かな、つてのがランカーだった、つてだけでね。ソレに、こーう見えて旅の経験も長いから。（角の生えた熊くらいの大きさの）



首を傾げたあたしに、レグレはそんな事も知らないのか？って呆れた顔になって。

慌ててサウラちゃんがほら、と見せてくれたのはバッグ。

どーやらあたしのポーチと原理は一緒。あたしのが容量大きいしあたしにしか使えない限定モノだけど。

ワンダーバッグ、とかいう、けっこー値の張るマジックアイテムらしい。冒険者だったおとーさんのお古、だとか。

「討伐した魔物の爪とか牙とか羽根とかね、武器とか防具、薬の材料になるの」

「で、ギルドはそういったのを買い取ってくれるんだ」

「普通の武器屋さんとか薬屋さんに持って行ってても良いんだけど。

そついったトコロは個人経営が多いから、モノによっては売値が市場価格より下回るのよ」

「けどギルドはその辺しつかりしてるから、得はしないけど損する事もないし。準備の為に売りに来たんだ」

「準備？」

「闘技大会、もう直ぐだろ。流石に武器の手入れとか防具の買い替えが必要だと思ってるな」

そつ言ったレグレの姿を見る。

上から下まで、じつくりと。

……確かに、肩当て胸当て脛当てと、レグレの装備は軽装備。しかも革製、けっこー傷んでる。

見ればサウラちゃんとテトラちゃんとシユアも、似たり寄ったりな格好だ。

テトラちゃんとサウラちゃんのプレートアーマーはちっちゃい傷が目立つし、シユアの手甲だって、ボロい。

あたしの練成した服は、練成の時点であたしの魔力が籠ってるから、火の玉とかカマイタチくらいなら余裕で弾くんだよなあ。

しかもモノによっては、某最期の幻想ゲームで言う、オートリジエネとかオートヘイストとかオートプロテスとかオートリフレクとか、あと全状態異常無効化とか、色々と付与魔法付けまくってる。重くて動き辛い鎧なんか着なくても、かなりの重装備だったりするんだよコレが。

「ふーん。じゃあ、コレあげる」

そんな彼等に、饑別を送ってあげちゃおう。

ポーチに手を突っ込んで、腕輪から出したのは、コレまた腕輪。ソレを、ほい、とレグレの目の前に出す。

「……何だコレ、腕輪か？」

「うわあ。凄い細工。高いんじゃないの？」

「いんや。素材集めから細工までおれが手掛けたから元手ナシ」

「えっコレマヌが作ったの!？」

え。何故そんな驚くの。

「マヌさん、もしかして細工師なの？ドワーフとかに弟子入りしてた？」

「………しかも何故ドワーフに弟子入り。」

高々練成して作っただけの腕輪なのに。

貴石売りに行った時もあったけど、この世界は加工とか細工とかそんなにレベル低いのか。

「……元々、こーゆーの作るの好きだけど、趣味みたいなモンで

本職に弟子入りとかはしてないよ」

「はあく、コレが趣味、なあ？」

「……マヌ、コレからホントにドワーフに弟子入りして、本職にした方がいいんじゃない？」

「……………お似合い」

「はは、遠慮しとく」

呆れた様な感心した様な、アニマルカルテットのセリフにサクッと返し。

「コレ、素早さが上がる『速さの腕輪』っての。ほら、隼の細工してるっしょ？」

「あら、ホント」

「まあ気休め程度のお守りみたいなモンだけどさ。レグレ軽量級部門だから、コレかなって」

「おう、けどイイのか？こんなん貰っちゃまって。売りに出せばかなりの値が付くんじゃねえ？」

「さつきも言っただっしょ。コレ元手ナシ。ソレにレグレにあげるつつたんだよおれ」

「……………じゃあ、貰つとく。さんきゅ」

ぐい、と更にひと押し。

そしたら、レグレはちょっと視線外しながら受け取ってくれた。照れちゃってかーわい。

そんなレグレの横からひょっこり首出して、レグレの受け取った腕輪をモノ欲しそーに見るのはシユアだ。

「イイなーレグレ。オレにはないの、マヌ？」

ハイハイ。ちゃんとありますともさ。

「シユアは重量級に出るんだっけ。ならコレ、『力の腕輪』」

「！ありがとう！うわ凄い、獅子だ」

「サウラちゃんは……エトセトラって何だっけ？」

「あ、私？私は弓を得意としてるの」

「じゃあコレだ、『集中の腕輪』ってね。まあさつきも言った通り気休め程度だけど、集中力アップして、的も射易くなるんじゃない？」

「ほつき星と月？カワイイ！ありがとうマヌさん！」

「テトラちゃんも軽量級だっけ。レグレと一緒にはないんだけど、コレあげる。『敏捷の腕輪』ってゆーの」

「……………猫……………？」

「正確には山猫、ね」

ポーチから出す様に見せかけて衣類品腕輪の中から出したソレ等を渡して。

すっごい嬉しそう。うん、あげた甲斐があったよ……………テトラちゃんは無表情だけど。

うんうん、と頷いて4人を見る。

「……………なあなあ、マヌ」

と、肩からぺしぺし、メーレに軽く頬を叩かれた。

うぬ？何ですかメーレ？

「……………あの腕輪、名前通りの付与効果魔法が付いてるだろ？」

「（うん。ホントに最低レベルだけどね）」

「……………大丈夫なのか？そんなのやっちゃって」

「（大丈夫でしょ。また作れるし）」

「……………や、そーゆー意味じゃないんだけどな……………」

あら何ですかその呆れた様な溜息は。

「ただどメーレは『ま、マヌがいんならいつか』なんて呟いて、ソレ以上は突っ込んでこない。」

うぬ。なんかスツキリしないんですが。

「あ、そろそろ行かないと」

「そうね。じゃあ、マヌさん。私達もう行くわね」

ぬー？としてたら、シユアとサウラちゃんからそんなお声が掛かった。

パツと顔を上げて、ひらひらと手を振る。

「あ、うん。大会、頑張つてね」

「ああ。マヌも、依頼頑張れよ」

ほのぼのしながら、わんこ達（1人除く）も手を振って。残ったあたしは、再び依頼を物色し始めたのだった。

### 13・早まったとは思えど時既に遅く

1日1件。

わんこ達曰く、平和な日雇いの依頼を無理なくこなして、  
ついにやって来ました。予選初日です。

宿にはお仕事行って来ます、って出てきた。だって予選行って  
来ます、なんて言ったらライラさんもリチャアちゃんもビックリし  
かねん。

受付のにおにーさんに言われた通り9時にやってきたあたし達出場  
者は、まず予選の方法を説明された。

……………ココでまわれ右して帰りたいって思ったよ。

予選期間は、14日までの5日間。その間に、本戦出場者を12  
人まで絞る。

しかも部門は5つだ。一番多い軽量級部門の出場者だけで126  
3人。重量級部門は924人で、あたしの登録した無差別級部門は  
729人。一番少ないエトセトラ部門でも、415人。団体部門は  
50組以上の参加。

そんな大人数を、個人部門だけでもたった5日で約40人に絞る。

……………そんな大会の予選だ。マトモな筈がない。

出場者は、各部門ごとにだいたい50くらいのグループに分け  
られた。

あたしの無差別級部門はひとグループ14人くらいの48グループです。

「ソレでは、無差別級部門予選第1試合、41グループ、始め!!!」  
審判さんの声が大きく響く。

あたしが今いるのは、日頃兵士さん達が訓練してる訓練場そのいち。野球場みたいなトコだ。四角くて観戦席もある。こんなが他にもあるってどんだけ広いんだろうね。

その野球場モドキを4つに区切って、即席のリングの上で行われているのは……バトルロワイヤル。

トーナメント戦も総当たり戦も、出来る程時間も場所もない。解るんだけどね、うん。

「何呆けてやがる色男、試合はもう始まってんだ　ぜっつ!!」

『マ又っ、右からも来るっ!!』

「(解ってる!!!)」

でっかい鉄球を振り降ろして来た熊のおっさんをひよいつと交わり、違う方向から飛んできた投剣の軌道を手に持った刀で変える。

あ、ちなみに今日のあたしは何時もと格好が違います。

何時もは普段着そのものなんだけどね。やっぱり戦闘試合ですからね。

某チヨコボ頭の着てる服を練成して着てきました。あらゆる付与魔法こっそり最大まで付けまくりです。

そして腰に佩いたのは2本の刀。久々に部屋出る時から腰に差したよ。

あたしの腕輪は基本ポーチとおんなじ原理で出来てるけど、ソレ

でも傍目には何も無いトコから武器が出てくる様にしか見えないもの。あんまり目立ちたくないからソレは頂けない。

そして、右肩にへばり付いた白い子猫……モチのロンでメーレだけど、コレがまあこの場での一番の場違い間違いナシだ。

「……………ほう、アレを避けるか」

投剣投げてきたおねーサマが何故か感心した様に呟いたけど……何故だろう。何故みんながみんな、あたしを狙う。

そりゃ、こーゆー場合弱っちよろそうなヤツから潰していくのがセオリーだってあたしも思いますけどね。

『……………逆に一番強そうだからミンナで潰しちゃおうって感じでこーなってる、とかは考えねえの?』

いやいやソレこそありえん。

メーレの質問にバツサリ内心で返しながら、あたしはでっかい溜息を吐いた。

……………帰りたい。今直ぐにでも帰りたい。

もーリアイアしちゃおうかしら。

………………………………………ただ目の中のやる気まんまんな皆様方が、ソレを許して下さいとは思えない。

くそ。どーして魔術禁止なんだ。無差別のクセに。

魔法が使えたらこんなヤツ等、眠りの魔法一発で全員そっこー昏倒させてやるのに。

ぐだぐだ考えてる間も、皆様方のリンチは続く。

や、全部避けて弾いて受け流してしてるけどね。

「何故だっ!? 何故っ、そんな細い剣なのに折れな

かは!

「？」

『うおー。けーき良く吹っ飛んだなー』

両手の斧をぶんぶん振り回してたおっちゃんの懐に瞬時に飛び込み、刀をその腹に叩き込む。

吹っ飛んで場外に転がったおっちゃんは、そのまま白目を向いて気絶した。

……ちやんと峰打ちですよ？

でもすごいイイ感触がした。多分骨折れたねあのおっちゃん。むう、力加減ムズカシイ。

「はっ！！やっぱお前強えなあ色男！！」

鉄球ぶん回すおっさんが肉迫する。

受け止められない事はないんだろっけど、ソレはしんどいからヤだ。

と、ゆるワケで。

「んなつつ！?!?!？」

いろんなトコロで、驚愕の声。

中でも目の前のおっさんは顕著で、目をぱっかり皿にして、ソレを見てる。

ソレ すなわち、自分の得物。

あたしの刀で真つ二つに断ち割られた、でっかい鉄球を。

そんな大きな隙をあたしが見逃すハズも無く、無手になったおっさんを蹴り飛ばして近場にいた小柄な人に迫ってやっぱり刀（峰打ち）で吹き飛ばす。

「…………ぐっ、つつ、痛う……………っつ！！……………て、てっめ鉄球だぞ!？」

鉄の塊だぞ！？ナニ簡単にそんなほっせえ剣で真っ二つに切ってやがんだこの非常識モンが！！」

あ。おっさん復活した。

『まじ？マヌの蹴りだぞ？ソッチこそヒジョーシキだろ？』

やー、でもさっきの蹴りそんな力入れてないよあたし？

『……………ああ、うん。（ソレでもアレ、ふつーの人間なら内臓破裂モンなんだけどなー……………）』

「（？何か言った？）」

『いや何でも』

しかもおっさんどっから出したその鎖鎌。

てゆうか非常識モンって。

刀は『斬る』事に特化した武器なんだし、魔力にモノを言わせてあたしが作ったんだし、『斬鉄』出来ても不思議じゃない……………あ。そーいやこの世界、刀なかったんだっけ。

飛んでくる鎌を避け投剣を叩き落とし、刀一本と足蹴りで1人ずつ意識を刈り取っていく。

まあ、中にはあたしが避けた攻撃に巻き込まれて昏倒する人もいたけど。

そして。

最後まで残ったのはあたしと、何と云うか。

「……………っは、何だてめえ。てめえみてえなんがいるなんて今まで聞いた事がねえぞ、色男」

初手で鉄球、今は鎖鎌を振り回すおっさんが、引き攣った笑みを浮かべて油断無く構える。

「……………やれやれ、まさか予選でこんな猛者に当たるとは。運が無いと云うか何と云うか」

そして、隙有らばドスドス投剣を噓けてきてた、今は三節棍を構えるおねーサマが、溜息吐く。

あたしみたいなのって、猛者って。

………やー、何て返せばイイんでしょう。

「けど俺だってなあ、伊達に前回本線出場してるワケじゃねえんだ。そー簡単にや負けねえぜえ？」

「私とて、己の武力は其れなりのモノだと自負している　挑  
ませてもらうぞ」

………盛り上がってんね。やる気マンマンだね2人共。

前口上を述べた上で、凶った様に揃ってあたしに突っ込んで来た2人に。

あたしは、またまた溜息を吐いた。

………ああ、もう。帰りたい。

）．）．）．）．）．）

「よお色男！！こんなトコにいたのかよ！！」

予選の1回戦目が終わって。

他の予選の試合を見る事もなく、ふらふらと訓練場内を歩いてたあたしは、背後からそんな声を掛けられた。

足を止めて振り返ったら、ソコにいたのは鎌振り回してたおっさん。

と、その隣に三節棍のおねーさま。

「探したぜえ。試合が終わるなりさっさと行っちまうもんだからよ  
お」

……………なにゆえ？

ついさっきまで敵同士、しかもソレ以外の接点なんてないのに、  
何であたしは探される。

『ふかんぜんねんしょーで、ウラミゴトとか？』  
うをうメーレ。イヤんな事言わないで。

……………いや確かに心当たりがないではないけど。

イイ加減メンドーになつてロクに相手にもせずサックリ首に手  
刀で意識刈り取っちゃったけど。

内心首を傾げながら何時でも逃げられる様に。警戒しながら近付  
いてくる2人を見る。

「何か、用ですか？」

「そんな警戒すんなよ。メシまだだろ？一緒に食いに行こうぜ」

……………ごほんのお誘い？

ソレこそ何故。

『めし！？食いモンか！？』

そしてメーレお前はソコで反応しない。

「君の強さに些か興味がある。幾つか聞きたい事もあるし、何より  
1度話してみたいと思ってな」

……うわ。

やり過ぎたのかあたし。もっと手を抜くべきだったのかあたし。心持ち、右足が下がる。

何だかすっごいイヤンな予感。36計逃げるが勝ち。あれ、違う？いやいや、まあ良い。

「や、悪いけど」

「そうと決まりや早速行こうぜ！！美味しい店知ってたよ！！」  
「って」

馴れ馴れしくも肩組まれました。

しかもそのままズルズル連行される事に。

誰か助けてー、と周囲を見回してみたけど、元々知り合いなんていないし大会執行役な兵士さん達も仕事が忙しくてコッチにまで気が回らない。

……逃げられないのね解ります。

図書館、行きたかったんだけどなーあ。

あたしはおっさんとおねーサマに挟まれて、ズルズル引き摺られながら、予選会場を後にした。

）．．）．．）．．）．．）

そして、やって来たのは大通りのとある食堂。

「んじゃ、ま。まずは自己紹介からだな。俺あバルグだ。バルグ・レンドリア。クインのリアタリスから来た、つい最近Aランクに上がったばっかのランカーだ」

げ。おっさんAランクのランカーなの？

ヤバいマズツた。そんなのを手刀一発で昏倒させたのかあたし。

「私はレイア・エルメロイという。トリエンレッタを拠点にしているBランカーでね」

うっわー。コッチのおねーサマも上級ランカーですか。そりゃあ強いワケだ。

「で、色男はどっから来た？兵士か、もしかして騎士か？実戦慣れしてたから、まさか貴族って事はねえだろーが」

「……あー……」

思わず声、が出てしまった。

「何だ、話せない事なのか？」

「……いや、そーゆーワケじゃないんですが……」

ハラ、括るしかないのか。

「……マヌ、って言います」

「……偽名か？」

「や、本名です」

ウソです偽名使わなきゃならないホド悪い事してないのに偽名ですが何か？

「ぶむ。セカンドネームは名乗れない、と」

「いえ、セカンドネームはありません。タダのマヌ、です」

「……………ああ、孤児院出身か。悪い、いらん事聞いちまって」  
「や。別に大丈夫ですから」

てゆうかイイ感じに勘違いして下さいましたねおっさん。

にしても、孤児院出身にはセカンドネームなし、と。覚えとこう。

『なあマヌ、コジインって何だ？』

「（親のいない子供を引き取って育ててるトコだよ）」  
『ふーん』

「ではマヌ、君は軍属か？」

「いえ、ランカーです」

あれ、おっさんとおねーサマ首を傾げたよ？何故？

「ランカー？つていやいや、そりや変じやねえか？俺あ色男の事な  
んざ今まで一度も聞いた事ねえぜ？」

「確かに。君の様な特徴ある実力者が、一度も噂された事が無い、  
というのは可笑しいだろう」

いやいやいやいや。あたしそんな強くないって。ふつーだって。

『規格外ではあるけどなー』

あたしのドコが規格外！？

『異界の神様なトコ』

……………あつ。確かにソレは、反論出来ん。

だがしかし。

「……………正確には、10日くらい前にランカー証を所得したラン  
カー、です」

「「はあ！?!?!?」」

あ。ハモツた。

「て事は何か？お前さんまさかのGランクなのか！？」

「あれ程の立ち回りをしておいて、初心者だと！？」

つかやっぱりオドロク事なのソレって。

「でも本当ですよ」

ポーチに手を突っ込んで、あたしはお財布腕輪からランカー証を出した。

そしてギルドランクと名前しか表示されていないソレをぴらんと見せたら。

あら。おっさんもおねーサマも驚き通り越して唾然となったよ。

「……………ドコその国の騎士団とかの秘蔵っ子か何かだと思っただが……………」

「……………いや、其れでも、だ。ランカーになって間も無いとはいえ、あれ程の強さが今まで話題に上がってきていないのは可笑しいだろ」

「……………確かに。なのに何で今まで無名だったんだ……………？」

や、何故って言われても。

「おれ今まで、森から出た事無かったですし」

『なー』

……………あ。ヤバい口がツルっと。

「……………どういっつコトでい？」

ほうらおっさん食い付いたっ。

おねーサマも興味深々じゃないかっつ。

あーあー、うーうー……………よしっ。

「どづいつも何も、言葉通りの意味ですけど」

「ずっと森の中で暮らしてたって事か？何でまた」

「……えーと、おれを拾ってくれた人が、森に住む世捨て人だったんです」

間違っていないよねおかーさま世捨て人ってくらい森の外の世界には興味全く無かったよね。

……や、正体明かせないんだからコレっくらいの捏造はトーゼンとゆーか。

あ、なんかお2人とも、ビミョーな顔に。

「……あー、ちなみに。そのご隠居さんは今、何やってなさるんだよ？」

「亡くなりました、1年前に」

『うをいマヌ。勝手にかーさん殺すなよ。つか殺そうとしても死なねえぞ？多分』

「（いやでもソレっくらい言わないと誤魔化せんでしょココは）」  
『……うー。ま、仕方ねえか』

おっさんの疑問にもコレまたアツサリ。

したらメーレから突っ込みきました。

ごめんなさいでもコレ以外に良い誤魔化し方が思い浮かばん。

てゆーか。何か余計にビミョーな空気になってきてるんですが。

「……わ、悪い」

「や、謝ってもらっ必要無いです。寿命だったんで、眠る様に逝ったんで」

「……そ、そうか」

ホッと誰かが息を吐いて、雰囲気が緩む。

……………うん。ちよつとばかり、空気が淀みそうになったけど。  
イイ感じに、誤魔化せた、かな？

「……………まあ、大体は解った。森には魔物も多く住む。君の強さは、日々魔物を狩って養われた、と言う事なのだろうな……………ソレにしては、強過ぎる、と思わないでも無いが」

「いやいやおねーさま。あたしホントにそんな強くないから。」

「こーんな女遊び慣れてますって色男が実は野性児ってか……………なんか全然想像出来ねえな」

ちよつとおっさん何その反応。

「む。コレでも魔物狩って生活してたんですけど」

「兎とか狐とか鳥とか？」

「ええ、ダグウリやレッドベア程度なら余裕で」

「……………は？」

あ。おっさんもおねーさまも目が点になった。

でもあの図体がデカイ直進にしか突撃できないイノシシとか腕力だけの赤い熊とか。アレは楽な部類でしょうに。

『だよなー。俺でも楽に狩れるもんなー』

……………や、メーレ。アンタとあたしを一緒にしないで。

『たった1週間でホントに狩れるよーになったヤツが何を言う』

……………ぐさっ。ま、まあソレはおいといて。

「ソレに、ゴルドラもガレスタークも1人で仕留められます」

ゴルドラってのは、デカイ腕6本の猿の事。

おかーさまのトコにお世話になった次の日に追い掛けられ……………けど1ヶ月後にはリベンジをさせて頂きましたが何か？

あと、ガレスタークってのはアレだ。ライオンみたいになずんぐりむっくり。

『以外に美味いんだよなアイツ。また食いたいな』

だから食い気に走るんじゃない……まあ、確かにアレは美味しかったけど。

「まあでも、魔物を相手にするのと人と対峙するのとじゃ勝手がかなり違うから。予選通過出来ればオンの字かなあ、なんて」

「「いやいやいやいや！……！」」

んえ？

何なにどしたのにおにーサマもおっさんもそんなに慌てて。

「ゴルドラって、あのゴルドラか！？6本の腕がある大きな猿！！」

「ガレスタークつつたら、青い鬘のライオンもどきだろ！？」

「さつき、森に住んでいた、と言ったな！？ど、どこの森なんだ！？」

「え？ああ、確かこの街の北にある……ルシユの森、でしたっけ？」

「「……………」」

……………え。なんであたしの答えに2人とも沈黙？

ワケ解んなくて首を傾げたが。

そんなあたしの肩を、暫くしてから正気に戻ったおっさんがポンと叩いた。

「……………安心しろ、マヌ。お前だったら予選通過も余裕だ」

「へ？」

「保証してやる。お前なら優勝だって狙える」

「や、イキナリ何ですか」

「……………ダグウリの討伐ランクは、パーティならC、個人でB。

Aでも下手すりゃ苦戦する。レッドベアとゴルドラはパーティ討伐ランクBで、ガレスタークはパーティ討伐ランクA、個人では最低

Sクラスないとまず勝てねえ魔物、だ。良いか？最低でも、だぞ？  
その上熟練でもなけりゃ手も足も出ねえんだからな？」  
「……………ルシユの森といえばな、マヌ。そういう高ランクの魔物  
が多数生息する事で、有名なんだよ」

今度は逆の肩に、おねーサマがポンと手を置いた。

「……………まぢで？」

「「おおまぢです」

「（……………え。メーレ、まぢで？）」

『俺が知るかよ人に付けられたランクなんて』

……………ですよねー。

おっさん・おねーサマのみならず、傍で聞き耳立ててたらしい人  
達にまで声を揃えて言われ。

あたしは、ぽかーんと口を開けるのだった。

#### 14・隠してたワケでなくホントに強くないのですよ

闘技大会の予選2日目からは、総当たり方式になる。

あたしのエントリーする無差別級部門、予選一試合目突破者は48人。コレが4つに分かれて総当たりして、上位3名の合計12人が本戦進出する。

くじ引きの結果、あたしは4ブロック、と相成りまして。

「……………何と言うか」

「かーっ、やっぱ強えなあ、色男」

わいわいがやがや、たくさんの人の中、試合が終わったあたしのトコにやって来て。呆れた様な顔であたしを見るおねーサマと、感心しきりの顔で言うおっさん。

何でこの2人今日も予選会場来てんだろう予選負けたのに、って思ってたけど、どうやら予選落ちしてもエントリー者は会場に入れるらしい。けっこーな数の人等が見学しに来てる。

理由は主に、パーティのメンバー探しとか傭兵団へのスカウトとか。

「どーよ色男。お前さん俺とコンビ組ま「謹んで辞退申し上げます」……………は、早えなおい」

トーゼンだ。美少年や美女ならともかく誰が好き好んで熊さんなんかと。

「人間見た目じゃねえ心だ心!!」  
いやでも人間第一印象は大事だよ。メラなんとかの法則にもちや

んと書いてた。しかもおっさん人間違うし。獣人だし。熊の。

とゆーかどーしてあたしなんか勧誘する。

「……………寧ろ如何して勧誘されないと考えているのかを教えてくださいな  
いたいな私は」

やー、だってあたしそんな強くないし。

「『いやソレは絶対無い（無え）』」「  
うをう、ステレオ攻撃っ。しかもメーレまでっっ。

「弱い人間はこの大会の予選でストレートで勝ったりしない」

「しかも開始直ぐに急所狙いの一撃必殺で昏倒なんかさせたりしね  
え」

『アレはサスガに可愛いそーだったぞマヌ』

ソレはあたしが強かったからじゃないです。相手の方が隙だらけ  
で弱かったのが悪いんです。

「『……………』」「  
あ。沈黙した。

「……………アレで弱いつてか……………今年は結構なヤツが揃ってんだけどな

……………」  
「……………マヌの中での強さの基準はどうなっているのだろうな……………？」

え。あたしの強さの基準？そりゃあおかーさまでしょ。

森にいた時に、何度か戦い方教えて貰ったけど。

いっつもモノの数秒で転がされて終わりだったからなあ。

「……………色男を拾ったっつー、ご隠居さんが……………」

「……………一体どんなご老体だったんだろうな……………」

どんなって、おかーさまはおかーさまです。

ヒトじゃないけどなっつ。

でもそんな事までツルつと言つワケにはいかないから、笑って誤魔化す。

「……まあ、何はともあれ。本戦出場おめでとう」

「あ、ありがとうございます?」

「なんで疑問形……このままホントに優勝狙つちまえ」  
ををを。何てムリ難題を言ってくれるんだこのおっさんは。

「……ま、まあ、やれるだけやって」

そんな事を思いながら、差し触らない言葉を述べようとした時だ。

「マヌツツ!!」

……んをつとお?

どっかから飛んできた声。

うん昨日も宿で聞いたばかりだしお気に入りな子の声だから覚えてる。コレは。

『……げ。マヌ、コレって』

「……うん。もしかしなくても……」

ひきつ、と口元戦慄かせながら。くりん、と振り返って見てみた。  
ら。

だっただか走ってくる……をを?をを??

どっしーんっ!

『にゃっつ!?!』

「っつわっつ!?!」

なにゆえ！？何故シユアあたしの腰にタツクル！？  
辛うじて受け止めたけど下手したらすってん転がってたよ！？  
うわ、しかも苦しいっ、腕っ、力入れ過ぎでしょ！！

「ちょ、シユア！！絞まつてる！！絞まつてるから苦しいから！！  
離して！！」

『うおいこらい又お前マヌを殺す気か！？』

「イヤだ！！離したらマヌ逃げるだろ！？」

てゆーかなんで逃げる前提！？いや逃げたいけども！！

べしべし頭叩き背中叩きしてたらちよつと緩んだ……でもまだく  
つついたままなのね。

「だーかーらー！離れるつてのシユア！！襲うよ！？」

『踏み潰すぞ！？』

「……いや、襲うのは如何かと思うんだが……」

おねーサマないす突っ込み。

おっさんはイキナリ出てきたくっ付き虫にまだぼかんとしてる。

「何をしているんだ、貴様は」

ソコへ、またまた掛けられた第三者の声。

ソレに、シユアのふさふさ尻尾がぶわっつ！！と膨らんだ。

固まった身体が、あたしから離れる。1歩引いて、その声の主に  
振り向く。

あたしもメーレもおっさんも、おねーサマすらがシユアの視線を  
追い掛ける様に首を巡らせて。

『おっ』

「ドチラ様？」

シユアを睨み付けるヤの付く人……いやいや、硬派っぽい青年がいた。

「……………何でイスターがココにいるの？」

『……………うっわぁ。すっげえ重低音』

……………シユアもしかしてこの人と悪い意味でのお知り合い？

「参加者が予選会場にいる事の何が悪い」

うわわわ。コツチもコツチで重低音。

もしかしくなくても犬猿の仲ってヤツですか？ヤツですね？

「この区画は無差別級部門だ。軽量級部門はアツチだろ」

「そういう貴様こそ、重量級部門は向こうだろうが」

「オレは友達の様子見に来てるんだよ」

「その友達とやらは随分と迷惑そうだがな」

「ドコをどう見たらそうなるの。ああ、そうか。目が悪いんだっけ。

若いのに可哀想だね。1度医者に行った方が良いんじゃない？」

「そういう貴様こそ、何をどうすればそういう解釈に行きつくんだ

るうな。ああ、確か頭の出来が悪いんだっけ。こればかりは医者

に掛かっても治らんだろうな、可哀想に」

ちよ、ホントちょっと待て。

ソコで何であたしを挟んで言い合う？

「……………ケンカ売ってる？」

「……………そう思うか？」

や、だから待ってってどーしてソコで剣の柄に手をやる！構える！？

「はいソコまで!..!」

パンツと小気味のイイ音が響き渡った。  
ハッとしてソツチを見ると、何時の間に来てたのかサウラちゃんとレグレとテトラちゃんの姿。

「何やってるのシユア、こんなトコで」

「イスターも、ココは引いとけ」

「……………大人気ない」

をを、キミ等は救世主だ。後光が見えるよいやマジで。

3人に割り込まれて、シユアも青年もチツとか舌打ちして柄から手を離す…………てゆーか舌打ちって。

「……………あー、色男の仲間か?」

『仲間、じゃねえなあ』

「うーん…………知り合い以上友達未満、かな」

蚊帳の外だった熊のおっさんが、ココで疑問を挟んできた。  
ので、軽く苦笑しながら返し。

「で、シユアはどしたのイキナリ。おれに何か用?」

「ああ、そうそう。ソレなんだけどね」

にいつこり。

あたしに振り返ったシユアは、もう、何と云うかすっごくイイ笑顔。

『……………あ。ヤバ』

メーレも思ったか。あたしも思う。何かコレ、ヤバイ。

思わず腰が引けて、だげどぐわしいっつ！と腕を掴まれた。

や、ちよつと、すごいギリギリ入ってるんですけどギリギリとチカラが。

「マヌにね、聞きたい事があってさ」

「な、なに？」

「うん、何でココにいるの？」

「え、それはー……そのー……ち、ちよつと、見学に？」

「ココ出場者か関係者しか入れないんだけど」

「うぐっつ」

「マヌ関係者じゃないよね。ソレに出場しないって言ってたよね。弱いからってオレ達が団体戦メンバーに誘ったのも断ったよね」

「……………うあ。キた。やっぱキた。」

確かに言った断った！！

だからちよくちよく食べにくるらしい宿でも予選会場でも鉢合わせしないよーにしたのに！！

何でこの子等ココにின்のココって無差別級部門の予選会場っしょ！？おたく等部門違っつしょ！？

「なのに何で予選出てるの、何予選突破してるの本戦出場決定してるのしかも無差別級部門で！！」

「……………あー……………」

ちよ、シユア剣幕スゴイ。怖いってちよつと。

「無差別級だよ！？この大会の難易度ナンバーワンだよ！？ひと試合勝っただけでも苦労するんだよ！？」

「やっ、落ち着け、マヌは落ち着いてシユアっ」

ギリギリとヒートアップしていくシユアに慌ててあたしの腕を掴む手を掴み返し。

ちよ、いたたた痛い痛い痛いつて!!! アンタあたしの腕の骨折るつもり!?

そんなあたしに気付いて、ふつと力を抜き、すー、はー、と1回深呼吸したシユアは。

「何で弱いなんて嘘ついたのか、理由を聞かせて貰えるよね」

「……………あー、それはー……………」

「ソレは?」

ちろん、と周りを見回した。

おっさんとおねーサマは未だ現状についてけないでいる。

レグレとサウラちゃんは……………イイ笑顔だ。

テトラちゃんとコワモテさんは……………あつ、その視線痛いつ。痛いわっつ。

『……………マヌ、コイツら怖い』

うんあたしも怖い。

ぬ。アソコにスペースが。おねーサマとコワモテさんの間。不意を突いたら、この輪から抜け出せそうな。

よしっ。

「……………ちやつ」

ココは逃げるが勝ちだ!!!

力が抜かれた手を振り解いて、そのままダッシュシユ!!!

……………なんて、そうは問屋がよろしませんでした。

「私も聞きたいわ、ねえマヌさん？」  
「当然、話してくれるんだよね？マヌ」

背後からしつかりがつしりと。

多分あたしが逃げようとするのが解ってたんだろ。あたしの右からも左からも、腕を組んで来たレグレとサウラちゃんに、ひきつ、と顔が引き攣る。

「……………お話、しましよ」

しかもテトラちゃんまで真つ正面からずいってホント怖ええ  
！！

「まあ、こんなトコで立ち話も何だしな。どうせ昼飯まだだろ？食いながらでも話そうか」

「……………えと、おれ、お腹減ってない……………」

「ダメよマヌさん。体調管理はランカーの基本よ？ご飯はちゃんと食べなきゃ。私美味しくて安いトコ知ってるの。行きましょ」

だけどあたしの意思なんてアウト・オブ・眼中で。

「逃がさないって言っただろ？観念してゲロってもらうからね、マヌ」

憐れあたしは、ぼかーんと見送るおっさん達の視線を感じながら。アニマルカルテットに有無を言わさず引き摺られて行くのだった。

……………市場に売られていく子牛の心境って、こんなのかも知らない。

〕・〕・〕・〕・〕・〕

毎度お馴染み『日溜まりの草原亭』、ではなく。大通りに面したとあるお食事処。

子牛の如く連行されてきたあたしは、左右がっちりサウラちゃん  
とテトラちゃんにホールドされ、目の前のシユアに睨まれてしゅー  
んとしていた。

ちゃっかり熊のおっさんと三節棍のおねーサマも着いて来てる。  
そしてシユアと一触即発だったコワモテまで一緒なのは、何と言  
うか。

「まあまあ、その辺にしとけや。色男もワザとじゃなかったんだし  
よお」

「つかおっさん誰だよ。そっちの姐さんも、マヌとはどんな関係だ  
？」

「俺か？俺あバルグ・レンドリアだ。リアタリスでランカーやって  
る。獲物は鉄球でな」

「鉄球？バルグ？……『粉碎』のバルグか！！」

……えー。何その厨二病な呼び名。

『ちゅーにびよう？何だソレ？』

うーん。一言で言い表わすのはムツカシイけど……まあ、何コイ  
ツ頭湧いちゃってんの？みたいな事をイキナリ平然と又ケ又ケと声  
高々に言う人の事かしら？

『つまりはマヌのモーソーとおんなじなんだな』

……ぐっつ、あ、あたしはまだ脳内大絶叫なだけだからアソコま  
でイタイ人種じゃないわ……！！

『目クソ鼻クソを笑うってヤツだな』

……ヨシ。メーレお前今日のデザートなし。

『ごめんなさいでしたー！！』

「って何時の間にそんな凄い人と知り合いになっちゃってんのマヌ  
!?!」  
うをつとシユア。イキナリ乗り出さないで。コツチだってなりた  
くてなったワケじゃないから。  
つか何でおっさんもおねーサマも一緒にいんのホント。

「私はレイア・エルメロイ。トリエンレッタを拠点にしているブラ  
ンカーでね。君達は？」

「……レイラ・エルメロイ……まさかの『閃棍』ですか……?」

……うをつ。おねーサマにも厨二な呼び名があるのサウラちゃん

……

「……オレはシユア・ローニクル。Cランカーの大剣使い。マヌと  
は友達なんだ、最近なつたばかりだけど」

「……さ、サウラ・ギーニアです。私達、ココの隣町のタルカを拠  
点にしてて。あ、Cランカーです。マヌさんとは、大通りで会った  
のがキツカケで」

「……テトラ・ウィーニ。Cランカー。短剣使い」

「レグレだ。レグレ・オーラン。シユアと同じCランカーで剣士。

ソレとマヌ。コイツはイスター・シアーズ。俺等のもう1  
人の、幼馴染だ」

「ちょっと待てシアーズだと!?!あのシアーズ兄弟か!?!?」

うをつとつ?

何だ何だ。何故そんな驚いてるんだおっさん。

あれ、見ればおねーサマも、びっくり眼でコワモテを見てます。

ナニ、この人そんなに有名なの?

「あの、というのが何を指すのかは知らんが。確かに俺の名はイス  
ター・シアーズだ」

「……………サウラちゃん、彼は有名人なの？」  
腕組み脚組み、踏ん返り返ってふんと面白くなさそうに言うコワモテをチラ見しながら、あたしの横のサウラちゃんにコッソリ。  
「この街を拠点にしてる、『黄昏の鋼』っていう剣士ばかりの傭兵団の副団長で。彼のランクはSよ」  
そしたらサウラちゃんは苦笑して、コレまたこっそり教えてくれた。

……………うわぁお。

どー見てもあたし（の外見）と同じ年。や、コワモテの所為でもう少し上に見えるけど。けどどー多く見積もっても20代後半が最高だろう。

そんな若いのにランクSで。

「……………はあ。シユア君達の年頃で、ランクがCというのも中々にいないものだが。まさか君、いや貴殿が『黄昏の鋼』の副団長殿とは……………」

レイアさんのしみじみく言葉に、あたしもうんうん頷いた。

まさかこんな、コワモテだけど年若いにーちゃんが、そんな凄い人だなんて思うまい。

……………や。確かに圧迫感とゆーか存在感は、ソレ相応だけど。

あ。シユアがなんかケツで。チンピラ化してるよ。

『イ又って、そんなに嫌いなのかアイツの事？』

……………まあ、世の中生理的に受け付けられない相手ってのはいるモンですから？

だからそつとしいてあげようねメーレ。

「で、何だっってそんな有名人が又と一緒にいるんだ？」

……………うあ。話戻った。そのまま脱線してくれれば良かったのに。



て、だから2重発行なんて出来ない。マヌは確かにビギナーだ」

おや。驚き通り越して啞然となったよ。

「……………どうしてそんなに強いのに、今までランカーじゃなかったの……………?」

「……………ドコかの国の騎士団に所属とかしてても、少しくらいは話上がつてくるよね……………?」

「いやー、色男は本気で自分が強いなんて思ってなかったらしいぜ……………?」

「……………は?」

あや。おっさんのセリフにみんな変な顔になったよ。

「1年前まで、彼はルシユの森の中でご隠居殿とずっと2人暮らしだったそうだ」

「……………はあああ!?!?」

をを。何でそんなおねーサマの言葉に驚くの。

「ルシユの森!?!?ってあの高ランク魔物出現多発な危険地域!?!?」

「Sランカーでも下手したら危ないって処よね!?!?」

……………あー。そーいやそんな事言ってたなーおっさんもおねーサマも。

「魔物のランクも知らなかったみてえだし、自分とご隠居さん以外比べる対象がなかったみてえでなあ、この色男は」

「そして今だに、自分はご隠居殿に比べればまだまだだと思っっているそうぞ。私やバルグを負かしておきながら、な」



## 15・なぜナニドーして脳筋はスグ戦いたがる

……………つ、つかれた。

何が疲れたってそりゃあーた。アニマルカルテットにおっさんにおねーサマ。

何で「まあ取り合えず色男の本戦出場祝って乾杯しようぜ」になるんだ。てゆーか絶対自分が呑みたいだけだったよねおっさん。しかもおねーサマもカルテットもソレに乗ってくるしっつ。

不幸中の幸い(?)は、そのどんちゃん騒ぎの中で何時の間にかコワモテさんがいなくなってた事だ。

おっさん達だけでも疲労困憊もんなのに、あんな有名人にまで絡まれたら身が保たん。

まあ、昨日は色々。ホントーに色々と疲れましたが。

今日から4日間、のんびりくつろぐ事にしよーじゃああーりませんか。

『いーのか、マヌ?ネコ娘の試合今日なんだろ?』

「サウラちゃんのは試合じゃなくて技術のお披露目でしょー」

ハッキリ言おう。興味はあるがメンドくさいという思いの方が上回る。

だって今日は朝早くから道は人、ひと、ヒトの列。アレ全部、闘技大会の会場に行くらしく。その会場からけっこー離れてるにも関

わらず、こんなトコまでこの多さ。一体ドコから湧いて出た。

余りの喧騒に開けてた窓を思わずカーテンごと閉めたくらいだ。

……まあ、一大イベントの本戦第1日目なんだから仕方ないかも、  
だけど。

ちなみに今日は、エトセトラ部門の本戦だ。ポイント形式のトー  
ナメント戦。

そして明日から本格的に、予選通過の12組+シード枠2組の1  
4組で団体戦トーナメントの団体第一回戦6試合目まで。明後日は  
軽量級で、明々後日が重量級。その次の5日目に、あたしがエント  
リーした無差別級。

6日目からまた団体戦に戻って第二試合7試合目から、準決勝1  
2試合目まで。

そして、最後の10日に全ての決勝戦、と相成るらしい。

ついでにこの闘技大会、観客料は銀貨1枚。しかもかなり前から  
前売り券が販売されてて、今は完売。

当日販売のチケットは観客席のその後ろの、立ち見しかなくてし  
かも銀貨3〜5枚という高さ。

予選みたく予選敗退者はフリーパス、でもない。

中心から一番遠い上に立ち見で見難い。オマケに高いって。そん  
なん下手に観戦するより見ない方がマシだと思っただよ、うん。人  
ごみに酔いそうだし。

『あー、確かになー。ドコにこんだけ隠れてたんだって感じだよな  
ー』

「しかも初日で、エクストラ部門の部大会で、この数だからねえ」

『一番人気ってムサベツ級だっけ？』

「いんや、軽量級らしいよ。明後日の」

ちなみにレグレとシユアは予選通過したらしい。ギリで。んでもってテトラちゃんも予選敗退だそーです。あとひとつ白星だったらサドondesでイケてたかも、らしいけど。

そしてあのコワモテさんはシード枠らしいです。軽量級の。サスガSランク。予選免除なんて羨ましい。

……シユアとおんなじ重量級でなくて良かったと思う。あの2人、ホントに犬猿の仲だったもの。当たったらどーなる事やら、多分きつと目も当てられない。

「でも決勝は纏めて最終日に行われるそうだから、10日後が1番こつた返すだろうねー」

『……今より多くなんのかー』

朝の通勤ラッシュな電車の中、を思い浮かべてはと溜息。きつと会場の観覧席はソレより酷いぎゅーぎゅー詰めの箱寿司状態だろう。決勝だけはあたしもナマで見たいと思うけど、きつと無理に違いない。

『見たかったなー』

「仕方ないでしょ入れないんだから」

過ぎた事だからと割り切って、さて今日からどーやって時間を潰そうかと考える。

図書館？……目ぼしい本はあらかた読み漁った。とーぶん活字はいらぬや。

本屋もおんなじ理由で却下。しかもあの店主のおじーちゃん、薦めてくるのがマニアックなのばかりだし。

ギルド……も、止めておこう。大会中は色々と人が入用で、ギルドの職員もたくさん借り出されてるらしい。忙し過ぎて目が回る状態、なんだそーな。

逆に武器屋さんとか道具屋さんとか、ココぞとばかりにお店開けてるらしいけど。色んなトコから色んな人が集まってるから。掻き入れ時なんだって。サスガ商売してる人の根性は違うね。

『で、今日はドコ行くんだ？』

「……………んー。お店巡りでもしよつか」

『？何の店だ？』

「うん、武器とか防具とか色々」と

『……………マ又お前あんだだけ色々作って持ってんのにこの上まで買うのか？』

「やー、買いはしないけど。そーいやおれ、この世界一般のそーゆーイロイロ、知らないなあって思って」

あたしの持つ武器やら何やは、全部あたしの知識を元に作られたモノだ。

ソレこそソコ等にありそうな何の変哲も無いダガーとかロングソードから、伝説に出てくるエクスカリバー、どっかの傭兵が使ってたガンブレード、はたまた某死の恐怖の銃剣や、科学武器の拳銃散弾銃ロケットランチャーまで。

ドコまでがこの世界の許容範囲なのか解らない……………刀もけっこー驚かれたからね。

ソレに、この街にやって来てもう15日経つけど、ごはんはもっぱら宿で食べてるし、外に出ても屋台で串焼きとかケバブっぽいとかしか買ってないから、食べ物以外の物価が未だに曖昧。

だからどんなのがドコまでの値段なのか、知っておきたいんだよね。

『……………あー、そーいやトカゲのおっちゃんにも言われたなー。バカショージキで足元掬われんぞーって』

うぐつつ……仕方ないじゃないかあの時はモノの価値が解らなかつたんだからつつ。

そして今でもモノの価値はあんまり解ってないんだ!!

『どーん、てイバって言う事じゃないだろ』

うん解ってる。イバれる事じゃないって解ってる。

『んー、じゃあ今日からはその、モノの価値のオベンキョー、なんだな?』

「そゆ事になるね」

『あ、マ又俺今日のおやつパイがイイ。あの、本屋の近くで売ってた』

「……イキナリ飛んだね、話が」

しかも朝飯も食ってないのにもーおやつですかい。

まったくこの子ってばどーしてこんなに食い意地が。

『食い意地違い。グルメと言え』

………グルメな魔獣………なんて珍妙な響き………

『珍妙違い!ソレに俺の夢はっ、あらゆる料理を制覇する事だっ!』

いやドヤ顔でそんな事言われても。

『フーワケでマヌ。今日の朝は?』

「………あー、ハイハイ。そいじゃー下に降りますかねー」

『おう!ーめっしだーめっしめしーvv』

朝から元気なメーレに呆れた苦笑を洩らし。あたしは身支度整える。

あたしの無差別級部門、本戦出場日第一試合は4日後だ。だから刀はベッド下の籠の中にしまい、チョコボ頭のコスプレも何時もの普段着に変える。

そして、何時もの如くメーレを右肩に貼っ付けて部屋を出た。

「さてさて。今日の朝ごはんは何かしら？」

『ココの食いモンすっげーうめーから何でもいい!!』  
うん確かに。良くこんな良い店に空きがあった。

るんるん気分です階に降りて、見つけたライラさんに挨拶するの  
に近付こうとした、時。

視界の端に、見知った人を見つけました。

とゆーか昨日の今日で忘れられるワケがない。

しかもすっごい解り易い。出入口近くの壁に凭れて腕組んでるだけなのに、彼の近くの半径5メートルくらいの席には誰もいなくて  
ぱっかり開いてる。

……………何で、こんなトコにいるんだろう。

『どしたんだ、マヌ?……………って、アイツ』

ほけん、として見てたら、ふ、と彼が首を巡らし。

ばちい!!と、擬音語聞こえてきそうなくらいに合った。何がっ  
て、目が。

ちよっと待って。何故に近付いてくるの!?

かつ、と。靴音が大きく響く。様な気がする。

近付いてきたその人は、あたしの目の前で、脚を止めて。

「朝から済まないが、少し付き合っただけじゃないか」

そう、静かに低い声で言ったのは。

ランカー上位のSランク。『黄昏の鋼』とやらの副団長。年より

老けて見えるコワモテの。

「……おはようございます、イスターさん」

あたしは取り敢えず、へこりと小さく頭を下げ、挨拶した。

）．．．）．．．）

大通りから脇道にそれ、奥へ奥へと歩くコワモテさんの後ろを着いて行って、やってきたのはおつきな建物。

何と彼の所属してる、『黄昏の鋼』の宿舎、だそうな。

『黄昏の鋼』は、ココ王都シュリスタリアでも指折りの傭兵団らしく。団員も百人くらいいて、その全員がこの建物の中で寝起き出来るのだそーで。

…… ホントにこのイスターってどんな人だ。

カルテットの幼馴染なんだから20代前後でしょーに歳。

「『黄昏の鋼』は元々、俺の父が立ち上げた傭兵団でな。その父が病で引退してからは、兄が跡を継いで俺はその補佐をしている」

いやいやソレでもだよ？

こんな大規模傭兵団の副団長張れるだけの実力と統率力はあるって事よね？

「まあ、確かに剣の腕には自信があるが、『黄昏の鋼』が此処まで

大きくなったのは、兄の手腕によるものだ」

いやソレでもわっかい人が上に立ってこんだけの規模を纏めるって。

本人にソレだけのカリスマがないと出来ないモンですよ？

補佐だっておんなじだ。仮にも組織ナンバー2。周りから認めて貰わなきゃ、ふつーはその立場に立つ事なんて出来ない。

勝手知ったる我が家、な感じで、ずかずか宿舎に入ってくコワモテさんの後ろにくっ付いて行く。

お知り合いさんなんだろう、彼の顔を見て声を掛けようとした団員さん達が、あたしの顔を見てヒキツと固まる。

……………うん。もう慣れた。慣れたよあたし。

『けどマヌに何の用なんだろうな、コイツ』  
ソレはあたしも気になってます。

少し、とか言われたけどココに辿り着くまで既に1時間近く経ってるし、「ドコに向かってるんですか？」って聞いても「もう直ぐ着く」ってナナメ上にずれた返事しか返してくれないし、「話って何でしょう？」って聞いても「着いたら話す」としか言わないし。

そんなコワモテさんは、未だ止まりもせずにはズンズン進んでおります。マダなんですか目的地。帰ってイイですかあたし。

「着いたぞ」

とか思わず悪態吐こうとしたらコワモテさんが足を止めて、慌ててあたしも足を止めた。

あつぶな。もう少してコワモテさんの背中にドーンとするトコだ

った。

足が止まったのはちょーどアーチ状の出入口。ひよこ、と首を動かしてコワモテさんの前を見てみたら、どーやらこの先は中庭らしい。

「ココは訓練場だ……と言っても、中庭を平地にした程度のもんだが」

『……くんれんじょーって、ぜんぶ試合カイジョーみたいに石の地面だと思ってた』

うん。確かに。

花壇も何もない運動場みたいな真っ茶色の地面。ホント殺風景なこと。

まあでも、ココはコツチな方が良いんだろう。障害物がない分、下手な広場よりは広いし。

ソコにはおよそ10人前後の、色んな剣を持った色んな人が色々やってた。素振りとか模擬戦とか。

ソレをぐるつと一瞥し、コワモテさんが一步、訓練場へと進む。気付いた人等が手を止めて、コワモテさんに頭を下げる……際に後ろのあたしを視界に入れて、ヒキツと固まるのにはもう突っ込まない。

コワモテさんが再び歩き始める。その足が向かっているのは、とある1人の男性。

20代後半、もしくは30前、くらいだろうか。コワモテさんとおんなじ赤茶色の髪。ウルフカットなのか。ソレとも尻尾なのかその後髪は。判断にちと迷います。

コワモテさんと似た様な背丈で、コワモテさんより若干細く見え

る……でもマツチヨ。ひよろりと高いあたしと全然違いますよホントに。

その人は1人の剣士さんとお話をして、だけどコワモテさんに気付いて顔をあたし達に向けた。

その目の色は、コワモテさんよりちょっと薄い青、だ。

「兄貴」

あ。やっぱり？

見た目の似たトコロが多いんだもの。髪の色とか目の色とか顔のパーツとか。

呼ばれたその人は、ちよい、と片手を上げ。

話してた人に何か言った後、コツチに近付いてきた。

「おう、イスター！朝早くから出かけたって聞いたんだが、用、は……」

……………そして、毎度の如く、この反応。

あたしコワモテさんの真後ろにいたから、きつと近付くまで見えなかったんだろう。近付いてきてた身体を止め言葉を途切らせ、目を大きく開いてあたしを凝視する。

『おー。おもしろえ顔』

メーレソーユーのは言葉にしちゃいけません。

「……………えー、イスター、サン？ウシロノカタハ、イッタイドナタデ？」

しかも何故カタコト。

「昨日話した、シユア達の友人だ」

だけどコワモテさんのセリフを聞いて、直ぐ様お兄さんの目の色が変わった。様に見えた。

「『粉碎』と『閃槍』を余裕で負かしたっていう双剣使いか!!」  
実際、その視線は驚いたモノから好敵手を見る様なモノに変わってる。

周囲の人達がザワリとし、ソレだけじゃなく何だ何だと建物から出てくる人が増え。

「……………えー、と?」

「うおつと悪い悪い。まさか上位ランカーを倒した最低位ランカーが、こんな別嬪だと思わなかったからな。ついビツクリしまった俺はゲイザーだ、ゲイザー・シアーズ。ソイツの兄貴でこの傭兵団の団長。宜しく、えー、マヌ、だったか?」

「あ、ども、宜しく、です?」

ニカツと笑われ、右手を差し出されて……………コレは握手の催促かそーなんだな。取り敢えず、同じ様に右手を出したら、がっしり掴まれて思いつきり上下にシェイクされた。  
しかも。

「んじゃ早速、一戦やるか」

「……………はい?」

ちょっと待てえい。

じゃあつてナニ。何がどーなってそーゆー事になるっ!?

「ちよ、ちよつと、待って下さい!」

「んあ?」

ズルズルと、手を握られたまま中央の開けた場所にまで引き摺られて、あたしは思いつきり手を振り払う。

お兄さんはそんなあたしをキョトンと見て……てゆーか何でそんなワケワカメな顔で見られなきゃならないのあたしの方がワケワカメだよっつ。

「初対面で挨拶は基本の基本ですけど、どーしてその次で『一戦』になるんですか」

「いや、だってアンタ、ソレで来たんだろ？」

なんでやねん。

『おー、出たなウワサのツッコミー』

……メーレアンタは少し黙ってて。

「違います。おれは話があるって言われてココまで来ました。試合するなんてひとつっつ、ことも聞いてません」

「え、マジ？」

「マジです」

きよとん、とした顔に丸くなった目、をプラスして、お兄さんはあたしを見る。

そして、ウソじゃないって解ったんだろう。でっかく溜息吐きながらじとつとコワモテさんに顔を向けた。

「……イスター、お前また説明端折っただろ」

「交渉は兄貴の分野だろう？」

「……お前なあ……はあ」

ぐったり。脱力して頭をガリガリ掻くお兄さん……無愛想無口な弟持って苦労してんのね。

「あー、悪い。イスターが喋ってるモンだと思ってた」  
「はあ……」

「やー、このコワモテさんにお話は……なんか如何にも『拳で語れ』  
みたいな人だからなあ。あ、いや違う『剣で語れ』か。」

「で。その話、ってヤツなんだが」

「はい」

「アンタを傭兵団に迎え入れたい」

「……………は？」

「なんですと。」

「……………ちなみに、なぜ、とお伺いしてもイイですか」

「ん？アンタが今年の大会出場者の有望株だから」  
何故に。

『えー、マヌってユーボーカー？』

そしてメーレお前はイチイチ反応しないの。

「一番難易度の高え無差別級部門で、『粉碎』や『閃槍』なんつー  
強敵をモノともせず、ストレートで予選抜けした無名の双剣使い。  
アンタは久々の優良物件だ。騎士団でも勧誘の話が上がってるらし  
いんでな。先に取り込んでごうと思ってるよ」

……………え。

「ちょっと待って誰が優良物件。」

「何だその騎士団からも勧誘って。」

「つーワケで、一戦やるか」

「イヤだから待て。」

「……………ソコで何で勧誘の話から一戦に話が行くんですか」

「いや、だつて強いヤツがいたらひと試合つてのは常識だろ？」

『あーわかるわかる。強いヤツいたら狩ってみたいよなー』

「そんな常識知りません」

んでもってメーレは今後誰彼構わずケンカを売らないよーに。

『えー』

…………… オヤツ抜

『だよなっそんなジョーシキねーよな！！』

コロツと前言撤回したメーレに溜息吐きつつ、ちろん、とお兄さんを見る。

…………… ナゼ首を傾げてるんですか。

てゆうか、交渉はお兄さんの分野、とか言いながら実はオタクも脳筋族でしょう。

しかもコロコで試合受けたら入団確定ルートっぽいし。

「申し訳ありませんが、謹んで辞退申し上げます。話がソレだけでしたら、失礼させて頂きますね」

ぺこり、お兄さんに頭を下げてくるつと踵を返す。

ぽかん、とするお兄さんもザワザワ！つてするギャラリーも無視ですムシ。

「ちょ…………… ちよつと待て待てつ、待つてくれ！」

…………… おや。まだ何かあるんだろーか。

足を止めて振り返る。慌てたお兄さんが近付くのを待つて。

「辞退つてのは、ドツチの事だ？試合か、入団か？」

「両方です」

バツサリ言い切ったら、またもやポカんとされた。何故。

「あんな、悪い話じゃねえと思うぞ？ウチはソレナリに名の売れた傭兵団だし、各々の実力に合わせた武器防具から小物の道具まで支給される。団員が多いから訓練も事欠かねえ。強くなるにや持って来いだ。ソロだと出来ねえ事もパーティ組んでやれる」

……うん。そんな通販の特典みたいに連ねられてもね。

「お断りします」

「何でだつ？……もしかしてアンタ、騎士団狙いか？」

だから何故。ってそーいや大会でイイ成績取って騎士団入りしたいって人もいるんだっけ。

「違います」

「………だつたら何で大会に出てんだ？純粋な腕試し、ってワケでもねえだろ？」

……名声だけが参加動機じゃないと思うなあ。

はふ、と溜息。

何時の間にかギャラリーはひそひそコソコソ、あたしとお兄さんの会話に興味深々。

始終我関せずを貫き通してるのはコワモテさんだけだ。ソレはソレである意味スゴイ事だけでも。

「おれ、探してるモノと行きたいトコがあるんですよ」

『俺のオヤジとルーデルディアナー』

うん聞こえてないからメーレの声。ついでに素直に言っちゃえるモンでもないからドツチも。

でもコレだけで察してくれは……しないのねお兄さん。

「ソレと大会出場がどう繋がるんだ？」

「大会の上位4名には賞金が出るでしょう」

「ああ」

「賞金を貰わない代わりに、コッチの希望を言えばある程度は叶えてくれるんでしょう?」

「ああ……ってアンタやつば騎」

「おれの希望は王城の書庫の閲覧許可です」

みなまで言わせてなるものか。

お兄さんの言葉を遮る様に言ったら、はいい?みたいな顔された。何故。

でもまあ、ココまで言ったら今度こそ察してくれるでせう。

あたしの探し物も行き場所も、ココじゃない。そして王城の書庫っていう、普通の図書館とかギルドじゃ手に入れない情報が必要。下手したら世界一周しなきゃいけないかもしれない。

中には街から街へ、旅をしながら稼ぐ傭兵団もあるんだろうけど。ココの様に、ひとつの街を拠点として活動してる、なんて行動範囲が制限される組織に入団するのは、あたしにとってはデメリットだ。

「とゆーワケで、その話はお断りさせて頂きます」

にいつこり。

笑って言ったら、お兄さんは「あー」とか呻きながらガリガリと頭を掻いた。

「……ホントに、まったく、ものつつつ、すごく、勿体無いが……誘いを断る為の嘘、ってワケでもねえみたいだな」

おや。ウソっぽかったですか?

「いや、目がマジだったからな……しょーがねえ。入団は諦めるわ

け・ど」

はい？

まだ何かあんの？

「探しモン見つかって目的地に辿り着いて、その後何も目的なかつたら、是非ウチに来てくれ」

……あらま。

何てまあ、気の長いコト。

「……………何年かかるか、解りませんよ？」

「何年かかっても、アツサリ諦めるには惜しい人材なんだよアンタは」

いやー。ソレはちと買被り過ぎではないかと。

「いやいやいや。ガレスタークをソコで倒せる人間なんざ、そう滅多にいねえぞ？」

うぬ。だけどソコがちょっと納得いかんのだよ。

あのずんぐりむっくりはあたしや『ちいさいの』でも狩れる。おかしさまが出てきた日なんかには、臨戦態勢入る前に速攻逃げの手だ。

そんなずんぐりむっくりは、ホントに強いのだろーか？

『人型にとつては強いんだろーな』

いやメーレあたしも人型。

『マヌはちげーじゃん。規格外じゃん』

……………うん。もうイイよ。元一般人とか平和主義とか争いキライとか事無かれ主義とかイロイロ言いたい事あるけどどーせスルーされるだけだから何も言わないよ。

『いやマヌ言つてっから。ちゃんとツツ込んでっから』

気の所為だよ。

「まあ、勧誘の話はコレくらいにしといて、だ」

メーレのツッコミにさらりと（脳内で）返してたら、さっきまでの真剣そうな顔とは打って変わってにっこり笑ったお兄さん。

……………なんだかとってもイヤんな予感。

「この時間帯で大会の観戦にも行かずにココに来るって事は、チケット買えなかった上にヒマしてんだろ？」

「……はあ」

「じゃ、ヒマ潰しにいつせ」

「やりませんって言うてるでしょーが。」

やっぱり、って思ったあたしは、皆まで言わずバツサリ遮らせ  
て頂きました。まる。

16・あるとは思ってたけどナニユエにこんなのが混ざってるんだ

お兄さんとの攻防(?)をしばし繰り広げ。

とゆーか実際剣持ったお兄さんに追い掛け回され。

メンドーになってすたこらさつさと逃げ出したあたしは、その足で宿に戻った。

……………『黄昏の鋼』は鬼門に認定。もー二度と近付かん。

その日はそのままコレ以上一步も外に出ずだらだら時間を過ごし。

次の日。ちょこつと復活したあたしは市場に繰り出す事にした。

そしていろんな露店をひやかしたり、武器屋に入ってみたり。

思ったのは、武器防具ってけっこう高いのね、って事だった。

試しに買って見た何の変哲もない短剣が、何と金貨1枚もしたのだ!!!

10万円だよ、じうまんえん!!!

あ、あと傷薬とか毒消しとかも。地球の消毒液と同じくらいのだいたい円で500円くらいかな?って思ってたら、4倍の2千円。

いっここにつき青銅貨2枚した。

街から出たら魔物なんてのがふつーにうろついているこの世界。身を守る為の武器防具はわりとしっかり作られてる。

しかも年頃になれば街人でも護身に短剣の1本は持つ様になるらしいし、ランカーの数がけっこう多いから需要が高い。オマケに鉱山は魔物多発地帯が多くて採掘が難しいとまできた。

薬草も似たり寄ったりだ。栽培してるトコが皆無ってワケじゃないけど、やっぱり土とか環境とかの所為で育ちが悪い。野山で群生してるトコはやっぱり魔物多発地帯が多い。魔物の臍物から作れる薬もあるけれど、その魔物が一般ピーパーには驚異。ランカーに依頼して狩って貰って作って、ってしてたら、やっぱりコストは高いワケで。

そんなこんなが重なって、武器防具類や旅の必需品はワリ高なのだそーでございます。

『けどマヌって魔法で色々作れるじゃん』

「まあねー」

『イロイロ作れるから武器屋も防具屋も道具屋にも用事ねえじゃん』

「確かにねー」

『イミ無かったんじゃね？』

……ソレは言わない約束でシヨおっかさん。

でもメーレの言う通り。あたし基本何でも作れちゃえるから、ぶっちゃけ武器とかの相場なんて必要なかった。しかもあたしの作るヤツの方がイイときたら尚更だ。

武器とかを見てみたその後はテキストに市場を散策。メーレにアレ食いたいコレ食いたい言われながら、タマにおやつを買ったげて。

……だけどあたしは異界の人ゴミを舐めていた。

大会はもう始まっているのに、右向いても左向いても前も後人も人、ひと、ヒト。

あんまりにも多くて歩くどころか立っただけでゲッソリ。即効でそのまま宿に帰らせて頂こう。

『んでもこの後どーすんだ？』

「どーするもこーするも……そのまま部屋でだらだらするに決まっ  
てんじゃない」

『えー』

「お前まだこの人ゴミの中で泳ぎたいの？」

『や、ソレは俺もカンベン』

「だしよ？」

『でもそーすつとヒマだなー』

「いーよヒマで。ってか荷物の整理したいって思ってたからちよー  
ど良かったよ」

『二モツのせーり？』

「うん。どーもイロイロやばかったりするんだよねえ」

あたしは自分で作ったモノを売る予定なんて今んトコない。

売るのはせいぜい、前にグランさんに売った宝石のルースとか、  
狩った魔物の皮とか牙とか。

「例えばさ。あのずんぐりむっくり。本にも載ってたんだけど、ホ  
ントに個人Sランク相当の魔物だったんだよねー」

『前も思っただけだよー。アイツってすげーのか？』

「人の中では相当に」

前に買った『食べれる種類が解るモンスター図鑑』に乗ってたの  
はSSSからGまで。現在確認されてる魔物と魔獣全部。

魔獣は全部SSSだった。子供でも被害でいったら天災級らしい。  
人なら万の軍勢で対抗しても満足に相手に出来ない相手。一番の対  
処法は、見つからない様に縮こまって隠れていませう、だ。

………なんか全然そんな感じしない、うん。主に今あたしの肩  
にはっ付いてるメーレのおかげ(?)で。

いやでもこいつすつごい食欲旺盛だからな。違う意味で天災級……いやいや、考えるのよそ。

で。次に恐ろしいSSランクの魔物は亜竜。純粹な竜じゃなくて、進化の過程で竜に似たヤツとかの事。コレまた熟練者ばかりの一個師団ばりの戦力がなければどーにも出来ない相手らしく。

次のSランクにくる魔物は、少数精鋭が挑んでようやく始末出来る、ってくらいだから、あのおんぐりむつくりの強さもホントはけっこう相当なモノだ。

………おかーさまには尻尾巻いて逃げたけどね。

まあ、そんな世間一般ではゲキ強で知られてる魔物。討伐されるのなんて滅多にないし、だから素材も滅多に手に入らない。とゆーか、滅多にないから大変貴重で、市場に出る前に貴族とか国軍とかに持ってかれる。

そんなモノをお気軽に売っちゃったりしたらどーなるか。

『うえー？ミンナが喜ぶ？』

「おばか。悪目立ちしすぎるっての」

ずんぐりむつくり以外にも、あたしが何かの時の為につて採っておいだ魔物の毛皮や牙や爪は、凶鑑見た限りSランクの魔物のが多かった。

そんなのどつちやり売り込んでみる。何だかんだ色々と、ホンツトーに色々と探られる。

いや、ソレだけならまだ良い。下手すりゃまだ貴重な素材持つてんじゃないの？って盗賊まがいな奴等が狙ってくるかもしれない。

「そんなのに負けるホド弱くはないつもりだけど、メンドー事には変わりないからね」

『たしかにメンドーだなー』

まあ、幸いルースのお陰であたしは今お金持ちだ。ポーチの容量はまだまだ余裕だし、無理して今売る必要もない。

「んじゃ売らねんだな？」

「うん。……ま、気が向いたらまた何か作るし」

元材料が何か解らないくらいにしてから売った方がまだマシだと思っ。

そんな事を話しながら宿屋へ向かってた時だ。

……………あれ。

何だか今、視界の端に変なのが映った。

思わず足を止めてぐるりとソツチに顔を向ける。

はたして、ソコにあったのは。

「……………獣人？」

「檻？」

四方が鉄格子で出来た檻の中。ボサボサ髪でポロポロな服で首輪を着けた狐耳の女の子がいた。

しかも、その子の檻を先頭にズラツとおんなじ檻が全部で10個。そしてその檻の中には、女の子と似たよーな、ボサボサでポロポロな首輪を着けた人とか獣人とかがいる。

……………コレ、って。もしかして、もしかしくなくても。

「……………奴隷？」

「ドレイ？って何だ？」

「……………うん……………商品になった人、って言ったら良いのかな」

やっぱいるんだ奴隷。

まあ、あんまり文明発達してないしねこの世界。人権とかあやふやだもんね。

でも目の辺りにすると何とゆうか。狐耳の子なんてまだ10歳くらいだし。他の人等に関しても……って、あれ？あれれ？

『……なあ、マヌ』

「……うん？」

『……アイツ、何か変だ。あの、向こうから3番目の』

「……メーレもそう思う？」

メーレと一緒にあって見てみたのは後ろから3番目。体育座りで顔を膝の上に埋めて座ってる。汚れた長い金髪にズタボロな服の。

「ふつーの人……にしては、魔力が濃いね」

『でも、エルフとかマーメインとか、妖精族っぽくもないんだよなあ。何だろ？』

「まさか妖魔だったりして」

『いやソレはサスガにないだろー。妖魔族つつたら他の人型種の天敵だぞ？』

「そーだよーあはははは」

『そーだぞーあっはっは』

「……」

『……』

「……ちよっと確認してみますか」

『……おう』

こくん、と頷き合って、檻に近付く。

近付いた時に、他の檻の中の人等が固まって、だけど一拍後には「ワタシを買って下さいご主人様」とか言ってきたけどトコトンス

ルー。

ざっ、と金髪の檻の前で立ち止まった。

気付いたらしい金髪が、億劫そうに顔を上げる……あらヤだすっ  
ごいイケメ、げぶごふんっつ。

いやいや、ソレはともかく……金髪はちらり、と蒼い目であたし  
を見て、そのまま目を見開いて固まった。

そしてあたしとメーレは、と言えば。

「……青白い肌に尖った耳とイレズミみたいな紋様……」

「……かーさんの言ってた魔人族の特徴そのまんまじゃん……」  
ビンゴだ。思わず呟いた。

ソイツはあたしの呟きに、ハツとした様に硬直から抜けて。

………うんすっごい殺気です。しかも視線だけで人殺せるんな  
らあたし今生きてないっくらいに睨んできます。

左右の奴隷さん達どころか、道を歩いてた人等までヒイイってな  
ってる。

『けど何だっってこんなトコに魔人族がいんだ？』  
確かに。

数千年前に他の人型種と大戦争、そして現在は冷戦中な魔人族は、  
魔獣と同じくらい滅多に見る事が無い。

なのに何だっって、こんなトコで奴隷してるんだか。

ギリギリ睨み付けてくる金髪をへーゼンと見下ろして、うーむ、  
と考える……あ、隣の奴隷さんが殺気に当てられ過ぎて泡吹いた。

「おいっ！何をしているんだ貴様はっ！！」

うおっとうっ？

突然の怒号にびつくら仰天。もしかしてあたし？あたしの事ですかっ？

思わず振り向けば、店の中から出てきた裕福そうなビール腹のおっさんが、あたしの方に……ではなく、あたしの目の前の金髪の檻に向かつて、突進してきた。

しかも。

「貴様っ、自分の立場が解っているのか！奴隷の分際でっ、何だその目はっ、生意気な！！」

がんっつ、と檻を蹴って後ろに倒し、尚且つ手にした棒で、ガスと金髪を突きまくる、ってイヤイヤちよつと。

檻と一緒に転がされた金髪は、蹲って両腕で頭を抱えて、呻き声も上げず避ける事もせず棒を受けて。

思わず、あたしはその棒を掴んで止めた。

「何をっ……………っっ!？」

「その程度で許してやってはくれませんか、主人」  
いくら奴隷って言ったって、コレは過剰だ。

憤怒の形相で振り返り、あたしを見て速攻顔から血の色をザァッと引かせたおっさんに、あたしはにっこり笑い掛ける。

……………いやその、ひい、って何ですか。ひい、って。

「……………こ、コレはコレは、旦那様。お見苦しい処をお見せしまして」「いえ、構いません。躰は大切ですから……………ですが、やり過ぎてしまっっては、商品の品質を落としてしまいますよ?」

ちらん、と金髪を見る。

注意して見れば、コイツが殴られるのは今日が初めてじゃない。どころか、きつと頻繁だ。剥き出しになった腕や足には、たくさん

のアザや傷がある。

頭を庇う腕の隙間からあたし達を見上げる目には、蒼く燃える憎悪の炎。

……………あ。コイツ、ヤバい。

その目が諦観なら、いやソレも違う意味でヤバいけど。でも、この目はヤバい。敢えて言うなら復讐者。目的の為なら手段を選ばない。周囲を蹂躪して殺戮の限りを尽くす、狂気の目だ。しかもまだ諦めてない。こんな境遇に陥って、他の奴隷さん達はホントに虚ろな目をしてるのに。

コイツだけは、機会を窺ってる。

この境遇を打破出来るだけの何か…………魔人族は魔力が高いって聞いた。きっとコイツ、何か仕出かす。ソレが成功するって確信してる。そして今は、時を待ってる。檻から逃げる時を。

その、証拠の様に。あたしの右目が感知した、エーテル。金髪の心臓。集まってグルグル澱んでる、暴走寸前な、高濃度の。

リミッターでも、外すつもりか。

人は元々、自分の持ち得る力の全てを使う事は出来ない。そんな事をしたら身体が壊れるからだ。だから人は無意識に、使う力を制御してる。精々、使えるのは全体の30%程度。

けどその無意識を取っ払ってしまえる場合も、ある。意図的かコレまた無意識下では置いおいて。火事場の馬鹿力、なんてその典型だが。

……………ゲームやラノベでいうところの、狂気化、なんてのも、

確かコレに当て嵌まったハズだ。

コイツ、きつとその無意識を……リミッターを、外そうとしてる。ふと思つた事は確信に変わった。

外してしまえば、こんな檻ブチ壊すなんて造作もないだろう。奴隷、って言うくらいだから主人には絶対服従とかっていう魔術か何か掛けられてるんだろうけど、狂気に走って理性失っちゃえば、余程の強制力が魔術にない限り、あつてないのと同じだ。

ソレでも、きつと。理性失つてもコイツが最初にするのは、このおっさんを殺す事だろうな、と思つた。

その後はこの街。この街に住む人全部……で、最終的には、人型種全部。

出来るか出来ないか、じゃなくて。やるんだ、つて。決めてる。そんな目を、してる。

『……………すっげーキケンだな、コイツ』

メーレも金髪に警戒しました。戦闘態勢バリバリ、つてな具合で伸ばされた爪が服を突き抜けて肌に刺さつて痛い。

『マヌ。コイツ、ココにいたらいつかココ等全部殺し尽くすぞ』  
だろうね。

あたしとしてはこんな危険人物、コンクリ詰めにして海の底に、つてイヤイヤあたしそんな鬼畜な事しません事よ。イケメンは世界の共通財産なのよ。

でも、このおっさんにコイツは危ないから手放せ、つて言つても、無理な様な気がするし。

妖族族つて珍しくて貴重なんだらうけど、こんな、態度からして反抗的な奴隷、買つてく人なんてのも、皆無だらうし。

まあ何はともあれ、このままココに置いておくのは……後が怖い。

様な気が。

「主人」

「はっ、はい？ ななな何でございましょうっ？」

「ココにあるのは、全て貴方の商品で合ってますよね？」

「……え？ つええ、その通りでございます」

「……では。主人は奴隷商で間違いありませんね？」

「はい、そうでございます……もしや、旦那様は奴隷をお探しいたのですか？ でしたら店内にも商品がございます。如何でしょう。店頭においてあるコレ等よりもっと優れたモノがございますよ」

「いえ……この、金髪の魔族は、幾らですか」

「………は？」

『っ、うおいマヌー！？』

あ。おっさんポカーンってした。

金髪も、聞こえてたのか目を見開く。

そしてメーレ。アンタは耳元でウルサイ。

『ナニ考えちゃってんだマヌー！？ 人を商品で買っつてっ、いやヒトじゃねーけど！』

いやでもコイツだけはそのままココに置いてたらヤバイ。

「……あ、あの、旦那様……店頭においてあるコレ等の商品は全て欠陥品でございます。戦奴にも重労働にも性奴にも使えず、魔物に対する使い捨ての盾代わりか、魔道具や新しい薬等の実験にしか役に立たない、最低商品でございます」

うんヒトとしてどーかってくらいすんごい事言ってるなこのおっさん。

だからってその事に何の感慨も浮かばないあたしもイイ加減非道だなんて思うけど。

でもコイツだけはヤバい。

いつか絶対檻から逃げ出して、周りの人達を虐殺してやる、って決めてる。

そんなんあたしがこの街を出てからやってくれ、とは思うけど……ソレも素直にどーぞどーぞ、とは言えない。ライラさんやりチアちゃんは、良くこの通りで買い物してる。

「……では。貴方の商品の中に、コレ以外の魔族はありますか」  
「は、はあ……いえ、魔族の奴隷は珍しいモノでして……」

とゆー事はコイツ1人だけって事か。

奴隷の相場なんて知らないけど、このヤバいの1人くらいなら何とか……うん、何とか。

「では主人。この奴隷を。幾らですか」

『うおおーい、マヌってばー』

「や、ですから、旦那様」

「幾らですか」

にいつこり。

有無を言わず言ってみたら、再びヒイイ、とおっさんが戦慄く。

「は、はい。ここの、この奴隷は、珍しい魔族ですが欠陥も酷く、状態も悪いので、下級奴隷の相場は大体40万レジエですが、20万レジエで販売致しております、」

『な、なあマヌ、止めとこーぜ』

じつまん単位。むう、高いとは思ってたけどまさかたったの短剣2本分って。

今のあたしなら軽く払える額だ。行つところ！

「ではコレで」

『つつぎゃー！ー！ー！ままたつ、まぬー！ー！つ！？！？！？！』

ぼん、と。白金角硬貨を出したあたしにメーレが吠える。

うんウルサイ。ちよつとは大人しくしてなさいつて。

『イヤ大人しくつてつ、大人しくつてー！ー！つ！つ！』

そしておっさんと言えば。まん丸くした目で白金角硬貨を凝視。

「主人？」

「……はっ、はい！確かに、100万レジエ、お預かり致してござ  
います！」

あ。良かったちゃんと再起動した。

「つつつつきましてはっ、店内へとご足労願えますかっつ

おいお前つこの檻を中へ！」

おっさんはワタワタと、慌てて角硬貨を持ったまま店内へあたし  
を促し。近くにいた体躯のよろしい従業員さんにツバを飛ばして急  
かす。

で、言われたとーりおっさんにくつついて、金髪の入った檻を2  
人がかりで担ぐ従業員さんを後ろに従えて、店の中に入ったら。け  
っこーな大きさの袋となんかの書類、を持った少年が待ち構えてた。

「で、では、まずですね。コチラの書類に受け渡しのサインを願  
い致します」

ぴらん、と渡された紙は、物品販売書・物品受領書・所有者届書。  
おお、こんな世界でもあるんだ、こんなのが。

「……コレは？」

「はい。商品売買の書類でございます。1枚は私共の控え、1枚は旦那様の控え、そしてもう1枚はお役所に提出させて頂く1枚でございます」

あ、そう。なんかソレっぽいつて思ったけどホントにそのまんまだね。

サラサラサラ、と出された3枚にサインする……今気付いたけどこの羽根ペンとインク、ギルドで使ってたヤツと一緒にじゃないか。

「はい、確かに　　では、次に『隷属の契約』を、旦那様と隷属の間で交わして頂きます」

「れいぞくの、けいやく？」

「ええ、ええ、その通りでございます。奴隷には1体につきひとつずつ、『隷属の首輪』と『隷属の指輪』という魔道具が付随されます」

……………うん。ふあんたじーにありがちなおぶしょんですな。

「首輪は奴隷が身に着けるモノでございます、指輪は主が保管するモノとなっております。そしてこの首輪と指輪は繋がっております、更に指輪には奴隷の真名が封じられております。その奴隷の指輪が此方となっております。この指輪の、石の部分にですね。旦那様の血を一滴、垂らして頂くのでございます。そうする事によって、奴隷は主に一切の抵抗が出来なくなるのでございます」

あら。まさかこんなトコでおかーさまから聞いた真名って単語が出るとは。

ホントに大切なね真名って。あたしも気を付けなきゃ。

おっさんの後ろにいた少年が、持ってたお盆を恭しくあたしに差



制止の言葉を気にもせず、水晶みたいな透明度の石に血を押し付ける。

と同時に、金髪の歪んだエーテルが霧散していくのを、感じた。

17・ノリとイキオイでまたメンドーなの買っちゃったよ

「ライラさんただいまー」

『……ただいまー……』

おやメーレ、テンション低い。

『低くもなるつての！俺の言う事さんざん無視しやがって！』

あつはつはでもあたしはあたしの稼いだお金で買い物したただけだし？

『……はー、も、イーよ……買ったままのモンはしょーがないし』

がくーつと頂垂れたメーレの頭撫でてやりたかったんだけど、生憎今のあたしは両手が塞がってる。

「あらマ又ちゃんお帰り……つて、マ又ちゃん、その人……」

「うん、成り行きとノリとイキオイで買っちゃった」

近付いてきたライラさんが、眉をしかめた理由は多分、あたしが姫抱っこしてる金髪。

奴属の契約が終わった途端、すこーん、といっぺんに大人しくなった。もーあんだだけ凄まじい殺気で睨み付けて来たとは思えないくらいに。檻から出してもあたしが担いでも、ウンともスンとも言わなくなったよ。魂抜けた人形、みたく。

ソレと同時に、あんだだけビシバシ感じてたイヤんな予感がすつかり無くなって、あちゃーあたし早まったかも？なんて思ったけど。

まあ、メーレのさっきの言葉じゃないけど、買ってしまったモンはしょーがない。

捨てるのは保留にするとして、でも今後どうすればいいか考えないと。

「ってワケでライラさん。ココって奴隷を部屋に入れるのはアリ？」  
「……まあ、マヌちゃんがそうしたいんなら。奴隷は荷物だけど生きた人だし、宿代に2000レジエ上乘せで部屋での寝泊まりはしてもらっても良いけど……普通の所有者は、奴隷にそんなお金使うのは勿体ないって、納屋とかにブチ込んでよ？」

「他は他。おれはおれ。んじゃあ取り敢えず、1泊7000レジエって事で。あ、そーいや今日で宿代また切れるよね。あと5日はまたこの街に滞在する事になったから」

「って事は銀3枚青5枚だね。けどマヌちゃん、持ち合わせは大丈夫なのかい？ランカーの依頼だって、積極的に受けてはないだろう？奴隷の維持は結構掛か……ひいっ!？」

って、イキナリ何ライラさんすっごい声出して……って、あ。

よつと片手で金髪を抱き上げて、ごそごそポーチを漁った所為か、金髪を包んでた布がはらりと落ちてた。

そして、ライラさんが凝視してるのは、無気力にぼーっとあたしに抱き上げられたままになってる金髪の、胸元。

ポロキレみたいな服の下から覗く、イレズミみたいな。

「……ま、まま、まぬっ、まぬちゃんっ、そそっ、ソイツツ、魔族じゃないか!！」

悲鳴じみたライラさんの声に、しいん、と店内が静まり返った。

誰も彼もが、あたしを見る　　正確には、あたしが抱える、

金髪を。

「な、なな、なんでそんな危ないのを買ったんだいっ!?!?!?」

顔を真つ青にさせ、ライラさんは云い募る。

「だけどそんな危ないのかコイツ?……いやまああたしもコイツはヤバいって思ってたけど。」

「ライラさんライラさん。コイツ魔族じゃないよ」

「ドコがだいつ!?!?ちゃんと胸に紋様があるじゃないかつ、それに耳だつて尖つて……」

「魔族じゃないよ、奴隷だよ」

「……………っあ」

ハタ、とライラさんが声を切った。

「どうやらあたしの言いたい事が解ったみたい。うん良かった。」

「ただどあたしは、まだまだ警戒してる目でコツチを見てくる周りの人達にも解る様に、ちよつと大きめの声で言う。」

「『隷属の契約』は済ましてある。奴隷は首輪を着けた瞬間から人を害する事は出来なくなるし、指輪を持つ主の命令には絶対服従だ。この魔道具は、例え妖魔でも逃げられないし壊せない。だから大丈夫だよライラさん、ね?」

「……………っそ、そうだね、うん、確かに。ソレは『奴隷』だったね。ゴメンよマヌちゃん、許しておくね」

「ん、イイよ。いくら奴隷でもコレはサスガにビックリするだろうなって思ってたし」

引き攣った顔のライラさんに、苦笑いしつつお金を払って鍵を受

け取って。

「あ、そうだライラさん」

「な、何だい？」

「後でお湯、持って来て貰っても良いかな。3桶分くらい」

「湯浴みには随分多い量だね。何に使うんだい？」

「ん。コイツ洗う」

「……………は？いやいやマヌちゃ」

「んじゃ、お願いしまーっす」

何かライラさんが言い掛けてたけど無視だ。ムシ。

さっさとコイツ部屋に連れてかないと、周りの視線が痒いし何よりコイツ自身がクサイ。

どんだけ身体拭いてないんだ状態悪いつてホント悪いなあのおっさん。売りモノなんだからちょっとは身だしなみも整えろっての。

たんたんたん、と階段上がって部屋に到着。やっぱり片腕で器用に金髪を抱き上げながら、ドアの鍵を開けて室内へ。

そして、ベッドの上に金髪をぺいっつと投げた。

『いやマヌ、サスガにソレは扱いが雑だぞ』

気にするな。あたしは気にしない。

……………てゆーかホントお人形さんになっちゃったなコイツ。落とされたのに微動だにもしないよ。

と、見下ろしてたらコンコンとドアがノックされた。

「マヌさーん、お湯持ってきたわよー」

うをつ早いなりチアちゃんっ。

「あ、ありがとうーリチアちゃん」

「いえいえどーいたしまして。ドコに置いたら良いかしら？」

「うん。大桶のあるトコでお願い」

「解ったわ……ソレにしてもマヌさん、奴隷買ったんですって？しかも魔族の。私驚いちゃった」

「あはは。ほら、おれって弱いからさ。強い奴隷とかいれば、ソイツに戦わせる事が出来ると思って。魔族って強いでしょ？」

「ああ、そういう事なのね。ランカーって、パーティ組んでも依頼の報酬によっては仲間内で揉める事があるから、買った奴隷を戦力にするって、私も聞いた事があるわ」

よいしょ、なんて湯気の立つ桶を持ちながら、リチアちゃんしばしの雑談。

「やー、でも咄嗟に吐いた嘘がそのまま丸のみされるなんて。てゆーかそーゆー奴隷の使い方もあるんですか。」

「ソレにしても、奴隷をぼんと買っちゃうなんて。マヌさん実はお金持ちだったのね」

「いやいや、お金持ちじゃないよ小金持ちだよ」

「小金持ち？お金持ちとどう違うの？」

「小銭をいっぱい持ってます、って意味」

「つぶ、あははっ、そっかー小銭いっぱい持ってる人なのねっ」

「そうそう……あ、ありがとねリチアちゃん、桶。はいコレ、600レジェ。あとコレ、チップ」

「あら、ありがと。遠慮無く貰っておくわ。じゃあ、ちゃんと夕飯食べに来てね？」

「あ、あはは。うんちゃんと覚えておく」

「ホントかしら。マヌさんってすぐごはん食べるの忘れちゃうから心配だわ」

『だよなっ忘れないでほしーよな俺のメシっ！！』

……はいゴメンナサイ。  
そしてメーレお前はホントにタマには食から離れなよ。

あたしは溜息吐きながら、金髪を大桶に放り込むべくベッドに向かった。

）・）・）・）・）

……今更ながらに後悔してる。

あたしはなんつーモンを買ったんだ。

『だから言ったじゃんか止めとけて』

いやでもあの時はコイツ海か火山口にでも捨てた方が世の為人の為何よりあたしの為、って思ってたんだよ。

ボロキレ同然の服をひっぺがし大桶にブチ込んで、だけど金髪は全くなんにも反応しなかった。

逃げられても暴れられても首輪と指輪で強制出来るけどね。ホントトひとつのアクションすら見せなかったよ。

で、ポーチから出した石鹸でわしゃわしゃする事数時間。  
宿に戻って来たのは昼過ぎなのに、今はもう夕暮れ時だ。

リチアちゃんが持って来てくれたお湯だけじゃ足りなくて、魔法でぬるま湯作ったよ。

やっと綺麗になった金髪をコレまた魔法で温風作って乾かして。

再びベッドにペイってしたトコで、気付いた。

歳はあたし（の見た目）と同じくらい。背はレグレくらい、かな？長い金髪は腰まであった。こんな状態じゃなければもー妄想大爆発だつてなくらいのイケメンなんだろうーなあって思う。ガリガリに痩せてるから魅力半減ですが。

けど、何よりも目を引いたのは。

『こーして見ると、けっこーヒデーなコイツ。脚も曲がってるし』  
「……ソレだけじゃないよ……」

メーレの言う通り、酷かった。けっこー、って言うより、すっごく。

元々が青白い肌なのに、至るトコロにアザがある。未だに赤黒く変色してるのも多い。

脚の骨も曲がってた。折れたのに放置されて変にくっついちゃった、みたいに。

何よりその胸の文様だ。右半分が焼け爛れてる。ヤケドかコレは……いや、もしかして無理矢理焼かれた、とかか？

ソレに、アークがおかしい。

普通アークっていうのは、体内を循環してる力だ。なのにコイツは循環してない。変なトコロで分断されてる。詰まってる。逆流してる。

しかもコイツのアーク……なんつか違和感が……何だろう……まあいつか。気にするホドの事じゃなし。

てゆーかアークおかしいトコからなんか魔方陣みたいな跡が見えた。

まさかとは思いつけど、魔術の実験か何か？

……ちよつと待てこんな危ない術を開発しようなんておバカがいるの？

しかもその所為でエーテルすらが上手く纏まらずに体組織が崩壊を起こし掛けてるし。

……………どうして、こんな状態でまだ人の形を保てて、生きてられるんだろう。

欠陥品で状態が悪い。あのおっさんはそう言った。あたしも、何だ障害者か、って思った。

だけどコレは、ゼツタイに後天的な障害だ。

コイツはきつと。きつと何人もの主の手を渡つたに違いない。

何人も、何人も。時にはサンドバックにされ。時には魔術の実験台にされ。ずつとずつと、虐げられて身体を壊されてそしてあたしの手に渡つた。

今は硝子みたいな蒼い目。あの憎悪は、ただ奴隷に落とされたから、だけじゃない。

「……………メーレ」

『……………うん？』

「晩御飯はもうちよつと待って。コイツ治すから」

『……………おっ』

肩から降りたメーレが金髪の頭の傍にちよこんと座る。心配そうな目で、金髪を覗き込む。

あたしはベッドの縁に腰掛けて、ゆつくりと金髪の右の手の先から肩を、撫でた。

口の中で小さく紡ぐのは、詩だ。 姫巫女の、癒しの詩。

紡ぐ音に合わせてエーテルが、淡く緑に発光します。あたしを中心に広がって、2メートル程の魔方陣を形成します。

金髪に、僅かな変化があった。

蒼い瞳を瞬かせて、ゆっくりとあたしを見上げてくる。

「……無駄、だ……魔族に、癒しの、魔術は……」

開く唇を、人差し指で留める。そして、今度は左肩から、指の先へ。

戻って次は首から胸。ココは重点的に。焼け爛れた跡は見るからに痛い。

ソレから、腹部。ひときわ大きな赤黒いアザを辿って、曲がった右足。爪先まで行ったら、今度は左の爪先から脚の付け根まで。

「……っあ、く……っっ」

「我慢して。今流れを整えてるんだから」

『マヌの魔法はピカいちだ。絶対治るから、頑張れ』

小さく漏らした苦痛の声に、紡ぐ詩を中断してひと声掛けて。メリレがすり、と金髪の顔に擦り付いた。

「……うあ……っ」

詰まってるトコをゆっくりゆっくり通して。分断されてるトコを繋げ。逆流してるトコロは元の流れに。刻まれた魔術の跡は完膚無きまでに消して。

「ふう」

息を吐く。同時に展開されてた詩の布陣が、蛭みたいな明かりを残して消えていく。

『マヌ、マヌ終わったのか？』

「うん、一応ね　さて、身体の調子は？」

する、と頬を撫でてみたけど、金髪はポー然としたままだった。

……………目え開けたまま寝てるんじゃないでしょーねコイツ。

「返事は？ん？」

ぺちぺち、と頬を軽く叩いてみた。

するとポー然、としたままぱちくりとひとつ瞬きして。

「……………痛く、無い……………何でっっ!？」

うをつとつ。イキナリそんな、ガバッと起き上がらんでも。

思わず引いたあたしにもメーレにも、気が付かずに金髪は自分の手を見て胸を見て脚を見て。

「……………治っ……………脚も、胸も……………っ？如何して……………神聖魔術は、魔族には効かないのに……………!!」

「ソレって光属性じゃない治癒魔法なら効くって事でしょ」

「なっ……………治癒系統は全て光属性の神聖魔術だ!!あり得ない!!」

「いやだから現実を見なさいな。アンタの傷は古いのも含めて全部治したし、さっきのは光属性じゃないよ」

あら、絶句。

だけど詩魔法はホントに属性関係無い。敢えて言うなら『想い』が属性。まあこの世界じゃきつとあたしにしか使えないんだけど。

金髪があたしを睨み付ける。相も変わらず視線が凶器ならあたし今無事じゃ済まないって思う様な目だ。

だけどその中に確かに見えたのは、困惑。

「…………お前、一体…………」  
何が聞きたいのかなんて、大凡は解る。

「アソコ、メインストリートなんだよね」  
「…………は？」

すつとぼけたあたしの言葉に、金髪は眉を顰めた。

「良く通るんだよねあの道。んでもってけっこー、顔馴染みになつた屋台のおじさんとか、いるんだよね」

『あ、そーいやあの串焼きのおっちゃんトコ、今日まだ行ってねーぞマヌ』

あーそーですね今日は諦めなさい。  
て、そーじゃなくて。

あの通りはメーレのお気に入りがとつても多いのだ。

店の人も、ほぼ毎日買いにくるあたしに最近は慣れたらしくて、なんとオマケだつてしてくれるおばちゃんだっている。

貴重なんだよあたし（の顔）に慣れてくれた人って未だにヒィイって腰抜かすの多いんだから。

「……………」  
「なのにアソコで大量無差別虐殺なんてされたら、目覚めが悪いんだよね」

「っ!?!?」

金髪が顔を強張らせた。

困惑を灯してた目が変わる。今度は盛大な警戒だ。

「……………お前、何で……………」  
「何をどーするつもりだったのかは知らないけどさ……………まあ多分バ  
ーサーク化、だったんだろうけど。ほっとくワケには、いかなかっ  
たんだよねえ」

ぐ、と噛み締められた唇。睨め付ける蒼は、徐徐に負の感情を滲  
ませて。

その、目だ。

爪を砥ぎ、息を潜め。獲物に牙を立てる時を待つ獣の様な。しか  
もタダの獣じゃない。残忍で凶暴な手負いの獣の。

このあたしに警笛を鳴らさせる程の、強い靱い目。  
ソレは同時に、強く惹かれずにはいられない、芯の通った意志を  
持つ命の煌めきだ。

あたしは片手でその首を柔く掴んだ。ビクリ、と跳ねる肩。だけ  
ど叩き落とされる事は無い。奴隷は、主には歯向かえないから。

「全てが憎いなら憎いでイイさ。復讐大いに結構。勝手にやって勝  
手に狂って勝手に死ねば？　でもね」

に、と笑う。

金髪の目は固まった様に、あたしの顔に固定されたまま。

「おれやメーレの『お気に入りに』を巻き込まないトコで、やってよ  
ね」

『……………マ又お前今けっこーすっげー事言っつてんぞ』

イヤそうは言うけどねメーレ。

所詮人間なんて自分本位だ。自分良ければ全てヨシ。総理大臣…  
…例えば王様が誰になったって、日々の生活がガラリと変動しない

んなら興味もない。

ソレと同じ。見た事も聞いた事もない人がドコでどーやって殺されようが、あたしは何にも思わない。話で聞いても「へえふうんあつそう気の毒に」程度の感想で終わる。

「……勝手な、事を……つつ」

ギラリ、と蒼い目が再びあたしを睨む。

はっ。勝手、ねえ？

「自分の勝手に暴走しようとしたヤツに言われたくない。てゆうか、人なんてみーんなエゴの塊でしょーが」

「……貴様等、人間と、俺をつ……一緒に、するな……!!」

「同じだよ」

つてゆうかドコが違うのよ。

産まれて、育つて、生きて、死ぬ。死んだ後は土に還る。

種族云々以前に、タダおんなじ星の上で生きる命だ。

「美味しいモン食べたなら美味しいって笑う。意味も無いのに殴られたら痛いって怒る。聖者じゃ無いんだ、思うのは誰だつて大半が同じだ。大切な人が死んだら悲しくなるし、ソレがもし殺されたつてんなら殺したヤツを憎みもするだろう。おれだつて、何もしてないのにイキナリ捕まえられて首輪着けられて檻に入れられたりなんかしたら、奴隷商みんなブチ殺してやる、くらいは思うだろうさ　ほおら。趣味だの価値観だのは兎も角、心の在り方は種族関係無く、みんな大方一緒でしょ」

пей、と。軽く掴んでた首を押す様に放した。

金髪は抵抗無くポスンとベッドの上に逆戻りして、ほんの少し眉をひそめてあたしを見る。

そんな金髪の顔目掛け、バサツと投げたのは、腕輪内のあたしの

練成した衣類一式。

檜皮色のズボンに赤香色のシャツ。黒色の靴下に、雄黄色のジャケット。

ちなみにあたしはボクサーパンツ派だ。ブリーフなんて誰が穿くモンか。トランクスも収まりが悪いから却下。この世界の一般的なカボチャぱんつなんて言語道断。

イキナリで慌てたんだろう。ワサワサと服を抱えて丸める金髪の頭に、トドメとばかりに朽葉色のアーミーブーツもどきを放り。

ごいんつ。

「……………いっつっつっつっつっつ!!」

『……なあマヌ。あの靴お前のと同じか？底に鉄板入ってる』

うん、そのとおりでございますが。

『……うわアレは痛え……………』

うん確かにイイ音したね。

でもあたし悪くない。避けなかったアイツが悪い。

『……………なんか、マヌに買われたアイツが不憫になってきた……………』

シツレイな。

「買ったちゃった以上最低限の手入れと維持はするよ。ってワケで早くソレ着て。ごはん食べに行くから」

……………あら。何でソコでそんなきよとんど。

「……………着る？コレを？……………何故？」

「えっお前露出狂なの？」

止めてよあたしそんなんと一緒に食事したくないよ。

『俺もヤだなー』

「違う!!!……………」というか一体何を考えているんだ貴様は」  
特に何も考えてませんが何か。

「オレが元々着ていた服は。アレで充分だろうオレには」

「あ。アレ汚かったから捨てた」

『てか服つつーよりボロキレだろアレ』

「っ、オレを同じテーブルに着かせるつもりか？」

「え。なんか問題あんの？」

『ないよなあ？』

メーレと揃って首を傾げた。

あ。ワナワナしてる。なんかワナワナしてるよ金髪。

「……………お前、奴隷の意味は解っているか？」

解ってるに決まってるじゃんか。

一体何が気に入らんのだコイツは。

「兎に角着て。コレ命令」

あたしがさっきしたのは身体を整える事だけだ。コイツの体力は回復してない。  
だからしつかり食べさせないと……………まさか人とか食べない、よね？

ぴしゃりと言い放ったあたしに何を思ったのか。

金髪は、ビミョーな顔をしながら渋々と。ホンツトーに渋々ノ口ノ口と服に腕を通し始める。

……………丈がちよっと長いな。横もけっこーがばがばだ。

でもまああたしんだし、取り敢えずコイツにはどっちやり食わせ  
て、少しでも早く肉付けてもらおう。脱ガリガリ。

そして思う存分イケメン堪能するんだっ！！

『……………マヌ……………』

……………うっ、イイじゃないかせっかく安くはないお買いものだった  
んだしっ。ソレっくらいの楽しみがあっただっ！！

じとー、とあたしを見るメーレにさりげなく視線を外しながら。  
あたしは、ノロノロと金髪が服を着終わるのを待つのだった。

18・おてとつとつだと思ってたら何でこんな厄介事が

その日、あたしは夢を見た。

夢の中で、おカーさまと話をした。

「メーレがまだ『おおぐい』だった頃の、あの森にいた頃の。日常のひとコマだ。」

「我等銀天琥はな、魔獣の中でも少し、変わり種なのだ」

「変わり種？なんで？」

「我等はな、良く縄張りから出るのだ。気に行った処があれば、そのまま移住もする」

「え。でもそしたら、力落ちちゃうんじゃない？だいじょぶなの？」

「まあ、力が落ちても其処等の人や魔物には負けんが……だから、我等は人と契約を交わすのだよ」

「けいやく？」

「そうだ。己に合った魔力を持つ人と契約を交わし、その魔力を食わせてもらう。代わりに、その人と周囲の人等を助けるのだ。ちなみに私の契約者も人だな。いや、あやつは魔力は美味かった」

「……おカーさま、しつもん」

「ん？何だ」

「魔力食べられる人はどーなの？寿命縮んだりとかしないの？」

「せんな。大丈夫だ、ただ少し、扱う魔術の威力が落ちるくらいだな。だが代わりに魔獣を使役する事が出来るのだ。損得で言えば得の方が多かるっ？」

「んー確かに。だけど変わり種？他の魔獣はそんな事しないの？」

「そうだな。人を喰わんどころか関わりを持つとする魔獣など、

我等銀天琥と金天狼の一族のみよ。だから『まぬけ』、もし我等以外の魔獣に出くわしてしまつたら、完膚なきまでに叩き潰すのだぞ？』

『……た、叩き潰す、つて……』

『基本魔獣は歪んだ質の者が多い。青狂鳥や緑石蛇が良い例よ。彼奴等からしてみれば、我等の方こそが異端だからな』

特に灰餓犬の一族には容赦するでないぞ。彼奴が縄張りから出るのは激しい飢餓に襲われた時。理性の欠片も無く、たった1日で人の街を食い荒らすからな。

ぱち、と。

そんなおかーさまの言葉を最後に、目が覚めた。

寝起きの悪いあたしには珍しく、ホントにすっきりパツチリ。

………懐かしい、夢だったんだけど。

なんか内容が、イヤンだった。

ちろん、と時計を見てみたら、5時40分……ををつ目覚ましより早く起きたよ。

ぬーん、と背伸びして、枕元で丸くなつてるメーレをひとつ撫でる。

ソレから、壁際でちっちゃくなって寝てる金髪を起こさない様に、そろーっとベッドを出て。

……仕方ないじゃんベッドひとつしかないんだから。ふとんも一式しかないんだから。

ゆっくりと洗面所に入り、ぱしゃぱしゃと顔を洗ってホツとひと

息。

腕輪から某チヨコボ頭の服を取り出し、ソレを着る。  
そして、洗面所から出たら。

『うゝふあよゝまぬ』

「ん、おはよ」

メーレがのびーってしてました。

その仕草の可愛さに、思わず和んで　　ふ、と。何か引つ  
掛かった。

もしかしたら、あんな夢を見たからかも、知れないけど。

なんか、ミヨーにイヤな予感が、するんだよね。

……まあ、あたしの勘なんてメーレに比べたらゼンゼン当たらない  
んだけど。

ちっちゃく息を吐いて、ベッドへ直行。

見下ろした先には、ぬくぬくと眠ってる金髪。

コイツを買ったあの日から、今まで既に5日経ってる。

その数日の間、どんだけあたしが今までの主と違うか、身にしみ  
て解ったんだろう。だからこそこの緊張感のなさ。

同じテーブルで一緒にごはんを食べて、同じベッドで寝て。

空いた時間は部屋でのーろのーろと荷物の整理しながらダラダラ。

たまーに本屋もしくは図書館に行って、買ったり借りたりした本  
をのほぼーんと読む。

ごはん時以外は部屋から出ずに、のんびりまったり、時間を潰す  
あたしとメーレの傍で。金髪も最初の方こそ所在なさげにしていた  
けど、3日目には慣れてしまったのか、あたしが読み終わって積み  
上げた本を、部屋の端っこで静かーに読む様になった。

まあそんな、慣れたとゆうーよりある意味開き直ったんだか解らない金髪を、あたしは見下ろし。

金髪が頭から被ってるシーツの端をむんずと掴んで。

「そおーいつ、つとー！」

一気に取り上げる！！

「ふうえあっ!?!」

あ。しまった下のシーツまで掴んでたよ。

ベッドの下に転がすつもりなんてなかったの。ゴメンねvv

『……………いやゼツタイわざとだろマヌ……………』

いえいえそんな事はございません事よ？

「っ、なん、何だ!?!」

転がされた金髪は、慌てて上体を起こしながら周りをキョロキョ

ロと見回し。

見下ろすあたしにようやく気付いて、盛大に顔を顰めた。

……………ゴアイサツだな、おい。

「オハヨウ」

『おはよーさーん』

「……………」

ふ、ムシですか。

「オハヨウ」

『……………ま、マヌ、落ち着いて。な?な?』

うふん?あたしはちゃんと落ち着いてるよ?

『……………ぜってえウ……………イヤイヤ何でもゴザイマセン』  
ちよつと気にはなつたがスルーしよう、うん。

「オハヨウ、は？」

「……………オハヨウゴザイマス」

人の寢床半分占領しておいて、ほんつとーにゴアイサツだな、おい。

まあいい。

起きたんなら行動だ。

「おれ今から出掛けるから」

「……………？」

あ、なんか変な顔された……………つて、ああ。もしかして時間？  
ココ数日のダラダラ生活、あたしが起きるのは早くても10時だったもんね。

今の時間はまだ6時。この世界の世間一般では早くない起床時間。寧ろ遅い。そしてあたしが起きるには、早過ぎる。  
だけど今日は起きなきゃならない。何せ今日なのだ。

「闘技大会の会場に行ってくる」

「……………??？」

あれ。なんか余計変な顔されたぞ？

あたしが大会の会場に行くのが、そんなに変？

「……………興味、無かつたんじゃないのか」

まあ確かに興味なんてないけど。

「仕方ない。早めに出て着いておかないと、待合室にすら辿り着け

なさそうだから」

「ドーせ今日も道はあの人間ダンゴに埋め尽くされる。そーなる前に動かなきゃ。」

「……………まぢあい、しつ？」

「今日一日、出場者は全員ソコで待機なんだと。進行速度とか突発的な何かとかで、試合の順番変わるかも知れないからって。しかも破ると負戦敗だったさ」

いやだから何でソコで啞然。

「……………しゅつじょう、しゃ？」

「うん」

あれ、言って……………なかったよね今までマトモな会話ナシングだったんだから。

「……………闘技大会の？」

「うん」

「……………お前魔術師じゃないのか？」

なにゆえ。

「まあ、人より上手い自覚はあるけど。どして？」

「……………オレの狂戦士化を止めただろ。指輪と首輪を経由して、オレの魔力を鎮静化させた」

『え。マ又何時の間にんな事してたんだ？』

うん？いやあたし指輪の石に血い垂らした以外何もしてないんだけど。

そーいやあの時コイツの魔力霧散してたっけ。てゆーかやっぱり狂気化だったのね。しかもバーサークって。

「……………ソレには、狂戦士化に費やした以上の魔力で抑え込まないと

いけない。オレは魔族としては魔力が少ない方だが、ソレでも普通の人間よりはある。そのオレの狂戦士化に気付き魔力を抑え込んだお前が、魔術師じゃないというのか」

うげ。

もしかしてアレ、そんなに高度な魔術だったの？

「……………俺知ーらね」

あたしも知らんかったわ。

そして金髪の胡乱な目が痛いイタイ。

「……………魔術だけで渡っていけるホド、世の中甘くはないんだよ」

ヒラヒラと手を振りながら、ベッドの下に隠れてるカゴを引っ張り出す……………何かあった時の為に、腕輪に収納せずに置いといたふた振りの刀がこの中だからだ。

そして、あたしが手にした細長い得物を見た金髪は、変なモノを見た、とでも言う様に目を丸くした。

「……………棒？」

「……………棒、つて……………」

……………いや確かに見た目棒つきれだけどさ……………コレってばどっかの神社に奉納されてる御神刀みたく鍔が無いし……………でもせめて杖とかさ……………

「いんや、刀つての。分類としては、片手剣、かな」

きん、と。腰に差した刀を少しだけ、抜く。

現れた白銀の刃に、金髪の目は更に丸くなって。

「……………剣……………」

「まあ、とゆるワケで。留守番宜しく」

「え？」

「朝と昼はライラさんに頼んどく。多分夕方まで戻って来ないから」  
「待つ……………!!」

ひらん、と手を振りながら部屋を出ようとしたら、くん、っと引  
つ張られた……………何が。腰布が。

振り返って視線を落してみれば案の定。布を掴む青白い手。

「なに？」

「……………あ……………」

……………自分で引き留めとして何でそんなうろたえてんの。

「……………その……………留守番？」

「そだよ」

ソレ以外の何をしると。

「……………一緒に行くのは、駄目なのか？」

……………はい？

着いてって何すんのアンタ。チケットも無いのに。てゆうか奴隷  
つて入れんのメーレ？

『や。俺に聞かれても』

でーすーよーねー。

「……………確か、パーティーの仲間などは、共に控えに入れた筈、な  
んだが」

ぐっ、そ、ソコで上目遣い……………!!

何だコイツ良く見ればカワイイじゃないかバリタチないケメンの  
クセに!!

『マヌ、マヌ。出てる。モーソー出てる』

いやだってメーレ!!ココで出さずに何時出せと!?

「……………駄目、か？」

ぐはっっ!!くりていかるひいっ!!!!

お前ツンじゃないのかデレなのかそんなに襲ってほしーのか！！

『……あーハイハイちよつと落ち着こうなマヌー』  
ぐわっ。

あうちっつ！？

てめこらメーレっつ、今思いつきり爪立てたっしょ！？

『何の事ー？つてゆーかほらほらマヌ。金髪が返事待ってんぞー？』  
うむぐ……後で覚えてるよ。

ちろん、と視線を落としたら……うをう、じーつと見られてる見られてる。

……見るなあたし。コレ以上見るなあたし。視線を逸らせ。コレ以上メーレに爪を立てられない為に！！

「……ちなみに、何で着いてきたいの」

「……興味がある」

「大会に？」

「戦いは好きだ……その剣、にも……興味が、ある」

ソレは観戦が好きなのかソレとも自分も混ざりたい派なのか。

「あー……妖魔族も剣を使うの？」

「……其々だ。徒手で戦う者もいれば、魔導を得意とする者もいる……オレの得手は、剣だ」

え。じゃあコイツ剣士なのか。

あー、だったら。大会見たい、つてのも。解らない、でもない、かも。

「……………一緒に行きたい？」  
「行きたい」

……………そ、即答。

ただだからそんな捨てられそうな仔犬みたいな目で見ないでえええ。

『どーすんだマヌ？』

そしてメーレお前はそ爪しまいなさいっ！！

……………でもコイツを人がたつくさんいるトコに連れてくのはな

あ……………

うーん……………とりあえずー、は。

「……………カゴん中に、タートルネック、襟の高いの入ってるっしょ。

ソレ一番下に着て、紋様と首輪見えない様にして」

「……………この、黒いのか？」

「うんソレ。あと帽子被って耳隠してもらっから」

「……………解った」

あたしの言葉に、何を感じたのか。だけど文句も言わず金髪は赤香色のシャツを脱いで、あたしが部屋着として何枚か出しておいた黒のタートルネックに手を伸ばす。

心なし、嬉しそうに見えるのは気の所為か。

そんな金髪を横目に見ながら。

コイツをホントに会場の中入れて、あたしが大丈夫なのかしら、なんて思っのだった。

～・～・～・～

あたしは甘かった。

宿の近くはそーでもなかったけど、会場になる闘技場に近付くにつれて増えていく人、ひと、ひと。

一般の席はみんな自由席だからって、誰よりも早くいい席を取ろうと朝っぱらから開場時間を待ち侘びる人の群れ。

……確かおっさんもおねーサマもアニマルカルテットも入場券は持つてるって言ってたから、きつとこの人の波のどっかにいるんだろう。

そんな事をゲッソリしながら考えて、ぎゅーぎゅー押される中を何とか掻き分け前へと進む。

そして途中で脇道に逸れて、ほんの少し……入場口向こうなのにホントーにほんの少ししか減ってない、関係者専用の裏口に辿り着く。

ココで1回深呼吸。人の波に揉まれて崩れた身だしなみを整え、被ってた帽子を再び目深に被って。

ちなみに、被ってるのはつばのある円筒形のニット帽、オスローハット、なるモノ。服と同色。被ってる理由は、ちよつとでも顔を隠す為、だったり。

ついでに言えば、何故か荒事時はこの某チヨコボ頭な服が定着しつつありますが。気にしないでおこつ。

ちろん、と横に目をやると、金髪もおんなじ様に、ウンザリした顔で帽子を被り直してた。コイツの帽子も上着の色と合わせた耳当

て着きのオスローハットで、上手い具合にあの尖った耳が隠れてる。ソレを見届け、次にあたしは立ってる赤っぱい鎧の兵士さんに声を掛ける事にした。

うぬ、ナイスミドルのオジサマだ。ちょっと筋肉隆々だけど。こーゆー人が華奢な美少女風に押し倒されるっつのもげふごふんっつ。『マヌ。お前今何考えた？』

……。イエイエ何デモ。だからその爪しまっつてえ。

「す、すいませーん。今日の試合に出場予定の者なんですけどー」

「ん？ああ、本戦参加者だな。エントリーの番号札は持ってるか？」

「はい、コレですよね？」

ぴらん、とポーチに手を突っ込んで出したのはあの悪魔の数字入りのカード。

ソレを見て、赤い兵士さんは近くにいた茶色い兵士さんからリストっぱいのを受け取って、ペラペラ捲り……

「そうか。君が、噂の『至 strongest の低ランカー』か」

何その噂って。てゆーか何その至 strongest の低ランカーって。

思わず金髪と顔を見合せてしまった。金髪の方も、ワケが解らずあたしを訝しげに見るばかりだ。

「君だろう？バルグを倒したというのは。アイツとは旧知の仲でね。Aランカーを倒したGランカーがいると、私達騎士団の中でも話題に上がっているよ」

騎士団……！

コレまたファンタジーには王道の単語が出てきた……！

てかこの人騎士の人？ふつーの兵士さんじゃなくっ？  
何でそんな人がこんなトコで手続きなんてしてんの！？

「ソレで、君の後ろにいるのは仲間かい？1人かな？」

「は、はあ、まあ。1人です」

「そうか、知っているとは思うが、出場者と共に会場裏に入る事が出来る付添い人は4人までだ。後から通行証の発行は出来ないぞ。本当に彼の他にはいないのかい？」

「あら、4人？そんな多くても大丈夫なの？」

「いません。連れは彼1人です」

「そうか。ではコレが同行者用の入場許可証だ。首から下げる様にな。出場者である君はコッチ。カードの裏にエントリー番号を入れてくれ」

手渡されたのは……えー、なんか地球でも良く見た事ある、首から下げるカードケース。

言われた様に、黄色いのが入ったのを金髪に渡し、あたしは赤いのが入ったソレにエントリー札を入れて首から下げる。

ソレを見てうぬと頷いた騎士さんは、にっかり笑って

「今年の無差別級にはウチの若いのも1人出るんだが、もし当たっても遠慮無く叩き潰しに来てくれて構わないからね」

「……はあ」

「いーのか？マヌだったらホントにツブせるぞ？」

「いやいやメーレ。ツブしませんしツブせませんから。」

「君の試合を楽しみにしているよ。頑張ってくれ」

「……………どうも」

へこり、頭を下げて裏口を潜る。

中はやっぱり人がたくさんいた。まあ外よりゼンゼン少ないけど。

みんな忙しそうにバタバタしてる。

……………そして金髪。視線痛いんですが。

「言いたい事があるなら言いなよ」

じー、っと。穴開きそうなくらいあたしを見てた金髪は。ほんの少し考える素振りを見せた。

そして。

「……………お前、Gランカー？」

……………まあ確かに、最低位のランカーが本戦出場なんて、ふつーは無いよね。

「ずっと森にいたからね。実は街に来るのもココが初めてだったりするんだよ」

あ。ナニその驚いた様な顔は。

「……………お前、本当に何者だ？」

ナニモノ、って言われても、ねえ？

「タダの歌えて踊れて戦える旅人さんだよ」

「……………」

「……………いや確かにマヌの歌も踊りも上手いけどさー……………」

……………」

あ。痛いイタイいたい。その白々しい視線が痛いわっつ。しかも何メートルまでそのジト目はっつ。

〕……………〕

「誠に申し訳ありませんが、大会は無期限延期となりました」

闘技場の内部、ちょっとした広さの部屋の中。

あたしと同じ様に集まった出場者達の前、出てきた大会執行役員みたいな人が、開口一発そう言った。

途端、ザワリとざわめく出場者達。あたしもイキナリの事に開いた口があんぐりだ。

「ど、どういう事だっ?」

そんな中、役員さんに1番近いトコにいた、赤毛の戦士が声を上げる。

役員さんは彼を見て、それからくるりと他の人達を見て……鎮痛そうに、口を開いた。

「先程、当国の情報部から、報告が入りました」

情報部……こんなふあんたじーな世界でもあんのかそんなんが。

「シユトラの森方面より、グレイドッグの群れがシユリスタリア付近に移動中との事です……その規模、凡そ準S級」

絶句。

役員さんの言葉を聞いた誰もが、そんな感じになった。

てゆーか、準S級ってナニ。

「……………そ、それは、まさか……………キングが、いるって事か?」  
ウサギの耳つけた齧ついおっさんが、聞く。その声は掠れてた。

「……定かではありませんが……恐らく、番いであるかと  
あ。今度は沈黙だ。」

「じよ、冗談だろ！？準S級の群れに、番いだと！？」  
「クイーンまでいんのか！？」

とか思ったら、イキナリドツと騒ぎ出した。

『……………なあマヌ。じゅんえすきゅうって何だ？』  
知るワケないじゃんあたしが。

『じゃあキングとクイーンって？』  
だから。あたしが知るワケないって。

「……………金髪。準S級ってナニ」

「……………お前知らな……………いや、等級に準が付くのは魔物が群  
れで行動していた場合だ。規模としては、グレイドッグの場合10  
体程の小規模ならC。準S級は……………およそ数百」  
げっ。そんなでっかい群れがあんの。

『じゃあじゃあ、キングとクイーンって？』

メーレそんな無邪気そうに聞かないで。すごいイヤんな予感し  
かしないのに。

「……………因みに、キングとクイーンって？」

「……………グレイドッグは魔獣の眷属だと言われている。しか  
も、とても厄介な魔獣のだ」

うん。予感が確信に変わりそうだ。

「……………まさか灰餓犬とか、言わないよね？」

「……………」

何その無言！？そして何故視線逸らすの！？当たり前なの！？ねえ

当たりなの！？

「正規軍は既に編成を終え、討伐の為進軍致しました。正騎士団、並びに魔術部隊の準備ももう間も無く整います」

ココソとあたしが金髪と話してる間にも、役員さんの声は続く。「ランカーの皆様にはコレより、グレイドッグ討伐隊に是非とも参加して頂きたく存じます」

ま。そらそーですな。

ココにいるのは流石本戦に出場するっただけあって、かなり腕の立つ人達ばかりだ。

何百つていう数の魔物が押し寄せてくる。そんな時に、悠長に腕試しなんてやってる間なんてありやしない。

「……け、けど、キングなんて」

「か、かないっこねえよ！」

だけど皆さん及び腰。

……確かに、ね。魔獣なんて災害級、相手にしたいなんて思うのはドコの酔狂モノだ。あたしだってやりたくない。

まあ、でも。

「仕方、ないかなあ」

「だなー」

だからって、街を見捨てるワケにもいかんでしょー。

今朝の夢、きつとコレの事指してたんだろーなー。

ココにはライラさんもりチアちゃんも、トマさんだっているし。

グランさんだって、利益を追求する商売人にはあり得ないくらい、バカ正直なイイ人だ。

あたしはちっさく息を吐く。  
そして、ぴ、っと手を上げた。

「質問いーですか？」

「はい」

「ドコで迎え討つんですか？」

「リュリスタリアの東門、直ぐ開けた平地で陣を組む予定です」  
速攻で返事が返ってきた。

「って、街の直ぐ真ん前じゃねえか！！」

「……………仕方が無いのです。魔物の群れは、このままいけば明日の早朝にもシュリスタリアに到達してしまいます。準備を十全にするだけの時間も無く、陣を敷いて迎え討つに適した場所も、あそこ以外に無いのです」

誰かの叫んだ言葉に、役人さんは鎮痛な面持ちで説明を付け足す。  
てゆうーか、明日の早朝って。ホント早いな。

何で、そんなに近付かれるまで、誰も気付かなかったんだろ？

数百単位の魔物の群れ、なんて。移動するだけでもすごい目立つだろうに。

……………ま、いつか。終わり良ければ全てヨシ。その魔物の群れを潰しさえしてしまえば、問題ナイ。

あ、そだ。

「もひとつ、質問」

「はい、何でしょう？」

「おれらランカーはスタンドプレイでイイの？ソレとも誰かの指示

に従うの？」

「ソレは俺から話させてもらおうか」

役員さんに向いていた、あたし達の後ろから、声が飛んできた。

しかも何かどっかで聞いた事のある声だ。

「うーわー、とか思いながら振り向く。

しかして、ソコにいたのは。

「イキナリで悪いとは思うが、アンタ等は取り敢えず俺に着いて来てくれや」

コワモテさんと、銀髪の褐色美人さん（しかもウサ耳付き!!!）を引き連れた、あたしの近付いちゃいけない人ランキングのナンバーワン。

『黄昏の鋼』 団長、ゲイザー・シアーズ、その人だった。

19・やらなきゃいけない時くらいあたしだって解ってるっての

夜が明ける。

空がゆるやかに白く染まっていき、そして徐々に鮮やかな青に移り変わっていく。

ひそひそがやがや。興奮と緊張を孕んでじっと時を待つ戦士達。

兵やランカーは、全ての門に配置された。その中でも最も多いのが、魔物達が現れるであろう森を正面に据える、この東門。

1番の激戦予定地だ。ソレ故に、腕の立つランカーや騎士が多い。

「B以上のランカーは前に出て魔物の数を減らす。ソレ以外のヤツ等は、俺等が獲り零した魔物の掃除だ。良いか、必ず複数で確実に息の根を止める。間違ってもバリケード突破させんじゃねえ」

その中でも左翼に展開する事になったランカー達の前で。お兄さんがキビキビと言いつつ。

殆んどのランカーは血の気が多くて何でお前の言う事聞かにならんのだ、ってなつてたけど。お兄さんが『黄昏の鋼』団長さんって聞いて沈黙した。

何でもお兄さん、パーティでロックドラゴンってのを倒した事のある、世界でたった2人しかいないっていうSSランカーだそうぞ。そりゃあ逆らえんわな。

……………てゆうかあたしGランクなんだけど。何だって前衛組に

組み込まれてるんですか。

『仕方ないんじゃないかね？マヌだし』  
いやだから何故。

「よう！色男！」

うをう？

すっこーん、て後頭部に当たるくらいおっきな声に、あたしは後ろを振り返った。

隣にいた金髪も、眉をひそめてあたしに倣う。

「……………誰だ？」

「……………あー、おれが予選で負かしたAランカー」

「……………A？」

だかだかと近付いてくるおっさんを見ながら、こそっと金髪に言う。  
つて。

「お前もココの配属になったんか」

「……………そーゆーおっさんも？」

「おっさ……………止めてくれよ俺ぁコレでもまだ27だぞ？」

うん。んな事言われても見た目が熊だから解らんし20過ぎたら子供にとったらみんなおっさんおばちゃんだ。

「まあ、何かあったら宜しく頼むぜ？」

トコロでそっちは

色男のお仲間か？」

「いんや、奴隷」

『ついこないだ買ったんだよなー』

「そっか奴隷かー……………は？」

あら。おっさん何故固まるのかしら？

「いやいやいや。女なら解るが何故に男を」

「んー、なりゆき？」

『しょうどー？』

そして何故そんな呆れた顔であたしを見る。

ソレから金髪。お前はそんなこれ見よがしに溜息吐くな。

「……………まあ、色男がソツチもイけるなんざ俺にや関係ねえが。何でんなトコにまで奴隷連れて来てんだ？」

ちよつと待てソツチもイけるって何。確かにイけるけど。

ってゆーかそーよね。コイツココにいたって邪魔よね。ついこないだまで重傷人だったし。

「金髪。お前宿に戻っててイイよ？」

ちろん、と後ろを見やる。

「……………いや、一緒にいる」

「……………お前病み上がりっしょ？」

ココがドコで今から何するか。尚且つ敵の規模なんかも、大バカでも無い限り把握してるハズ。

なのに一緒にいる？

お前ついこないだまでボロボロだったの忘れたの？

ココ数日でマトモな食生活になったからって、今もまだ骨が浮きそうなくらいに細いの。

「……………戦える」

「得物は？確か剣だったよね？」

「戦える」

うわあ。言い切ったコイツ。

「何だ、お前戦奴か……って、ホントに何でこいつ買ったんだ色男？お前そもそも強えからいらねんじゃね？」

だから成り行きって言うてるでしょーに。」

「まあ、剣が使えるって知ったのは買った後だけだ。いんじゃない？1人で出来る事にも限度ってのがあるし」

「……前から思ってたがお前けっこー能天気だよなあ」  
む。そんな事ないよコレでもイロイロ考えてんだよ？

『すぐメンドくせーって投げるけどなー』

そしてメーレお前はイチイチ一言多い。

「けどよ、戦奴なのに何の装備も武器もねえってのはどーなんよ」

そうは言うけどね。金髪が着てるのはあたしの練成した服だ。普段着用だから付加は付けてないけど、あたしの魔力が籠ってる分下手な防具よりは頑丈よ？

まあでも、武器が無いのは確かにアレですな。

「……………無手でも、ある程度は戦える」

おいおい。コイツホントに戦う気満々だな。

『コイツバトルマニアっぽいからなあ。止めても無駄だと思っぞマ又？』

……………みたいですねー。

「……………剣って、何使ってた？ロング？ショート？幅広のバスタ

ー？」

「……………お前の、腰にあるのと同じくらいの長さの、普通の片手剣だ」

「ふうん」

なら、アレかしら。

右手をポーチに突っ込んで、腕輪を発動させる。  
そして、ずるりと引き出したのは、サーベルみたいな柄に蒼い刀身の、一本の剣。

某ゲームであたしが良く主人公に持たせてた武器ソノイチだ。S・A・B・Cある4段階ランクのウチの、Aランク。

おっさんと金髪が息を呑んだ。まあ解らなくもない。  
あたしはぺいっと、その剣を金髪に投げた。

「アンビシオン。貸してあげる」

「……………っ」

慌てて抱き抱えた金髪に、ふ、と笑い。

「ポーチ型のワンダーバッグなんざ初めて見たぞおい。ドロで買ったんだ？」

「きぎよーひみつです」

自分で作ったなんて言いませんよ、ええ。

「伝令！！シユトラの森より敵影を目視で確認！！各自戦闘に備えよ！！繰り返す！！」

……………っど。

とつとつ、来たみたいだ。

伝令役らしい兵士さんが叫びながら走って行くのを横目に、おっさんや金髪、他のランカー達の顔つきも変わった。

緊張が膨れ上がる。ざわめきが、静かに凪いでいく。

今からココは、戦場になる。

『……………なあ、マヌ』

うん？何だいメーレ。

『……準S級、つてさ。数百匹くらいって、言ってた、よな？』  
うん。らしーですが。

『どー見繕っても千以上いんぞ？』

「はああ！？！？」

思わずぐりんっ！！と森を見た。

大声上げたあたしに、おっさん金髪含む、周囲のみんながビツクリする。

そんなのを無視して、最前線中の最前線、ランカーの列から走ってポツと数歩抜け出した。

「よお！！どーしたよマヌ！？」

聞こえてたらしい、お兄さんからの声に、ただどあたしは森を凝視したまま。

……………うん。ホントにいるよ千以上。

まさかコレってアレか！？ゲームに良くある！！

「お兄さんヤバい！！おれ等目測誤った！！」

「ああ！？何の目測だ！！」

「数百じゃない！！軽く千超えてる！！チエーンだ！！」

「はあ！？千！？つかチエーンって何だ！？」

「狂った魔物に他の魔物が触発されて一緒に暴走する現象の事だよ！！」

「んな！？」

怒鳴り合うあたし達の目の前で、森の中を蠢いてた影が徐々に輪郭を形作っていく。

その中には、話にあったグレイドッグだけじゃなく。

「……オーガにダグベア……」

「……ベクトスまでいやがる……」

「……ジーザス……」

戦々恐々。そんな感じの音が、そこかしこから上がった。

……ヤバい。中にはパーティでAランク、つまり単体でSランクなヤツもいる。

そんな、中。

「引くな！！怯むな！！恐れるな！！」

びいん、と。とても良く通る声が木霊した。

「誇り高きファルガスの戦士達よ！！自由を愛する気高き冒険者達よ！！今こそその武勇を振るい見せ付ける時！！」

振り向けば。陣を組んだ隊列よりも一歩前へ出て。白い馬に跨りスラリと剣を天へ抜き放つ、赤銅色の鎧姿。

「見誤るな！！たかが千！！獣如き、常に己を鍛え続けて来た我等の敵では無い！！」

ソレはまるで英雄だ。

おとぎ話の中に出てくる、人々を纏め導いて、苦難を乗り越える。誰もが彼の姿に目を向けた。真っ直ぐ前を見据え、皆を鼓舞する様は、正しく。

「勝利は我等の手にある！！ 全軍、前進 ！！」

『雄雄雄雄雄雄雄雄雄雄雄雄雄雄！！！！』

掲げられた剣が振り下ろされる。

同時に起こった鬨の声は、大地を震わせた。

）．．．）．．．）

ドレだけ時間が経ったんだろう。

あたしは魔物を斬って斬って斬りまくってた。

ざしゃあ、と。縦真つ二つに割られた緑の巨人が、崩れ落ちる。

あたしはそのまま瞬時にバックステップして、背後から飛び掛かってきた犬モドキを、振り向きざまに薙ぎ倒し。

『マヌ！次うしろだ！！』

「おうさー！！」

再び軸足でくるりん、下段から袈裟掛けに刀を振り上げる！！

「おい色男！！突出すんな！！困まれんぞ！？」

後ろからおっさんの声がして、噛み付こうと迫ってきた角付き兎（確かボーンラビットとかって名前だった）を2匹いっぺんに切り捨てながら振り向けば、前衛部隊からは悠に10数メートル離れた。

をを。お兄さんもコワモテさんもサスガ。

あの赤銅鎧もナカナカ……でも何と王子様らしい。いーのか一国の王子がこんな最前線に出て。

意外といえば意外なのかな。金髪がSクラスの魔物とタイマン張れるくらい戦えるとは思ってもみなかったけど。

「……ちっ、やっぱり多いね」

小物大物含め、魔物はまだまだ森から出てくる。  
ランカーさん達も兵士さん達も善戦してるけど、こりゃあちよっ  
と、ヤバい。

魔物はどいつもコイツも、狂気に侵された濁った赤い目だ。元々  
本能で生きてるのに更にそんな感じだから、足吹っ飛ばされようが  
目貫かれようがお構いなしで向かってくる。

痛みも死も恐れない。そんなの相手にしてたら、疲労が溜まる。  
通常よりも早く精神的に。

しかもまだまだ湧いて出てくる。押し寄せてくる津波みたく。  
そんな魔物の群れに向かう戦士達は、いつか吞まれて崩れる防波  
堤、にしか見えない。

その津波を止めるには？

もっ和高くて強い壁がいる。

『うげっ！マヌっ、厄介なのがいる！！あのでっけーサイもどき！  
！赤鎧んトコ！！』  
ぬぁんですと！？

ざんっ！！と、もじゃもじゃな半人半馬もどきを叩き斬って、ぐ  
るんつと振り返って見れば、ソコにいたのは鈍色な軽4トラックく  
らいのでかさのサイもどき。

……アイツ動きは鈍いけど皮が鉄並に硬くて魔法も効き難いんだ  
よねっ！！

そのお陰でホントにトラックどころかブルドーザーみたく目の  
前のモン押し潰してすんだよねっ！！

襲つて来た緑のでっかい鶏もどきを切り捨て、特攻。  
駆け抜けざまに数匹の魔物を蹴り倒し吹き飛ばしながら、刀を下  
段に構え……ええいつ、うざっ！！飛び付くな駄犬！！  
掛かって来た犬もどきの牙を、咄嗟に刀で受け止め

ばきんっ。

『あっ！！！』

げっ折れた！！

「おい！？」

「っ危ない！！」

金髪の焦った声と、王子サマの声に、あたしは瞬時に折れた刀を  
『鞘』でなく『腕輪』に戻し。

「……………伏虎、」

『うげげっ？』

四方八方から、飛び付いて来ようとする魔物ドモ。

メーレが慌ててあたしの肩から胸元、服の中に無理矢理入る。

あたしは気にせず、ほんの少し腰を落として。

その体制から、『違う』柄を掴んで薙ぎ振るう！！

「跳撃！！」

剣の重みを利用して、風圧作って浮かせた上に魔物達を斬り付け  
る。何度も何度も、あたし中心に円を描きながら。

某チヨコボ頭の大剣に、某死の恐怖の技だ。さて効果は如何程か  
っ！？

斬られた魔物達は小さくなっていく。前脚を飛ばし、首を飛ばし、

胸を飛ばして尻尾まで斬られて。

見事に細切れにしてくれました!!

一通り振り回して地面に着地した時には、あたしを中心に丸く赤い残骸がばら撒かれて。

うわっ自分でやっつといて何だけどすっごい悲惨!!でも気にしない!!

『ちょっとは抑えてくれよマヌ!!俺落ちるかと思ったじゃんか!!』

「はっはっはっ気にするな」

『気にしろって!!』

さあて獲物はまだまだいます。ターゲットろつくおん!!まずはあのデカい凶体!!

ぐるん、と大剣を頭の上で回し、ギチリと構え

「秘奥儀!!」

地面を蹴る。邪魔が入る前に切迫。気付いてのろりとコチラに向こうとする巨体。けど、遅い!!

「重・装・甲・破あ!!」

頭上に飛び上がって、空中から剣を連続で叩き着けた!!

「オマケだっ!!貫け光いい!!」

『ちよっ待てソレオマケじゃねえだろおおっ!!?』

地面に減り込んだサイもどきの足元、巨体をすっぽり包むくらいの白い魔方陣が浮かんだ。

と同時に、8本もの光の槍がサイもどきを囲み刺し貫く!!

「ギユウウウウアアアアアアアア!!」

断末魔。

光の槍に、地面に縫い付けられたサイもどきは、しばらくごうごう  
ごと蠢き 完全沈黙。

「よっし次い!!」

「次い!!じゃねーよ!!最上級魔術がオマケってナニ!?!てゆー  
か魔法使わないってゆってたじゃんマヌ!!」

「コト今回のコレに関しては出し惜しみしない事に決めた!!」

いくらあたしが事なかれ主義の平和主義者だからって、コレはダ  
メ。絶対。

ライラさんもりチアちゃんも、トマさん串焼きのおっちゃん果物  
屋のおばちゃん。

みんなみんな、死んで欲しくない。

ソレにイメージだけで詠唱も『力有る呪』もナシの低威力バージ  
ョンだからあんなのオマケでじゅーぶんだっ!!

『ひ、開き直った!?!』

ニヤリとメーレに意地悪く笑いながら、あたしはダッシュ。  
目指すのは、出来るだけ人から離れたトコロ、だっ。

飛び掛かってくる魔物ドモを蹴倒し切り捨て半径50メートル内  
は誰もいないトコまで。

「おっ、おいお前!?!」

「ソコのランカー!!戻れ!!」

「孤立するぞ!?!」

あたしはその孤立を狙ってんのさ!!

ざしゅっ、と噛み付きに来た駄犬の首を落とす、右手をポーチに突っ込む。

そして取り出したのはひとつの小瓶！！

『げっソレっ』

メーレが何か顔からザアツと血の気引かせた様な気がしたけど無視だムシ。

使う気は無かったけど使わせてもらおうあたし特製ダークボトル！！

きゅっ、と歯で蓋を取ってぶちまける。

同時に掛かって来た兎もどきを胴体真っ二つにして。

あたしの周りにきらきらと、黒い粒子が舞う。

その匂いだか何だかに惹かれて、その場にいた全ての魔物達があたしに向いた。

……………うんやっぱり使わなきゃ良かったかも！！

だけどコレで他の人達が相手にする魔物は減るでせう！！

飛び掛かってくる魔物共を切り倒し薙ぎ倒し　ああもうっ、

滅多に使わない大剣ってやりづらいな！！

しかも何かすっごいイヤな気配！！森の中からコツチに近付いて来てる！！

もう直ぐ、来る！！

使い難い大剣を一旦腕輪に戻し、左足を軸に、新しい『柄』を掴みながらぐるん、一回転。

そして、遠心力にモノ言わせて新しく出した『ソレ』を投げ付けた！！

すぱぱぱんつつ！！とイキオイ良く飛んでいくソレに、憐れ見事に断ち割られていく魔物達。

そしてギュルンとブーメランみたく手元に戻って来たソレを危な気なく受け止めて、ちきり、円を描いて構えてみせた。

うふふ。一度使ってみたかったのよね。某日輪大好きなオクラ様の輪刀。

思った以上に広範囲殲滅と相性がいいわ。これでサクサク行くわよつつ。

『悦入ってるバアイじゃねーぞマヌ！火が来る！！』

「っ！ 集え、水！！」

メーレの言葉に、あたしは咄嗟に目の前に魔法陣を展開、周囲の大気を水へと変え。

瞬間。

じゅうつつ！！と大量の水が蒸発。

飛んで来たのは火炎の塊。飛んできた先は

森！！

「……ハラ、ヘッタ……」

「……ヘッタ、ヘッタゾ、ハラガ……」

「……エサハドコダハラガヘッタゾヘッタゾハラガハラガヘッタハラガハラグワアアアアアアア！！」

咆哮。

耳障りな。

生理的嫌悪感を催す。

ネット付く様な。

「……うーわーあ……」

「……………いいカンジにイっちゃってんなあ……………」

メーレと2人（？）、揃って盛大に顔をしかめる。

のそり、と木の陰から出てくる脚。随分と汚れた、みすぼらしい灰色。

その足でぐしゃりと逃げる犬を潰して、喰らい付く大きな口。

「……………魔獣、だ……………」

「……………魔獣が出た……………灰餓犬だ……………」

「魔獣だ！！魔獣が出たぞ……………！！」

気付いた誰かの悲鳴にも似た叫びは。

人々に僅かに残っていた平常心を木っ端微塵に吹き飛ばし、恐怖へと追い込んだ。

20・誰だって大事なモノが壊されたりなんかしたら怒ると思う

顔が引き攣つても仕方ないと思う。

魔獣つて、魔獣……うん、ふっーは、アレが魔獣なんだろーなあ。イイ感じ、どころかカーナーリ、イっちゃってるんですけど。

アレ無理。近付きたくない。

見れば王子サマも騎士も兵士もランカーもみんなみんな、瘡氣というか邪氣というかに押されてる。

しかも見た目すっごいインパクト。

おカーさまよりデカイんじゃないかなーか。5メートルは悠に超えてるよ多分。

なのにはばっちくてガリガリで、なっがい爪に紅い4つの目がコッチを見てる。あ、2匹だから8個か。

本能を手放して狂った魔物達すら恐怖に呑み込まれて動けなくなるホド、威圧はドス黒くて重い。

しかも1匹の魔力がかなりヤバいんだけど。

あたしの魔力のみを糧にして全力を出せない『今の』メーレじや勝てないし、封印のピアスを着けまくった『今の』あたしでも確実に下回る。

ついでにこの世界、魔術師の数は限られてる上に戦闘で使えるのはほんの一握り。

しかも威力が高ければ高いホド、媒介は複雑怪奇で時間が掛かる

から、魔術部隊の皆さんがデカイのブチ込むまでに前衛さん達が時間稼げなかったら、その時点でゲームアウトだ。  
そしてそもそも、この北門に魔術部隊は配置されてない。

『けどマヌ、コトアイツに限っては、時間稼ぎ出来たとしてもアウトだぞ』

え。何で。

『アイツ魔術も食うんだよ。属性取っ払って魔力だけにして。そーゆー特質持ちなんだ。だから効かねえドロコかパワーアップすんの』  
……………なんて悪食。

『しかも魔獣つて、俺等も含めて毛皮に魔力帯びんのがデフォだからさ。ふつーの武器じゃ傷も付かねえぞ』

……………おかーさま。どーやってそんなのを完膚なきまでに叩き潰せと。

1匹だけならどーにか、手数が多さにモノ言わせてボコリまくれば何とかなっただかもしれない。

だけど目の前の、視界に入れたくもないのに無理矢理入ってくる巨体は2匹。

これは詰みですかそーですか。

「……………むっ、無理だあんなヤツ……………」

恐々とした兵士さんの声が震える。

確か魔獣はSランクを軽く超えて、最上級のSSSだっけ。

自然災害とおんなじレベル。確かにふつーの人ならそーなる。どーやって人に止めると。

「……………ちっ、甘く見ていたな」

思わずゲッソリしてたら、近くで苦々しい舌打ちが聞こえた。

って王子さま、何時の間にこんな近くに。下がらなくていいの相手は魔獣よ？

って言っても聞く耳なさげだから言わないけど。代わりに。

「増援ってさ。望める？」

「……ああ、さっき伝令を走らせた。直に父上の白光騎士団と母上の魔術部隊が来る筈だ……だが、ソレまで我等が保つか如何か……」

ふぬ。援軍要請は済み、っと。

「……… 1匹だけなら、何とか足止め出来る？」

「……… まあ、此方の被害も大きいだろうが、恐らくは。だが2匹同時となると、無理だな」

うーん。やっぱり数の暴力でも2匹は無理か。

なら、やっぱり。こーなったら、気は進まないけど。

「……… 解った、1匹はおれが止める」

「……… は？」

ばっ！！とあたしを見た王子様の視線がイタイ。

突っ込まないでもうソレ以上はお願いあたしコレでもノミの心臓なんです。

「ちょ、待て、おま」

「初っ端から全力で……行かせてもらっよ！！」

飛び出す。

ターゲットは右側のデカ犬。

釣られて動き出した小物共には目もくれず、ただただ一直線に。

「っ、無謀だ!!」

「コワモテさんの咎める様な声がしたけど無視だムシ!!」

「喰らいな!!」

「無数の火炎の球を生み出して、一気に、喉ける!!」

『って、うをいま又っ!?!』

「だいじょーぶ!!ちゃんと考えてる!!」

「取り敢えずまずは1対1の状況に持つてくのが先決よっ!!」

「この程度で倒れるなんて思っちゃいけないがけっこーな目晦ましに  
はなるっしょ!!」

「そして透かさず走りながらブン!!と思いつきり輪刀を投げ付ける。  
弧を描く刃は、デカ犬の首目掛けて飛んで行く。」

「ついでにコレでその首切り落とせば尚良し!!」

「……………と、思ったけど。」

「ばくん!!と1番最初に着弾しそうだった火炎球を食べられた。」

「やっぱ食べられた!!」

「その後ドゴンガゴン!!て他の球が着弾したけど、デカ犬は毛の  
1本すら燃える事なく。」

「もうもつと上がる爆煙。ソレを斬る様に、輪刀が突っ込む!!」

「がぎいん!!」

『止められた!!』

「予想範囲内!!」

「そして、まだまだだ!!」

「降り注げ!!」

「突っ込んでこうとした脚を急停止。」

大気中の水分を幾重もの針状の氷にし、広範囲に降り注がせる！！  
オマケだ！！コレで終わると思うなよ！？

「絡め取れ！！」

地表を鳶の様に這う氷が、コツチに突進してこようとしたデカ犬の足を凍らせ地面に縫い付けた。  
しばらくソコ動くな駄犬！！

止めていた脚を再び動かす。凍った足にもがく、近い方のデカ犬目掛けて、新たに出した大鎌を振り上げる。

降ろす先は、太い頸！！

「グルアアアアアアア！！」

「っ！？降りろ！！」

光の盾構築間一髪！！

つか火い吐くのかコイツ！！ってそーいや初っ端から火の球投げて来たっけ！！

てゆーか縄張りでもないクセにこの威力ってどんだけ！！  
しかもバキン！！って、ああっ、氷砕けた！！

「つくうっ！！」

「マヌ！！」

振り上げられた爪が、豆腐でも切るみたいにサククリと光の盾を引き裂く。

仰け反らせた頭。前髪が何本か舞い。顎のスレスレに鋭い軌跡が通って。

大きくバク転、更にバックステップで大きく距離を取った。

さつきチクチク氷で刺されてたデカ犬は、ぎろん、とあたしに目を向ける。

………うつわ。間近で見たらホントに生理的嫌悪感。  
おんなじ魔獣なのに何故メーレとこーも違う。

『ま、まぬ………』

んあ？何さメーレ。

『………あ、あのな………』

だから何っ。ちやちやっと言つてっ。

『お、落ち着いて、聞いてくれよ？』

だからっ、何がよ!？

『か、髪と目、く、黒に、戻って、んだ、けど？』

………え？

ぱ。胸元に手を当てた。

ぱたぱた。

………うん。破れてる。

更にはたぱた、ぱた。

………うん。ネックレス無くなってるよ。

ぎぎい。辺りを見回してみた。

魔物はどーだか解んないが、王子サマやお兄さんやおっさんやコ  
ワモテさんや金髪。他の兵士やランカーまでも、あたしに気付いた  
人はみんな啞然としてあたしを見てる。

ぎぎい。さつき斬り付けにいったデカ犬に目を戻した。

その、あたしに振り上げられた爪の先に。何やらキラリと光る物  
体。

……見る影も無く、キレーにひしゃげてる。アレは、  
紛れも無く。

ぷっちん。

「……………ふ、ふふ、ふふふ」

『……………ま、まぬ？』

「うふふふふふふふ」

『ひいつ！？マヌが壊れた！？』

「うふふふふ……………ごらテム何ってコトしてくれやがったこんの  
駄犬んんあああああ！！！！」

ぐわしい！！とメーレの胴体を掴む。

そして大きく振りかぶり……………

『……………ま、まさか、ちょ、マヌ、止め』

「アレひとつ作るのにつ、どんだけの時間が掛かったとおおおお  
お！！」

あたしのつ、あたしの血と涙と汗の結晶つをををおおおお  
……………

『ぎゃー……………』

「何やってんだお前は……………？」

きゅーん！！と飛んでく白いまふまふ。

あたしはおっさんの素っ頓狂な声にハタと我に返った。

そして投げられたメーレはといえば。

見事に叩き落とされた。ハエ叩きみたいにぺちつと。

しかもぶちつて踏まれた。あ、ぐりつて捻り入れられた。

美味しそうじゃなかったそーですよ良かったねメーレ。

「お前っ!? 猫を投げてどうす」

「……いいつつまでも汚ねえ足乗っけてんじやつ、ぬえー！ー！  
っつ！ー！ー！」

「「「なっ!??!?」「」」

踏んだデカ犬の足の下から、ぐぐくと銀の塊が盛り上がってデカ犬を転がした。

周囲はイキナリ増えた新種の魔獣に啞然ポー然。

そんな中、メーレはタタンと軽やかにデカ犬から距離を取って、  
がるとあたしを睨み付ける。ちよつと涙目だ。

「うおいコラてめマヌー！いきなり投げんなよ鬼かよお前!?!」

「おれが許可する!! 思う存分暴れてその駄犬ギツタンギツタンの  
メツタメタにしちやいなさいメーレ!!」

「聞けよをいつ!?!」

「斃せたら今日の夕食にお菓子一品追加あ!!」

「ぐっ!! だつたまされねえぞ!!」

「モチロンおれの手作りだあ!!」

「うおらソコの飢餓犬ドモ!! 俺が相手だ纏めてブツ潰してやる!  
! 掛かって来いやあ!!」

ふっ、ちよろ甘ですね。

って、おっと危ない何処ぞの陰険メガネの口癖が映った。

「……………アレって、アレも魔獣だよ……………?」

「……………最上位の魔族が、手作りお菓子って……………」

聞こえない!! あたしは何にも聞こえない!!

「メーレ！！取り敢えず1匹だけに集中！！確実に足止めするんだよ、良いね！！」

「お菓子はっ！！」

「生きてたら5品作っただげる！！」

「うおおママ又太っ腹ーあ！！」

「とゆるワケで！！左の1匹はアンタ等で頼むよ！！コッチもソレ程余力はないからね！！」

「ちよっ貴様待っ」

待ちません。

あたし達がこーしてる間にも、デカ犬共はのっそのっそと。動きは鈍いけど街に向かおうとしてるんだ。

今現在のあたしの魔力は、縄張りにいた時のおかーさまの半分。更にメーレに半分流して、縄張りにいた時のお子様達よりも少ない。

デカ犬の魔力をかなり下回ってて、時間が経てば経つほどあたしとメーレは不利になる。

そっこーで大打撃を与えなきゃならない。

背後から飛ぶ制止の声を右から左に流して。

あたしは右の耳朶、ふたつのリング型ピアスに指を這わせた。

）・）・）・）・）

走る。

メーレが1匹を、王子サマ達がもう1匹を牽制してる間、恐慌状態から脱した小物ドモの間を縦横無尽に。

走るたびに振り上げ横薙ぎにした大鎌が、魔物の首を胴を跳ね飛ばす。

そんなあたしを包むのは赤い光。展開された魔方陣。  
紡ぐ、詩の魔法。

「マ又っ、まだか!？」

もーちよつと!!

きいん、と耳元で耳鳴りにも似た音。淡く赤く発光し出したひとつ目のピアスに、指を掛け。

ぴんっ、と。軽やかに外れた。

瞬間、ドンツと跳ね上がる潜在魔力。

「まずひとおっ!!コレでどーだいメーレ!!」

「ムリ!!まだ足んねー!!」

うんまー解ってたけどねっ!!

封印具ひとつ。ホントならコレでおかーさまと同等な魔力。

だけど半分メーレに持ってかれてるから、おかーさまをちょこつと下回るだけのデカ犬相手に、足りないのはトーゼン。

せめて後ひとつ。余裕を持って、ふたつは外したい。

……………なのは何であたしこの封印ピアス外す条件、詩魔法を一言一句一切の間違え無しのカンゼン熱唱にしたんだろっ……………

ふたつ目の詩を紡ぎ出す。魔方陣が一回り大きくなって、色が赤

から淡い紫に変わる。

歌ってる間は他の魔法なんて使えないし、リズムを狂わさない程度の集中は必要。一回でも噛んだら最初からやり直し。

しかも小物はコツチの状況お構いムシで突っ込んでくる。

いや、歌いながら戦うのってキツイわマジで。

足を止めて、鎌を振り回す。振り回しながら、謡う。魔方陣の色が徐々に濃くなっていく。

兵士さんランカーさん達は、あたしが何かでつかい魔術を使う、とでも思ってるんだらう。巻き込まれちゃ適わん、ってばかりに遠巻きなトコで小物狩ってる。

おっさんとかコワモテさんとか、あと金髪なんかは近付きたそーにしてたけど、小物よりもデカ犬の方で手いっぱい。

きん、魔方陣と一緒に何時しか紫に発光してたピアスが、軽やかな音を立てた。

よし！！あとひとつ！！

「っ！！マヌ！！ってコラ待て駄犬てめえ！！」

メーレの怒号が聞こえた。慌てて振り返ってみれば……げげっっ！！バカ犬一匹コツチに突進してくるじゃあぁーりませんか！？

「ちよっ、メーレちゃんと足止めしとけっつたでしょー！？」

思わず背中から羽根バツサリ出して、空に逃げた。

あつぶな……もお少して掠るトコだった。

「んな事いったってアイツ無理！！マジあり得ねえ！！魔力全っ部喰われる！！どんだけ飢えてんだ！？」

「無理もへちマもないっ！！とにかく今おれに近付けんたってのッ

「うおお!?!?」

火の球!!

直径1メートルはありそなソレが飛んできて、思わず羽根でブロツク!!

「マヌっ!?!?」

「~~~~っ!!! なっ……めんなあ!!」

魔力にモノ言わせて気合一発。ゼーゼー荒い息を繰り返しながらチランと見たら……うあ、見るんじゃなかった。もー見事なくらいに片羽根がスタボロになってる。

飛び続ける事も出来なくなって、ヨロヨロと地面に着地……とか思ったら、またもや飛んでくる火の塊!!

「止め風!!」

間一髪で風の壁を形成、火の塊のイキオイを反らして空に打ち上げる!!

「って、何で目の前で大口開けたデカ犬!?

「俺の契約者につ、ナニしゃがんだーっ!!」

そのデカ犬の横っ腹に、頭突きかまして吹っ飛ばすメーレ。バチバチと毛が放電してます。

「ただど吹っ飛ばされたデカ犬は、メーレになんか興味アリマセンって感じで。あたしを見据えてダラダラ涎を垂らす。」

「ちょっとあたしもしかしてターゲットロックオンされてる!?

思わず口元がヒキツと引き攣つて、背中なんて冷や汗ダラダラ。遠方で、チマチマと王子サマ率いる騎士さん達やお兄さん率いるランカーさん達が相手にしてたもう一匹も、何故かあたしに向かつて突進体制入ってる。

「……臭ウ、臭ウゾ……良質ナ魔力ノ臭イ……」

「……極上ノ魂ノ匂イ……神域ノ御霊ノ匂イ……」

「喰ワセロ！！ソノ血ヲ肉ヲ魔力ヲ魂ヲオオオオ！！」

「喰ワセロ魔ノ宰アアアア！！」

ひいつ！！餌認定されてる！！

しかも何気に神様ってバレてる！？

「主！！許可を！！」

っ、金髪！？

おまつ、魔獣に単身突っ込むって正気！？

「狂戦士化の許可を！！」

しかもスゴい事言った！！

あたしに突進して来ようとしたデカ犬2匹に横槍入れて、メーレと並んで牽制する金髪が一瞬だけあたしに視線を投げる。

狂戦士化つて、言ったつて！

「もしお前が狂つてっ、その後正気を取り戻す確率はっ！！」

「7割だ！！」

出来れば100%とかつて言葉が欲しかったっ。ただど0よりはマシっ。

「許す！！」

「承知！！ 猫、頼む！！」

「ネコじゃねえっっ！！俺は銀天琥だっっ！！」

そんなの今はどーだってイイでしょーが!!

戦線を離脱した金髪が軽く目を閉じ、すう、と呼吸を整える。  
モチロンそんな無防備な姿を、放っておくホド間抜けな魔物は小物にもいず。

「大地よ!!」

「させるかよ!!と!!」

あたしが魔法で金髪の足元から土の槍を出したと同時。

金髪に飛び掛かって来た小物を薙ぎ倒したのは、お兄さん。

「強い強いとは思っちゃいたが、お前等魔人だったんか!!」

「っ、金髪は確かにそーだけどっ、おれは違うよ!!」

「だったら何だ!!お前さつき髪も目も黒になったるーが!!」

「そーゆー細々した話は後にしてよ!!今どんな状況か解ってる!!  
?」

「そーいやそーだな!!コイツの事は任せろ!!イスター!!てめえも来い!!」

「ありがとうお兄さん!!」

「礼は良い!!後でキツチリ聞いてやる!!逃げんじゃねーぞ!!」

…………… あっはっはっそんなん逃げるに決まってるっしょ。

金髪を傭兵兄弟に任せて羽根をしまう。

そして大鎌をチキリと構え直し。

「王子サマ!!路線変更!!デカ犬ドモの狙いはおれ1人に絞られた!!オタク等は小物ドモの殲滅宜しく!!」

「っ、聞けん!!このまま周囲の魔物を蹴散らしつつ、

魔獣を追撃！！白光騎士団と魔術部隊が増援に来るまで、何としても持ち堪えろ！！」

っておいコラちょっと待てえい。

「デカ犬ドモはおれ等で引き受けるつつってんの！！」

「魔人の言う事など信じられるか！！大体っ、コイツ等が襲って来たのも貴様の手引じゃないのか！？」

かつっ、ちいーんつつ。

「……………ヨシ解った」

ざんつつ。向かって来た緑の巨人を無造作に一刀両断。

「おれ等はおれ等の自由にさせてもらっばさり。再び出した羽根で空へ上昇。」

「　　　巻き込まれても、文句は言うなよ？」

あたしは、据わった目で王子サマを流し見た。

## 21・面倒事はキライだからさっさと逃げます

空中。あたしの周りに、浮かび上がる魔方陣。正確には、ヒュムノスと呼ばれる文字で書かれた、詩方陣だ。

足元頭上左右前後。ナナメ上に下に幾重も幾重も。その数、全部で10個。

……………ピアス全部、取っ払っちゃる。

「げつマヌいくら何でも全部はやべえって！！あといつこでじゅーぶんだって！！」

詩を紡ぐあたしにメーレが引き攣って、デカ犬ドモの攻撃を交わしながら叫ぶ。

聞く耳持たん。

と、ソコで地上に魔力の爆発。本当の爆発じゃなくて、爆発するみたいに魔力が跳ね上がった、って感じ。

ちらん、と見れば。金髪の纏う魔力が倍以上になってた。目も紅い色に変わってる。魔物ドモの濁った赤じゃなくて、ルビーみたいな綺麗な紅だ。どうやら無事、バーサーク化が終わったらしい。

あたしは空の上で右手をひと振り。すると、金髪の目の前にぐさぐさっと剣が2本突き刺さった。

某幻想の星、ランクス。双片手剣の百花繚乱。ゲームではかなり使い込んでましたが何か。

金髪は、狂戦士化したにしてはいつそ静かと呼べる様な面差で、アンビションを地面に刺し。代わりに両手に双剣を手にした。

そして　　メーレが悪戦苦闘してるデカ犬ドモに、突っ込む  
！！

「うおっ！　　魔力は極力叩き込むなよ！？コイツ等属性魔術  
でも食うかなー！」

メーレの助言に、だけど金髪は頷きも返さない。  
まあ、狂戦士化だもんね。言葉通じてるかも危ういよね。

「つかマヌー！お前ホントソレやめろって！！まじシャレんなら  
ねえからー！」

止めるつもりもシャレですますつもりも無いから大丈夫。

「いやだからー！マヌ忘れてね！？  
何をですかい。」

「お前カミサマー！魔の宰ー！お前の制御ナシの神氣なんて俺だっ  
てやべえのにニンゲンが耐えられるワケねえだろ！？下手したらコ  
コ等一帯死体だらけになんぞー！」

.....あ。  
.....あ。  
「.....あ。」

あたしの心の声とメーレの呟きが重なる。

と、同時にぴびんと。全部のピアスが耳から零れ落ちた。

浮かんでいた陣が消える。あたしを中心に、魔力の奔流が渦巻く。  
その嵐の様な魔力に、誰も彼もが足を止めた。

人も、魔物も。全ての視線があたしに集まる。

「.....ふ、ふふふ、うふふふふ」

「.....ま、ままま、まま、まぬ、サン？」

「うふふふふふふ」

ゆうっくりと、持ち上げた腕。更にその先に、大きな魔力が密集する。

イメージするのは、抵抗を考える事すら愚かと思う程の絶対的力。何処へも逃げられぬ、全てを呑み込む驚異。

平原全体が、イキナリ曇った様に薄暗くなる。太陽の光が遮られたからだ。

誰もが、空を見て言葉を失くし、顔色を悪くする。デカ犬ドモすら、ボー然だ。

ソコにあるのは炎の、氷の、雷の、土の。一本一本が鉄をも貫き岩をも砕く、無数の剣。

「うふふふふ……… ナニでつかい声で人様の正体バラしてやがる  
こんのバカ猫おおおおおおお!!」

「にゃぎゃー………っつ!!!!」

翳していた右腕を、容赦無く空かさず振り落とす!!

どががががつつ!!

雨の様に振って来る魔法の剣に、メーレは逃げた。

けど、タダ逃げるのでなく、先ずはデカ犬ドモに突進して巻き込んで、トバッチリを受けた金髪やらお兄さんやらコワモテさんを啜えて放り投げて背中に器用に乗せて、縦横無尽に縫う様に駆け抜ける。

そして、逃げたのは何もメーレだけでなく。

周囲にいた魔物も人も、巻き込まれちゃ適わんとばかりに遠ざかる。

時間としては1分も無かっただろう。剣の集中豪雨を受けたその場所は、見るも無残に地面が抉れていた。ちなみに、メーレにもデカ犬ドモにも1本も当たってない。

「……ちつ。当たれば良かったのに」

「舌打ち!? しかも怖え事言った!」

「つか俺等まで巻き込むなよ!」

「巻き込まれても文句は言うなとさっき言った。恨むならおれ等とソコのデカ犬ドモを同一視した王子サマを恨めや……あとメーレお前今日のオヤツ抜き」

「のおおおお!! ソレだけは!! ソレだけはお許しをー!!」

「……オヤツ抜きで平伏する魔獣って……」

「……これが本当にあの銀天琥だというのか……」

ふっ、幻想は壊れる為にあるモノなのだよお兄さんコワモテさん。まあソレはイイ。怒鳴ったおかげでちょっとはスッキリした。

「さてソコの駄犬ドモ」

あたしは、ぐりん、とこっそり抜き足差し足で森の中に逃げようとしたデカ犬ドモに向き直る。

びくううっ!! と飛び上がった2匹は、しゅぱっ!! とあたしに向けて伏せの体制をした。

うふふふ何だ! 急にそんなお利口さんになっちゃって。

にいつこり笑いながら、あたしはゆっくり、羽根を出す。

一枚、一枚。これ見よがしに、見せ付ける様に。

サスガに、メーレの言ってた事も一理あるから、出すたんびに気配遮断の魔法も添えて。



落ちた刃。周りを覆うまでの閃光。  
そして、魔獣の咆哮。

閃光が消えた時、ソコにあったのはクレーターだけだった。

ガツツリと浅めの丸い皿みたいに凹んで、けど何にもない。  
デカ犬ドモは、骨すら残さず塵になったのだ。

ふふん。あたしを食いたいならもつと胃袋じょーぶにして来い！

スツキリしながら、あたしはストンと地面に降りる。金髪が刺したアンビシオンの真横に。

そして、剣を回収してメーレに向かう。

周りは固まったまま何も言わない。人も、魔物も。石化したみたいに固まったまま、目だけをあたしに向けてくる。

……ああ、そうそう。

「おい小物ドモ」

ぴたり、と足を止めてちらんと流し見ると、古今東西、多種多様な魔物達がビクウ！！と震え上がった。

そんなヤツ等に、あたしはすう、と右腕を上げ、森を指差す。  
そして。

「Go Home!!!」

イキナリ魔物達が動き出した。みんな近くにいた人なんて目も向けず、一目散に走って行く。モチロン森に。

あまりに迅速なその撤退に、王子サマ含め皆さん唾然ボー然だ。

そんな魔物の後ろ姿と大口開けてる人達を見て。あたしは再びメーレの元へと向かう。

再び訪れたのは静寂。誰の視線にも、浮かぶのは恐怖と警戒。あたしの一挙一動に緊張して。

「メーレ」

「まっまぬ!!ごめん俺謝るから!!だからオヤツだけは!!オヤツだけは!!」

……………あ。なんか緊張がドツと脱力に変わった。

「あーハイハイ。後でぶりん作っただげるから、猫に変化して」

「ほっ、ホントか!？」

「ホントホント」

「ホントのホントにホントか!？」

「はいはい、ホントですよ」

「ホントのホントの、ホントにホントか!？」

「もーえーわ」

「にぎや!？」

ずびしっ。脳天チヨップかましたらすっげ痛そうに悶えました。

そんな力入れてないのに大げさな。

取り敢えず首根っこ、とゆうーか着けてた首輪を引っ掴み。強制的に猫の姿にさせてみる。

そして見下ろす。メーレがイキナリちっちゃくなって、背中から放り出されたお兄さんとコワモテさんと金髪を。

無様に落ちて尾てい骨強打した様に内心クケケ……………いやいやいや。

「金髪」

短く呼ぶ。目の色は何時の間にか戻ってる。狂戦士化が解かれた証拠だろう。ぱちくり、と目を瞬かせてあたしを見上げる様は、年も性別も超越して何となくかわゆらしげぶごふんっつ。

「金髪、おいで」

2度目の呼び掛けに、やっと金髪はハツとした様に立ち上がった。そして、小走りで近付いてくる。

「先ずは剣、回収させて貰うから」

「……………あ、ああ」

あたしの言葉に、困惑した様子で手にした剣を差し出してくる。サスガ、Sランクだけあって、刃毀れひとつ起こしてない。キレイなモンだ。

その双剣と一緒に、ついでに大鎌も腕輪にしまっ。首根っこ掴んだままのメーレを肩に追い遣って。

「……………マ、<sup>マスター</sup>主？」

金髪が裏返った声を出した。そりゃそーか。イキナリ腰掴まれて引き寄せられたりなんかしたら。

ただどあたしはがっしりしっかり、金髪を抱き締めたまま。

「お兄さん」

「……………何だ？」

「はいコレ」

ぴっ、とお兄さんにあるモノを投げる。

お兄さんは訝しげに、危なげなくソレを受け止めて。

「コイツは……、つつ!?!?」  
「おれのギルドカード」

そう。あたしがお兄さんに投げたのは、あたしのギルドカード。  
しかもドコモ隠してない、上から下まで全部載ってる、正規状態  
な。

「ソレでおれが魔族じゃないって証明にはなるっしょ?」

「……マジでか……いや、偽造……」

「本気で言ってる?カードの表示を管理してんのは『記録ラルの神フォード』よ  
?」

あ。絶句。

お兄さんの後ろから覗き込んだコワモテさんも、絶句。

「おいゲイザー、どうした、一体何だという、ん……」

ソロソロと近付いて来た王子サマも、お兄さんが手にしてるモノ  
を見て目を見開いた。

その目が、あたしにギチギチと向けられる。王子サマだけでなく、  
お兄さんのも。コワモテさんのも。

そんな見るからにし・ん・じ・ら・ねーん!!!て顔は、次の瞬間、  
ハツとした表情になり。

「も、申し訳!」  
「はいストップ」

王子サマの出鼻を挫く様に、あたしはひらりと手を振った。モチ  
ロン、金髪を抱き寄せてない方の手だ。

「おれ面倒事ダイキライな人だから。いや人じゃないけど。ソレに、人の性質は良く知ってるつもりでね。だからコレまたあんまり好きじゃないんだ  
特に王族貴族なんてのは」

にいつこり。余所行き笑顔を張り付けて。

「つてワケでトズラさせてもらっよ！あでゅー！！」

「えっ？あっ？はああ！？」

「やっぱ逃げんのかよ！？」

あっはっはっ当り前じゃないさそんなの。

ばっさり羽根を広げ、急上昇。

思わず、て感じに金髪がガツシリしがみ付く。

1分と経たずに雲を突き抜け、見下ろした街はジオラマよりもちっちゃん、人なんか黒い点にしか見えない。

……調子乗り過ぎましたすみません。

たっか！！ココ高っっ！！

あ、何だか眩暈が。

『おいおいおいおい！？シツカリしてくれよマヌー！』

うんムリ。メーレー旦元に戻って。

「しっかたねーなーもー」

あたしの肩から飛び降りて、ナニも無いのにあたしの目の前に着地したメーレが、ぐぐんと本来の姿を取り戻す。

あたしはその姿に近付いて、メーレの背中に金髪ごとよっこいしよっと座った。

「……………何で……………」

その金髪が、ぼつりと漏らす。

ん？ナニが何で？

「……………何故、オレを連れてきた？」

「え。だってお前おれの奴隷っしょ？」

そりゃ一緒に持つてくさ。

人しかいないど真ん中に、人から忌み嫌われてる魔人族を1人残すなんてそんなオツロシイ事もやりたくないし。

ギルドカードと宿の荷物は諦めた。正体バレた以上、なんか細工してくるだろーし。最悪使えなくなるだろーし。宿に残してる荷物も部屋着用に置いてた数着だけだし。

あたしの返事を聞いて、金髪は押し黙ってしまった。何故。

「取り敢えずマヌ。俺はその羽根しまつてくれる事を希望する」

「ん？ああごめんごめん」

俯いた顔を覗き込んでやろうとして、けどメーレに言われて出してきた羽根をナイナイする。

そして、取つてたピアスを耳に着けた。取り敢えず右側10個だけ。

「んで、コレからどーすんの？おばちゃんトコには戻んねえんだろ？」

「うんまあ。取り敢えずアソコの山にでも身を潜めようか」

指差したのはシュリスタリアの南側。小物ドモがゾロゾロ這い出て来た森。の更に先。

暫くは、人気の無いトコロに隠れる必要があるだろう。

幸い、目標にしたあの山は大きくて、人里からは程遠いっぽい。

「あーあ。俺まだ食ってないの色々あつたんだけどなー」

「おまいがあんな大声で言わなきゃまだ誤魔化し様もあつたんじゃないか」

「……………ゴメンナサイ」

しゅーん、と頂垂れたメーレが、ちろんとあたしを見る。

そんなメーレの頭をウリウリとかき混ぜて。

「取り敢えず行こう。イイ加減地面が恋しくなってきた」

「うーい」

あたしの言葉に、メーレがてつくてつく歩き出す。

モチロンココは空中で、足の踏み場になる様なモノはない。

「……………あ、の……………」

「うん？」

そろり、と掛けられた声に、目をやった。

……………ををう。ナゼナニどーして上目遣い。

「……………その、お前……………お前は、本当に……………？」

あ。なんか何が聞きたいのか解った。

てゆーかアレを見てまだ納得しないのか。

「ま、疑うのも仕方ないかもだけどね」

ちろちろとあたしを窺って、聞くか聞くまいか躊躇してる金髪。  
そんな彼に、あたしは笑って。

「コレでもちゃんとした、歌って踊れる異界の神様モドキだよ」

答えを返した。

21・面倒事はキライだからさっさと逃げます(後書き)

1章おわり。しばらく充電します……多分ひと月くらい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8348w/>

---

神様モドキの異世界旅行

2011年10月8日22時32分発行